

今山・今宿遺跡

—玄海自転車道建設に伴う遺跡の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集

1981年

福岡市教育委員会

今山・今宿遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集



西方より今津湾をのぞむ(手前が今山)

1981年

福岡市教育委員会



序 文

本市の西部今宿地区には、弥生時代中期の石斧製作址として著名な今山遺跡が所在しています。

今山遺跡は玄武岩製の石斧製作址で、大型蛤刃と呼ぶ磨製石斧が数多く出土しており、これらの石斧は大きさ、形が統一されているところから専業集団が製作したものと考えられること、又この石斧が北部九州各地の遺跡から出土していることから交易品として、広く流通していたことがうかがえるなど貴重な遺跡であります。

本書は、福岡市が西区今宿を起点として、糸島半島を一周する玄海自転車道路を建設するに当り、計画路線の一部が今山遺跡の隣接地を通るため、昭和51年度に発掘調査を実施した際の報告書です。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように磨製石斧の未製品約200点古墳時代の製塙土器・タコ壺等豊富な遺物が出土し、貴重な成果をあげることができました。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において、役立つことを念願いたしますとともに、調査に際してよせられた多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表する次第であります。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

1. 本書は、福岡市土木局道路部道路計画課交通安全施設係が企画した、玄海自転車道路建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和51年7月から8月にかけて行った、埋蔵文化財の事前調査の報告を内容とする。
2. 本報告書を福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集「今山・今宿遺跡」とする。
3. 挿図の縮尺は挿図目次に示すとおりである。
4. 本書の地図は、国土地理院発行2万5千分の1の地形図「福岡西部」と「福岡西南部」の一部(Fig. 1)と、福岡市都市計画図2千5百分の1(Fig. 2・Fig. 9)の地形図を使用している。
5. 本書掲載の出土遺物、各種実測図、各種写真は、福岡市教育委員会文化部文化課と福岡市立歴史資料館に保管されている。
6. 遺物実測図は、特に始刃石斧に注意を払い、表・側面・裏・断面の4方向からの観察結果を示し、始刃石斧の製作技術を客観的に把握できるよう努めた。
7. 遠構実測図は、渡辺一雄・高瀬哲郎・嶋田光一・高瀬久美子・工藤潤子・村田多津江・松田美智子・濱石正子・三島光子・坂田美土里・福井裕一・石黒純一・林義彦・坪多正裕・熊谷隆子が行い、製図は田中克子が行った。
8. 遺物の実測は、渡辺一雄・高瀬哲郎・嶋田光一・田中寿夫・長沼孝・田中克子が行い、製図は津崎弘信・田中寿夫・田中克子・長沼孝が行った。
9. 写真撮影は現場関係を渡辺一雄が、遺物関係および航空写真を白石公高が行った。
10. 本書の編集は、田中寿夫・長沼孝・田中克子の助言を得て、折尾学が行った。
11. 本書の執筆は、折尾学が行った。

今山・今宿遺跡

目 次

	本文頁
I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	4
III. 各地点の調査	
1. 今宿13・14地点	5
(1). 出土遺構	5
(2). 出土遺物	
i. 蔡棺・壺形土器	5
ii. 銅 刃	5
iii. 勾 玉	5
2. 今山42・43地点の調査	
(1). 出土遺構と層序	11
(2). 出土遺物	
i. 弥生式土器と伴出遺物	
一土 器	14
一蛤刃石斧	18
一その他の石器	54
ii. 古墳時代の出土遺物	
一製塙土器	54
一タコ壺	54
一伴出土器	54
V. 小 結	
1. 今山42・43地点出土の蛤刃石斧の分類	58
2. 今宿遺跡と今山遺跡の今後の課題	61

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺の主要遺跡分布図(1/50000).....	2
Fig. 2	今宿13・14地点位置図(1/2500).....	6
Fig. 3	今宿13地点(1/80).....	7
Fig. 4	今宿13地点 1号棗棺(1/25).....	7
Fig. 5	今宿13地点 2号棗棺(1/25).....	7
Fig. 6	今宿13地点出土土器実測図(1・2—1号棗棺 3—2号棗棺1/6 4—1/3).....	8
Fig. 7	今宿14地点(1/120).....	9
Fig. 8	今宿14地点出土銅劍と勾玉(1/2).....	9
Fig. 9	今山42・43地点位置図(1/2500).....	10
Fig. 10	各区のトレンチの断面土層図(1/100).....	13
Fig. 11	今山42・43地点出土土器(1/4 9—12が42地点).....	15
Fig. 12	今山42地点出土土器(1/4).....	16
Fig. 13	今山42・43地点出土土器(1/4 4・6・8が43地点).....	17
Fig. 14	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 2が42地点).....	19
Fig. 15	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 5が42地点).....	20
Fig. 16	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	21
Fig. 17	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	22
Fig. 18	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	23
Fig. 19	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 20・23が42地点).....	24
Fig. 20	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 24が42地点).....	25
Fig. 21	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	26
Fig. 22	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	27
Fig. 23	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 35が42地点).....	28
Fig. 24	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 40・41が42地点).....	29
Fig. 25	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 45が42地点).....	30
Fig. 26	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 54が42地点).....	31
Fig. 27	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	32
Fig. 28	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	33
Fig. 29	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	34
Fig. 30	今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 78・81が42地点).....	35
Fig. 31	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	36
Fig. 32	今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	37

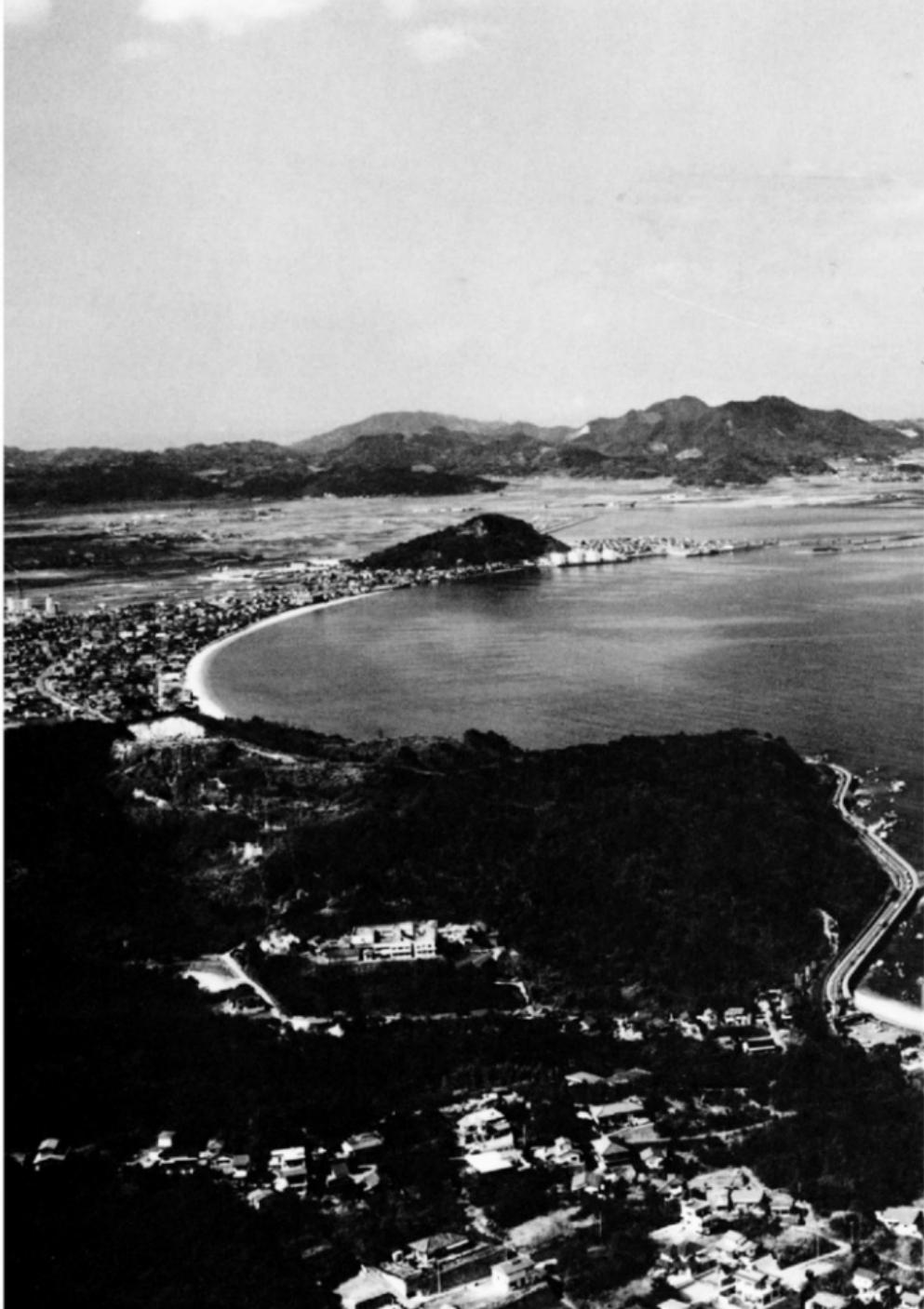
Fig.33 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	38
Fig.34 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 101が42地点).....	39
Fig.35 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	40
Fig.36 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 110が42地点).....	41
Fig.37 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 116が42地点).....	42
Fig.38 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	43
Fig.39 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	44
Fig.40 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	45
Fig.41 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	46
Fig.42 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 149が42地点).....	47
Fig.43 今山43地点出土の石斧未製品(1/4).....	48
Fig.44 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4).....	49
Fig.45 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/2 162が43地点).....	50
Fig.46 今山42・43地点出土の各種石器(1/4 164・166が42地点).....	51
Fig.47 今山43地点出土の敲打用石器(1/4).....	52
Fig.48 今山43地点出土の各種石器(1/4 191が42地点).....	53
Fig.49 今山42・43地点出土のタコ壺形土器(1/3 8・21が43地点).....	55
Fig.50 今山42・43地点出土の製塙土器と土師器と須恵器(1/3 7・8が43地点).....	56
Fig.51 今山42・43地点出土の土師器(1/3 1~3が43地点).....	57
Fig.52 蛇刃石斧の分類と石斧の部分名称.....	58

図 版 目 次

- P L . 1 (1). 今宿・今山遺跡遠望(中央右端が今山) (2). 今宿13・14地点調査風景
 (3). 上一カメ館 (4). 下左一勾玉 (5). 下右一銅劍の出土状況
- P L . 2 (1). 42地点遠景 (2). 43地点実測風景 (3). 遺物出土状況(42地点)
 (4). 製塙土器と土師器(43地点)
- P L . 3 (1). 43地点・出土状況遠景 (2). 石斧出土状況(43地点) (3). 石斧出土状況(43地点)
 (4). 弦生式土器片出土状況(43地点) (5). 疑石出土状況(43地点)
- P L . 4 (1). 壺形土器(13地点—Fig.6-4) (2). 壺形土器(13地点—Fig.6-3)
 (3). 細形銅劍と勾玉(14地点—Fig.8) (4). 壺形土器(13地点—Fig.6-1)
- P L . 5 (1). 手培形土器(42地点—Fig.51) (2). 小形タコ壺(42・43地点—Fig.49)

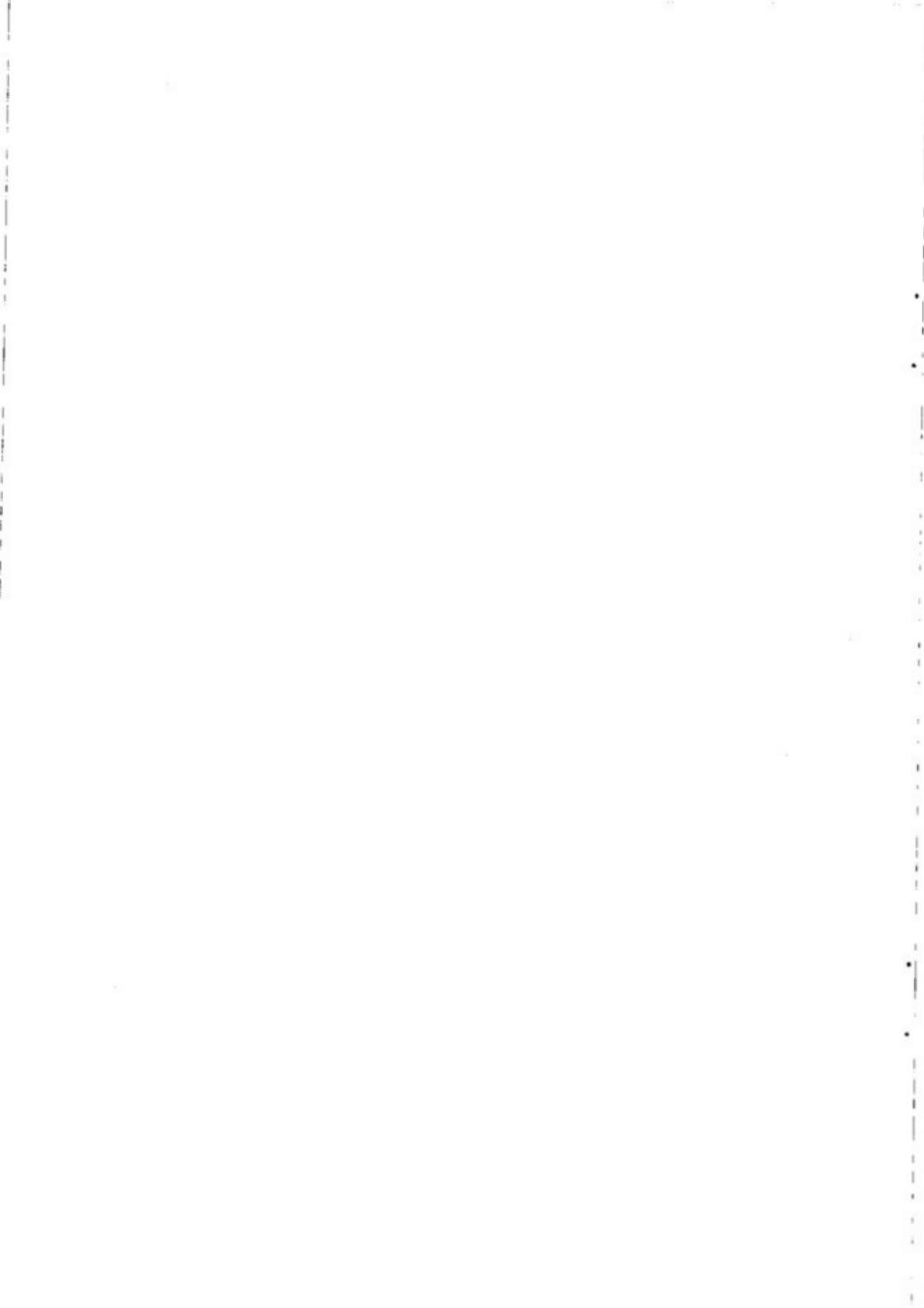
- P L. 6 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 14・15・16)
- P L. 7 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 16—10～Fig. 17—18)
- P L. 8 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 18—19～Fig. 21—27)
- P L. 9 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 21—28～Fig. 23—36)
- P L. 10 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 24—37～Fig. 25—45)
- P L. 11 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 25—46～Fig. 26—54)
- P L. 12 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 26—55～Fig. 27—63)
- P L. 13 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 28—64～Fig. 72)
- P L. 14 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 29—73～Fig. 30—81)
- P L. 15 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 31—82～Fig. 33—90)
- P L. 16 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 33—91～Fig. 34—99)
- P L. 17 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 34—100～Fig. 35—108)
- P L. 18 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 35—109～Fig. 37—117)
- P L. 19 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 37—118～Fig. 39—126)
- P L. 20 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 39—127～Fig. 40—135)
- P L. 21 今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 40—136～Fig. 41—144)
- P L. 22 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 41—145～Fig. 43—153)
- P L. 23 今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 43—154～Fig. 45—162)
- P L. 24 今山42・43地点出土の各種石器(Fig. 45—162～Fig. 47—172)
- P L. 25 今山43地点出土の敲打用石器(Fig. 47)
- P L. 26 今山42・43地点出土の各種石器(Fig. 47・48)







東方よりうは、をのぞ
(湾の左が今山)



I はじめに

中山平次郎先生が1923(大正12)年に当地を踏査されて、今山を世に送り出されてから半世期以上を数えます。弥生時代に分業が有ったとかなかったとか考古学界は騒々しいようです。

孰れにしても、考古学の基礎的作業を積むより仕方がない事と考えられます。今回、玄海自動車道建設に先だつ調査の任が訪れた事を喜びとし、先学の研究に少しでも役立つ資料を提供できればと考えます。末尾乍ら調査に当たって、種々御尽力戴いた元本市会議員板屋猛先生をはじめ横浜地区住民の方々に記して感謝申し上げます。

調査体制

調査委託一福岡市土木局道路部道路計画課交通安全施設係

調査受託一福岡市教育委員会

教育長	西津茂美
文化部長	志鶴幸弘
文化課長	井上剛紀
埋蔵文化財第1係長	三宅安吉
事務担当	岡島洋一
現場担当	折尾学

調査補助

渡辺一雄(現・山口県教育庁文化課)・高瀬哲郎(現・佐賀県教育庁文化課)

鳴田光一(現・飯塚市立博物館)・高瀬久美子(旧姓高山)・工藤潤子・村田多津江
(以上、熊本大学考古学専攻卒)

松田美智子・濱石正子(旧姓小沢)・坂田美土里(以上、桐朋短期大学文化専攻卒)

福井裕一・石黒純一・林義彦(以上、日本大学土木工学専攻卒)

佐藤利秀(大正大学卒)・三島光子(武藏工業大学建築学専攻卒)

坪多正裕・熊谷隆子(以上、明治大学考古学専攻卒)

整理補助

長沼孝(静岡大学考古学専攻卒・現北海道教育庁文化課)

田中寿夫(熊本大学考古学専攻卒・現福岡市教育委員会文化課)

田中克子(熊本大学考古学専攻卒・旧姓安部)・白石公高(写真家)

渡辺一雄・高瀬哲郎・鳴田光一(調査補助に同)・津崎弘信

地元協力者(敬称略・順序不同)

板屋猛・松本守・山下佐都止・板屋豊・板屋篤志・森田ミツエ・松本ヨシ子・

森田久子・吉原ミサヲ・有光アキノ・中島ヒデ子(以上、横浜地区)

能美須賀子・杉村文子・伊藤裕子(以上、石丸地区)

II 遺跡の位置と環境



Fig. 1 周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000)

Fig. 1 周辺の主要遺跡分布図

1. ヤナギノ浦遺跡
 2. ヤナギノ浦古墳
 3. 小塚遺跡
 4. ヘソ塚
 5. 松尾・1号墳
 6. 松尾・2号墳
 7. ロキドー遺跡
 8. 桑原遺跡
 9. 瓜尾貝塚
 10. 長浜貝塚
 11. 野の花学園内遺跡
 12. 野の花学園内遺跡
 13. 野の花学園内南方遺跡
 14. 毘沙門山・1号墳
 15. 毘沙門山・2号墳
 16. 毘沙門山・3号墳
 17. 今津貝塚
 18. 今山遺跡群
 19. 今山古墳
 20. 横浜遺跡
 21. 横浜遺跡
 22. 西松原遺跡
 23. 地蔵尊遺跡
 24. 長垂山古墳群・1~4号墳
 25. 長垂山古墳群・5・6号墳
 26. 油板古墳群
 27. 広石古墳群
 28. 銚崎弥生遺跡
 29. 銚崎古墳群・1号墳
 30. 銚崎古墳群・2号墳
 31. 銚崎古墳群・3~7号墳
 32. 効勧古墳群・8号墳
 33. 効崎古墳群・9号墳
 34. 効崎古墳群・10号墳
 35. 青木遺跡
 36. 三菱電機内遺跡
 37. 今宿小学校前遺跡
 38. 今宿高田遺跡
 39. 今宿大塚古墳
 40. 今宿大塚南古墳
 41. 今宿小塚遺跡
 42. 宮崎安貞碑古墳
 43. 山の鼻・1号墳
 44. 山の鼻・2号墳
 45. 八幡神社古墳
 46. 山崎古墳
 47. 丸限山古墳
 48. 飯氏第1号遺跡
 49. 飯氏第2号遺跡
 50. 飯氏第3号遺跡
 51. 飯氏第4号遺跡
 52. 平田遺跡
 53. 錦原遺跡
 54. 飯氏第I古墳群
 55. 潟戸口遺跡
 56. 千里遺跡
 57. 飯氏第II古墳群
 58. 深谷池遺跡
 59. 宇田川原遺跡
 60. 徳永古墳群
 61. 下谷古墳
 62. 女原古墳群
 63. 奥南坊山頂古墳
 64. 平原古墳群
 65. 小松原古墳群
 66. 新開古墳群
 67. 鐘ツキ古墳群
 68. 谷上古墳群
 69. イヤゾノ古墳群
 70. 相原遺跡
 71. 十瀬池遺跡
 72. 相原古墳群
 73. 上瀬池古墳群
 74. 本村古墳群
 75. 焼山古墳群
 76. 井田用会支石墓
 77. 井田御子守支石墓
 78. 三雲加賀石支石墓
 79. 曽根石ヶ崎支石墓
 80. 平原遺跡
 81. 燻山古墳
 82. 築山古墳
 83. 三雲南小路遺跡

II 遺跡の位置と環境

博多港はその姿を時代と共に変え乍らも、現在なお、風光明媚さ故に、市民に親しまれる湾である。その湾に向かって、福博の街を西より瑞梅寺川、室見川、桶井川、那珂川、御笠川、多々良川が流れる。福博の西端を流れる瑞梅寺川は雷山、西山、王丸山、高祖山の水流を集め、博多湾の西南に在る今津湾へと注いでいる。今津湾は、北の能古島、南の長垂山、西の昆沙門山に囲まれる小湾である。今山、今宿遺跡は昆沙門山と海を挟んである今山と、今山に今津湾の海岸線にそって内陸より運なる砂丘地帯に散在する遺跡に与えられる総称である。

今山、今宿をとりまく歴史的環境を概観すると、縄文時代の遺跡は噂には聞こえるが実体は定かでなく、弥生時代に入ってから、歴史的特徴を際だたせている。

今山遺跡に似て、興味ある遺跡として、昆沙門山から長浜にかけて存在する長浜(Fig. 1・10)・今津(同・17)の両貝塚があり、蛤刀石斧を生産していたと把握されている。⁽¹⁾

今宿・今山遺跡は糸島(怡土志摩)平野の領域にあって、その海岸部に位置すると考えられている。糸島平野は『魏志倭人伝』に言うところの『伊都国』に象徴される『三雲遺跡』(Fig. 1・83)⁽²⁾に代表される。その他、志登支石墓群(Fig. 1 中央右端にある)があつて、今山遺跡出土の石斧⁽³⁾と同様、その墓石の原材料を橄欖石玄武岩に求めている。余談であるが、本地域が如何に玄武岩をその地形の基盤としているかが窺える。又、円形周溝墓に銅鏡を内包する平原遺跡(Fig. 1・80)⁽⁴⁾等は当地の弥生時代の社会構造を発展段階的に把握する重要な遺跡として位置付けられている。

古墳時代に入ると、高祖山塊から派生する北丘陵斜面に、大小様々な古墳が築造されている。九隈山古墳・大塚古墳・若八幡宮古墳等は前・中期の畿内型古墳として知られ、11群 300 余基の後期群集墳の存在は他の地域を圧倒する。⁽⁵⁾

今山地方の地質は橄欖石の小班晶を含む橄欖石玄武岩でおおわれており、その玄武岩は流理構造、柱状節理が発達している。この玄武岩の構造が、今山遺跡の性格を決定させたものであろう。又、弥生時代前・中期の地形は「後永期アトランティック期」の冷涼な気候にあって、海面は現在の海面より最高で7m低かったとされ、今宿の海岩砂洲は未発達で現汀線より200m程奥まっていたと指摘されている。又、現在、今山の西から南にある水田は江戸時代の埋立事業によるものであり、弥生時代には水田では無かったようである。當時今山は内陸との連絡を今宿の細長い砂丘で結ばれていたのである。

(1). 柳出純孝「今津の歴史」今津小学校創立百周年記念「今津」所収 1975

(2). 福岡県教育委員会編「三雲遺跡」福岡県文化財報告書第58集 1980

(3). 文化財保護委員会編「志登支石墓群」1956

(4). 平原遺跡調査団「邪馬台國のナゾにいどむ伊都国王墓展」夕刊フクニチ新聞社 1967

(5). 福岡市教育委員会「九隈山古墳」福岡市埋蔵文化財報告書第10集 1970

III 各地点の調査

- (6). 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財報告書第2集」1971
- (7). 福岡市教育委員会「相原古墳群」福岡市埋蔵文化財報告書第28集 1974
福岡市教育委員会「徳永アラタ古墳群」福岡市埋蔵文化財報告書 1980
- (8). 萩尾忠則「福岡市の地質」1965
- (9). 地団研「有明・不知火海域の第四系」1965

III 各地点の調査

1. 今宿13・14地点 (Fig. 1・Fig. 2)

福岡市の海岸線を西へ国道202号線が唐津方向へ伸びている。生の松原・長垂山を過ぎ、今宿の街に入る。今宿の街から、今津湾ぞいに、県道志摩・前原線が北方へ続いている。その県道の西隣を平行して、国鉄今宿駅からの引っ越し線が今津橋まで伸びていた。その国鉄の軌道敷が、今回の調査対象地域で、現在の玄海自動車道である。結果的に13・14地点が、重要地点として調査対象として残った訳であるが、それまでの調査方法は、地形として遺跡の対象地と思われる所は、全てトレンチを機械によって掘削し遺跡の有無を確認した。今宿13・14地点は、今宿交差点から約300m北へいった所にあって、県道と今宿保育園に挟まれた部分である。本地点付近はミニ開発等により、弥生時代から古墳時代にかけて重要な地域である事は以前から注意されていた地点である。

(1). 出土遺構 (Fig. 3～5・7)

今宿13地点は巾4m×長さ20mの県道志摩・前原線の西隣に平行して、南北に長いトレンチ(Fig. 3)を設定した。今宿14地点は排土作業の関係から、13地点の北隣に、県道平行の巾4m×長さ20mのトレンチ(Fig. 7)を設定したものである。出土遺構は13地点に2基の小児用壺棺(Fig. 4、Fig. 5)と一個の横たわる袋状口縁を有する長頸の壺形土器を検出している。14地点では円形土壙が多数出土しているが、時期は不詳である。細形銅劍と勾玉を出土した土壙は、土層断面の観察から過去の考古学的経験資料から弥生時代の土壙墓と考えて良いだろう。

(2). 出土遺物

— i. 壺棺・壺形土器(Fig. 6) 今宿地点で出土した第1号壺棺は方位をほぼ東西にもち、埋葬された傾斜角度を約40度に計る合口式の壺形棺である。上部形態は胸部と頭部の接合線を打ち欠き、下部形態との接合を容易にするよう配慮されており、下部形態は完全なる形を呈し、胸部中央に一孔を穿っている。上部壺形土器の器高38cm、下部壺形土器の器高49cmで、上下いずれとも器色は赤褐色で、表面に刷毛目の調整痕をもつ。第2号壺棺は方位をほぼ東西に定め、

III 各地点の調査



Fig. 2 今宿13·14地点位置図(1/2,500)

III 各地点の調査

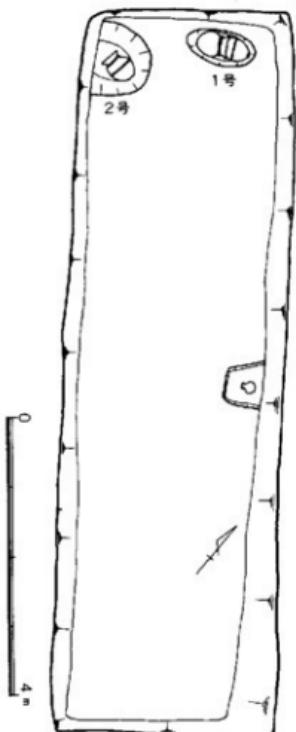


Fig. 3 今宿13地点(1/80)

埋葬傾斜角度を水平に保

つ単式の壺棺である。器色

は赤褐色で、胸部下間に

刷毛目の調査痕をもち、穿たれた一孔をもっている。1・2号壺棺とも、弥生時代中期須玖式土器には到達し得ない、中期前半の形状を有するものと考えられる。横たわって検出された小

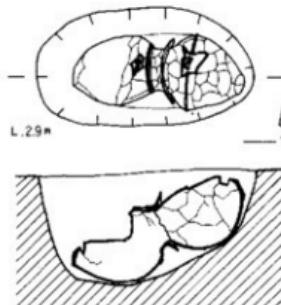


Fig. 4 今宿13地点1号壺棺(1/25)

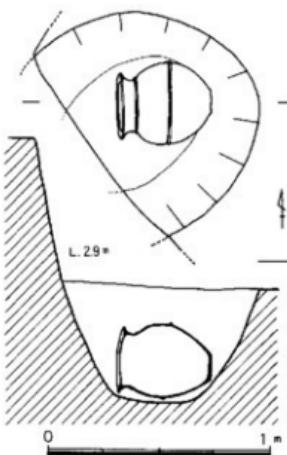


Fig. 5 今宿13地点2号壺棺(1/25)

III 各地点の調査

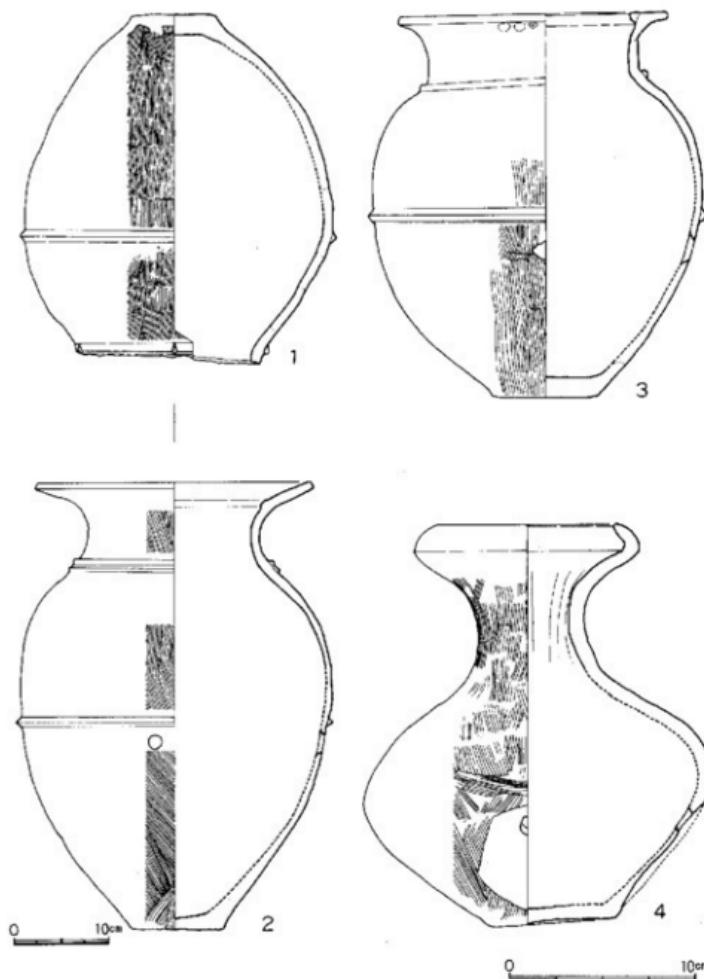


Fig. 6 今宿13地点出土土器実測図(1・2—1号壺棺, 3—2号壺棺1/6, 壺1/3)

III 各地点の調査

形の壺形土器は、器高22cmで袋状の口縁としまりのない長い頸を持ち、器色を赤褐色に保ち、刷毛目の調整痕を残すものである。そして胴部下半を穿孔されている。副葬された土器であるのか、埋葬に直接関係ある施設であるのか、穿たれた一孔に判断が任されていると言えないだろうか。

—Ⅱ. 銅劍 出土状態は劍先を西へ向けて、ほぼ水平に横たわる姿で出土した。遺構は土塙と考えられる。形状から細形銅劍の再加工品である。

—Ⅲ. 勾玉 出土遺構は土塙と考えられ、原材は翡翠と思われる。

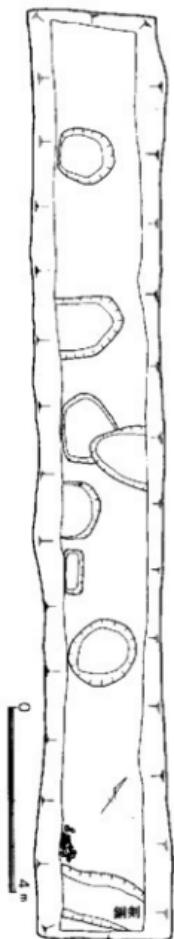


Fig. 7 今宿14地点(1/120)

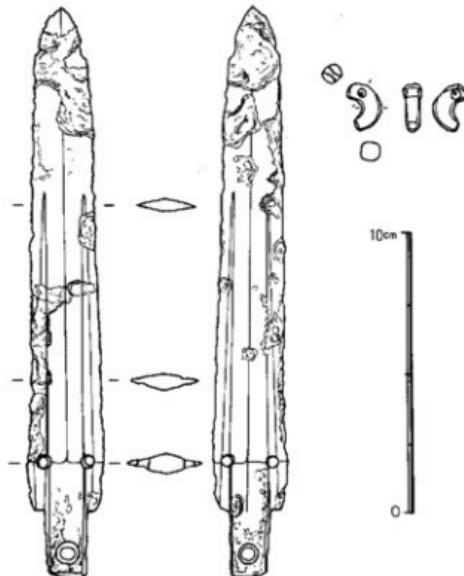


Fig. 8 今宿14地点出土銅劍と勾玉(1/2)

四 各地点の調査

2 今山42・43地点



Fig. 9 今山42・43地点位置図(1/2,500)

III 各地点の調査

本地点は今宿13・14地点より、県道志摩・前原線を、約400m北へ行ったところにある。遺跡は今山の東南麓にあって、今山に在る熊野神社参道入口50m南、横浜交差点から北60mの地点である。中山平次郎氏の踏査以来、先学が呼称されている、今山第2遺跡と同一地点と考えられる。本地点を挟む南北の玄海自動車道建設地盤は綿密に試掘溝を設定し、観察したが、本格的調査を不必要と判断した。

(1) 出土遺構と層序 (Fig. 10)

今山42・43地点の調査目的は弥生時代前半に北部九州一帯に広く分布する蛤刃石斧製作の工房址と、古墳時代に行なわれたとされる製塩の痕を把握するところに問題点をおいたが、平面的観察と土層断面観察に於いても、遺構として把握するには致らなかった。しかし、弥生時代の蛤刃石斧、古墳時代の製塩土器は、伴出土器から、その行なわれた時期をある程度判断できる資料を検出できたことを一応の成果と評価している。又、蛤刃石斧に関しては、原材料産出地であり、石斧製作地とされる当遺跡の実態把握に大きく接近できる資料を検出できたと思っている。

今山42地点は数多くの製塩土器の検出を見、本地点で製塩作業が行なわれた事は疑う余地をさまたない。42地点・西壁を見て説明を加えたい。第Ⅲ層、黒褐色砂層が製塩土器を含む層である。この層は炭化した物質を多量に含み、復元は出来なかつたが一個体分の製塩土器が赤く焼成された状態で出土している。この事から、将来この地点を挟む地域の調査が切望されてならない。又、この第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけて、弥生式土器や玄武岩自然転疊と共に石斧の未製品が検出されている。しかし量としては43地点には遠く及ばない。表土から1m位で第Ⅶ層の白色砂層に届く、この層より下層は坪振りを行なつたが、重厚な文化層には到達できず、調査は終着した。

43地点の検出された遺物はほとんどが石斧製作に関係あるものである。多量に堆積する玄武岩自然転疊に混じって、石斧の未製品と夜臼・板付Iから弥生中期にかけた土器の出土である。土層を観察すれば、Ⅲ層の暗黒色砂層からⅤ層の黒褐色砂混じり粘質土層までが古墳時代の土層である。そのⅢ層からⅤ層にかけて、製塩土器を少々含むが42地点の数量には遠く及ばない。Ⅴ層から自然転疊の玄武岩が見え始めるが、石斧の未製品を包含するのはⅥ層の暗褐色砂層からである。Ⅵ層よりⅨ層の赤褐色砂層は順序よく、上層から調査された訳ではなく、作業手順としてはⅥ層からⅨ層までを、今宿43地点上層ととらえている。この上層からは石斧未製品もさることながら、玄武岩転疊に混入して、その剥片も多量に目に付くようになる。この事実は本地点及びその周辺部に製作工房の存在を考えさせてくれる。またこの上層には弥生時代中期の土器しか見当たらない。Ⅹ層の黄褐色砂層からⅪ層の黒褐色砂層を作業手順では、43地点下層と把握している。下層には少量の夜臼・板付I式土器を含む。

(注) 橋口達也「福岡市今山下遺跡の製塩土器—故中山平次郎博士資料—」九州考古学49・50号1974

近藤義郎「日本塩業史大系」1978

III 各地点の調査

土層説明 (Fig. 10の説明)

13地点・西壁

- I 砂層
- II 茶色砂層
- II' IIより黒色をおびる砂層
- II'' IIより茶色をおびる砂層
- III 黒色砂層
- IV Vより灰色をおびる砂層(斐館の墓址)
- V 白色砂層

14地点・西壁

- I 黒色砂層(小礫・炭化材を含む)
- II 黄褐色砂層
- III やや黒味がかった褐色砂層
- IV 白色砂層
- V 白味がかった褐色砂層
- VI やや赤味がかったこげ茶色砂層
- VI' こげ茶色砂層

14地点・東壁

- I 黒色砂層(小礫・炭化材を含む)
- II 黄褐色砂層
- III 暗褐色砂層(小礫・炭化物を含む)
- VI 白色砂層
- V 明褐色砂層
- VI Vよりやや明るい褐色砂層
- VII 灰色味がかった黄褐色砂層
- VIII 褐色砂層
- IX やや黒味がかった褐色砂層
- X 黑褐色砂層(小礫・炭化材を含む)
- XI やや黄味がかった白色砂層
- XII 黒色砂層
- XIII 褐色砂層(小礫・炭化物を含む)
- XIV 褐色砂層(加層に比べ炭化物を含む量が少ない)

20地点・西壁

- I 砂層
- II 黒色砂層
- II' 茶褐色砂層(炭化物を含む)
- III 黄褐色砂層(炭化物を含む)

42地点・西壁

- I 砂層
- I' 赤褐色砂層(礫は含まれないが、他層より固い)
- II 黄褐色砂層
- III 黑褐色砂層(炭化物を多く含む、裂塩土器)
- IV 黑色砂層(腐蝕土、細かい炭化物をやや含み、細かい土器片を最も多く含む)
- V 茶褐色砂層
- VI 茶褐色砂層(えび茶色の横しまが入り、やや粘質)
- VII 白色砂層

43地点・西壁

- I 表土層、暗黒色砂層(旧鉄道の基盤で多くの礫を含み、水分を含まずもろい)
- II 黄褐色砂層(無遺物)
- II' 暗黄褐色砂層(無遺物)
- III 暗黒色砂層(やや水分を含み、固くしまる。礫、土師器片を含む)
- IV 黑褐色砂層(やや水分を含み、もろい。土師器片を含む)
- V 黑褐色砂層(やや水分を含み、固くしまる。土師器片・玄武岩礫を含む)
- VI 暗褐色砂層(かなり水分を含みもろい。石斧を含む)
- VII 暗黒褐色砂層(砂まじりの粘土質層(やや水分を含み、固くしまる。土師器片・玄武岩礫を含む))
- VIII 黑褐色砂層(ゲンブ岩壁、剣片、かっ石製石錘、弥生土器片を含む)
- IX 黑褐色砂層(ゲンブ岩剣片、弥生土器片)
- X 赤褐色砂層(石斧、弥生土器片、かっ石製品を含む。下層にいくに従いゲンブ岩が多くなる)
- XI 黄褐色砂層(全体的にかなりの水分を含み、もろくずれやすい。黒褐色と黄褐色の縞模様をなす。石斧、板付 I・夜臼式土器片を含む)
- XII 青灰褐色砂層(多量の水分を含みしまっている。石斧、かっ石製石錘、板付 I式土器片を含む)
- XIII 黒色粘質砂層(多量の有機質を含む。無遺物)
- XIV 黑褐色砂層(やや水分を含み固くしまる。無遺物)

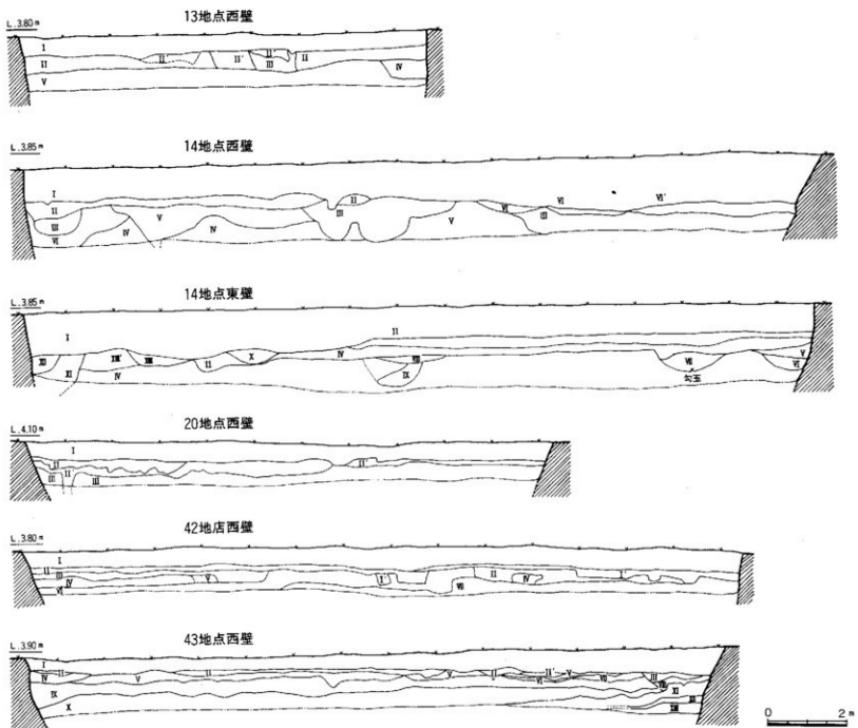


Fig.10 各区のトレンチの断面土層図(1/100)

(2). 出土遺物

i 弥生式土器と伴出遺物(Fig.11~Fig.13)

土器—42地点出土の弥生式土器は、本地点の北端部分で自然転礫の玄武岩やその剥片、及び蛤刃石斧の木製品と共に出土している。そして又、それらの弥生式土器は古墳時代の土師器や製塙土器等と同水準位置で出土している。42地点の土層(Fig.10)で述べれば第Ⅲ層から第Ⅵ層がそれらを包含する土層である。

43地点出土の弥生式土器は42地点の土器に比べ数量は少ないが、多量の自然転礫の玄武岩、及びその剥片、そして蛤刃石斧の木製品と共に出土しており、今山の石斧製作の開始期、石斧の形態的変遷、そしてその終焉を考える上で重要である。43地点の土層図(Fig.10)で第Ⅵ層から第Ⅺ層が弥生式土器を包含する上層である。

42地点・43地点と出土場所を異にする土器群は作業手続きで、調査地点が分割されたという点を考慮すれば、遺跡の性格把握の上から、同一場所出土と考えて良いと判断される。故に、ここで説明を加える土器は地点を考える事なく同一文化領域の一群と考え、説明を進めていきたい。

夜臼・板付I式土器——夜臼式土器と思われる土器は42地点の第X層より出土したもので、数は少量である。Fig.11の2がこれに該当する。この土器は壺形土器の口縁部で、胴部から少し内傾し乍ら立ちあがった口縁部が、その口唇部の内側で軽く突帯を付施される。口唇部の外側には軽く刻目が施され、胴部は横方向に条痕が認められる。板付I式土器は壺形土器と壺形土器とが少量出土している(Fig.11-1・3・4)。壺形土器は外反する口縁部が外側に肥厚し、よく板付I式土器の特徴をとらえている。これら一群の土器は43地点Ⅹ・Ⅺ層で検出されたものである。

板付II式土器——Fig.11-5・6がこの型式に該当する。壺形土器(5)はよく本型式の形を有し、壺形土器(6)は口縁部が直立しようとしているが、少々外彎し、本型式の名残りをとどめる。出土する土層は43地点Ⅶ層からⅪ層までである。

城ノ越式土器——Fig.11-7・8・9とFig.12-4が本型式に含まれる。直立する口縁部がその特色である。

城ノ越式土器>口く須玖I式土器—城ノ越式土器(中期初頭)と須玖I式土器(中期中葉)の中間的形態を有する土器である。描載図化された土器のはほとんどが今山42地点出土の土器(Fig.11-9~12、Fig.12全部)で、今山43地点出土のこの時期のものは2点のみ(Fig.13-24)と考えられる。本型式は埋葬形態である壺棺の編年でいうならば汲田式土器の新しい段階に比定されるが、生活様式の土器の編年としての位置づけは明確ではないようである。

須玖式土器—(Fig.13-2・4を除く全て)中期中葉の形態を表現している土器である。土器の口縁部が平坦になり、その製作的技法は壺・壺形土器の両器形に適用される。

III 各地点の調査

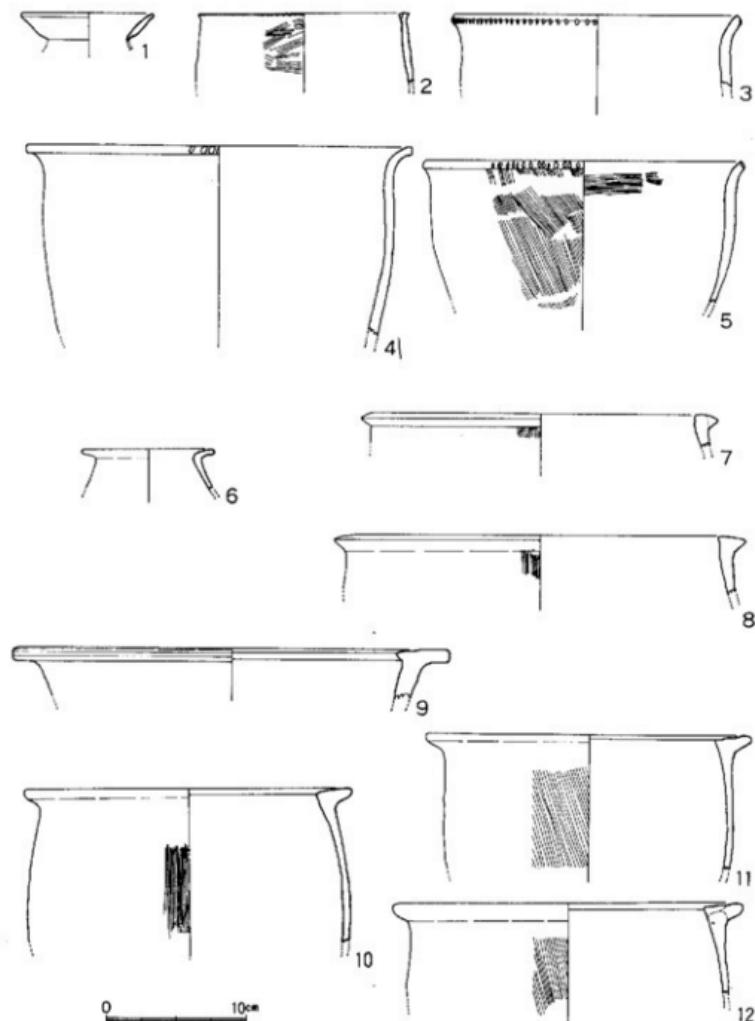


Fig.11 今山42・43地点出土土器(1/4 9~12が42地点)

III 各地点の調査

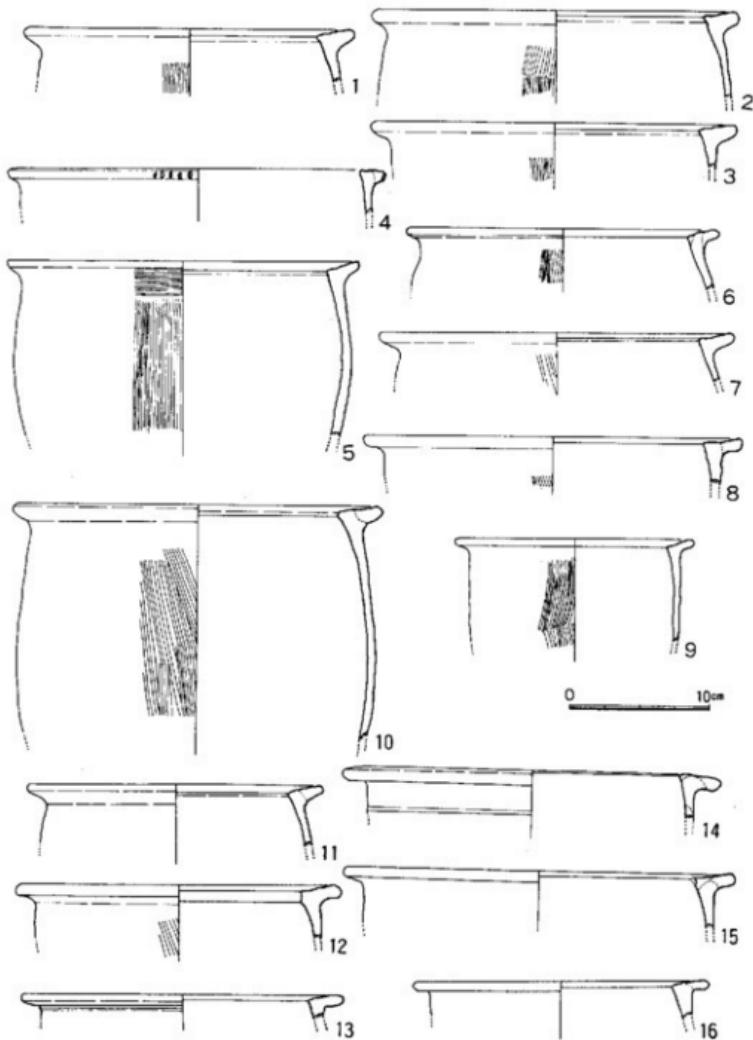


Fig. 12 今山42地点出土土器(1/4)

III 各地点の調査

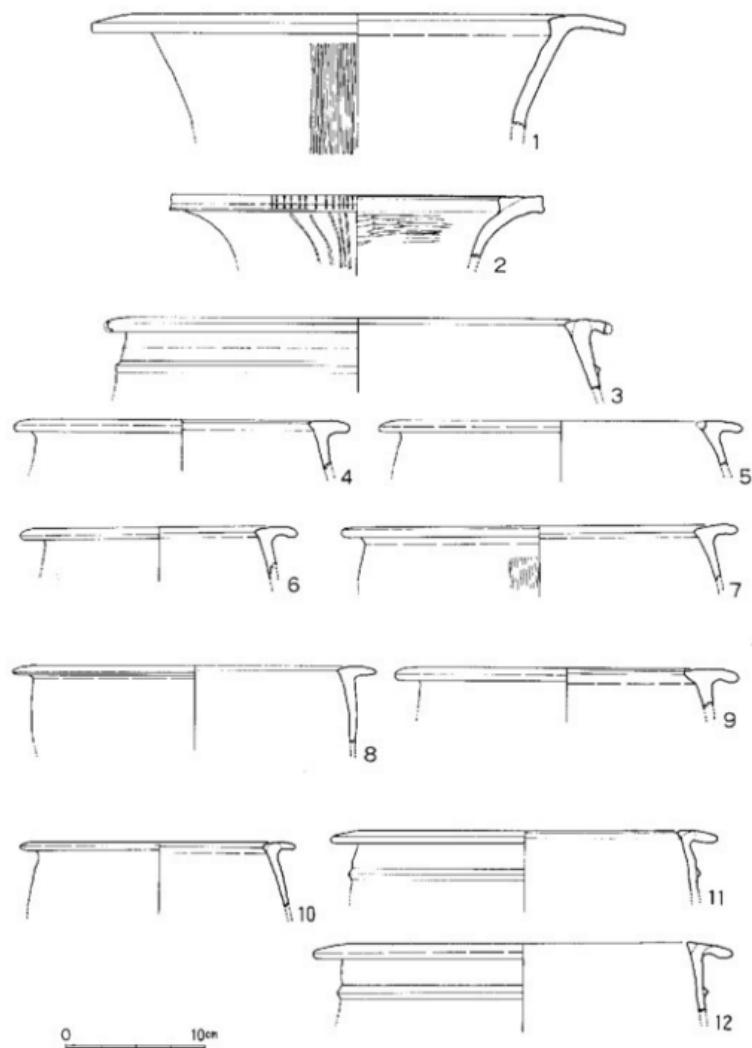


Fig.13 今山42・43地点出土土器(1/4・4・6・8が43地点)

四 各地点の調査

蛤刃石斧 (Fig. 14~Fig. 45までの石斧は通し番号で説明)

今山42・43地点出土の蛤刃石斧は全部で163点ある。剝片まで含めると200点を越えるが、本稿では剝片を除外してある。

過去、中山平次郎以来使用されていた石斧製作工程を基準として、第I工程—粗削・第II工程—打製調整・第III工程—敲打調整・第IV工程—磨研調整に、163点の未製品・半製品の石斧を分類すると以下になる。

第I工程—Fig. 14~1~Fig. 23~36の36個—全体の22.1パーセント

第II工程—Fig. 24~37~Fig. 31~83の47個—全体の28.8パーセント

第III工程—Fig. 32~84~Fig. 44~161の78個—全体の47.9パーセント

第IV工程—Fig. 45~162~163の2個—全体の1.2パーセント

これらの石斧の出土状態は、圧倒的に今山43地点上層 (Fig. 10~43地点土層図のV~VI層)から出土するものが多い¹²が、今山43地点下層(同、X~XI層)のものも、出土各工程に均等に配分されるようである。第I工程の2・5・20・23、第II工程の42・45・54・64・65・74、第III工程の101・109・16・111・149・157・159・160、第IV工程の163の半製品が、今山43地点下層から出土したもので、全体の11.7パーセントにあたる。先述のとおり、今山43地点下層は弥生時代初頭の夜白・板付I式期の層であり、又その上層は弥生前期末から中期中葉の時期の層である。蛤刃石斧は弥生前期が薄身で、中期が太身の太形蛤刃になるという解釈を、今山42・43地点の発掘結果が否定している。¹²

石斧の原材料・素材の選択に関して、今山にある熊野神社裏の玄武岩露頭から剥出されたものと、今山東麓・南麓に分布する転礫堆積地の転礫の使用が早くから指摘されて来たが、今山42・43地点の出土石斧はどのような結果を示すであろうか。I工程に分類された36個の未製石斧を観察するとほとんどが自然面を残している。自然面を残していないのは16・17・20・28の4個のみで、実に90パーセント弱が自然面を残している。II工程を見ると自然面を残さないものは41・43・44・45・50・53・58・61・63・64・69・72・76・79・80・81の16個で、76パーセントが自然面を残している。III工程は、敲打による剝離によって残された陵の漬し作業によって、自然面を見出す事はかなり難しいが、それでも84・86・87・88・89・90・92・93・96・97・99・100・101・102・104・107・110・112・114・115・116・118・119・120・123・134・148の27個が自然面を残し、34.6パーセントを示す。III工程の結果は目的とされる石斧の形態に成形する細部調整のための敲打作業であることを考慮すれば、完成品に近づけば近づく程、素材選出時の表面を残さないのが通常であろう。この観点に立てばIII工程の石斧に残された自然面を有する石斧は多いと言わざるを得ない。自然面残存の有無の観察結果から、素材選択の段階では自然転礫の選別に力点がおかれていた事が分る。この結果は作業工程を考察する上で重要な事である。以上、出土石斧を概観した。

(1). 中山平次郎「今山の石斧製造所址」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第6輯・1931

(2). 下條信行「今山遺跡」福岡市立歴史資料館調査研究報告1・1973

III 各地点の調査

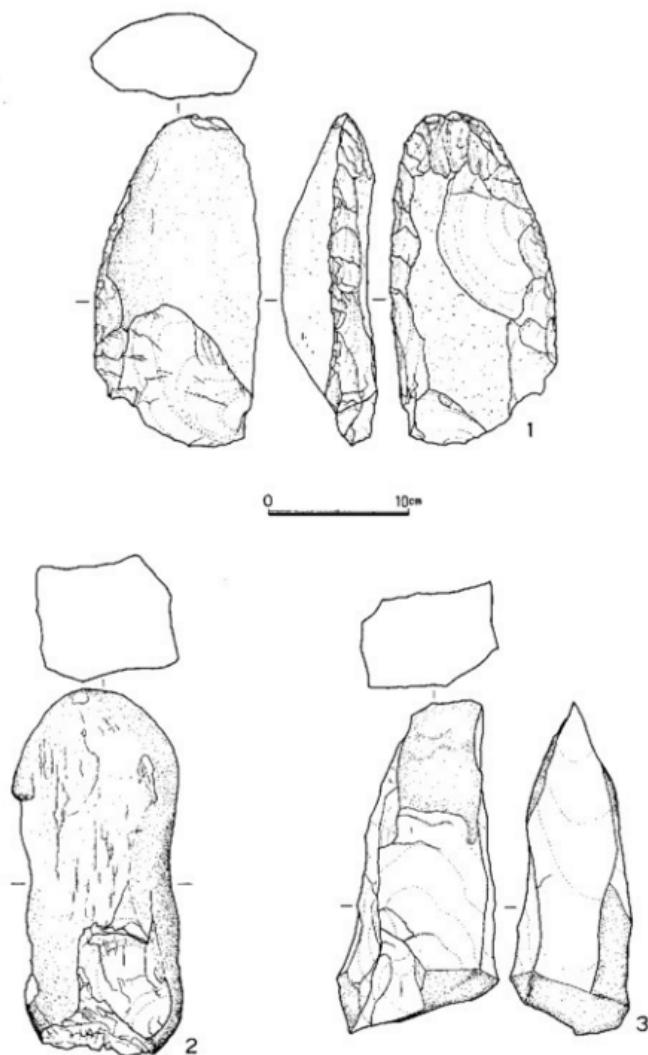


Fig.14 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 2か42地点)

III 各地点の調査

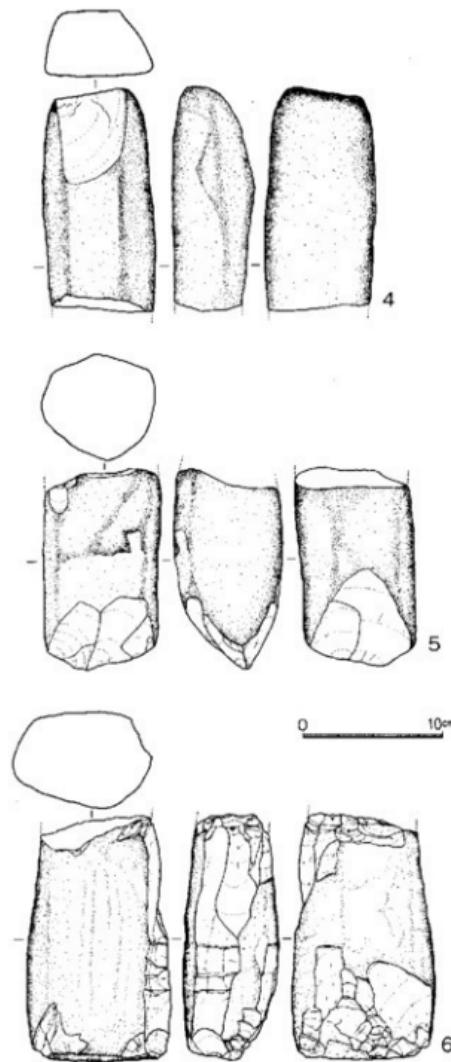


Fig.15 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 5が42地点)

III 各地点の調査

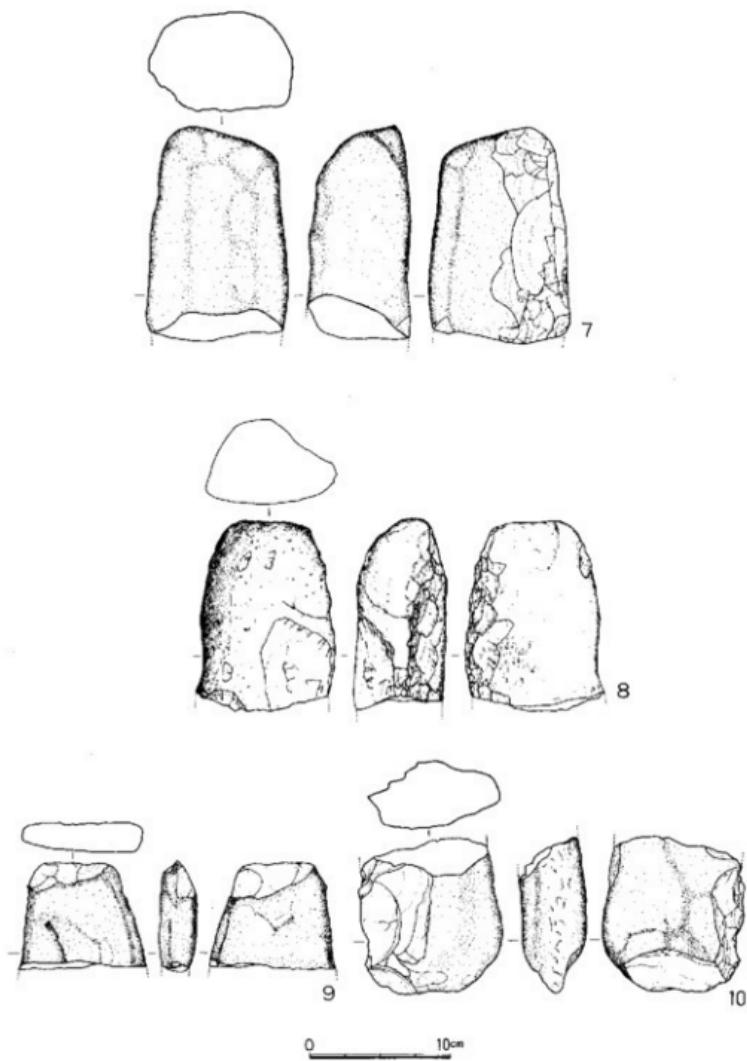


Fig.16 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

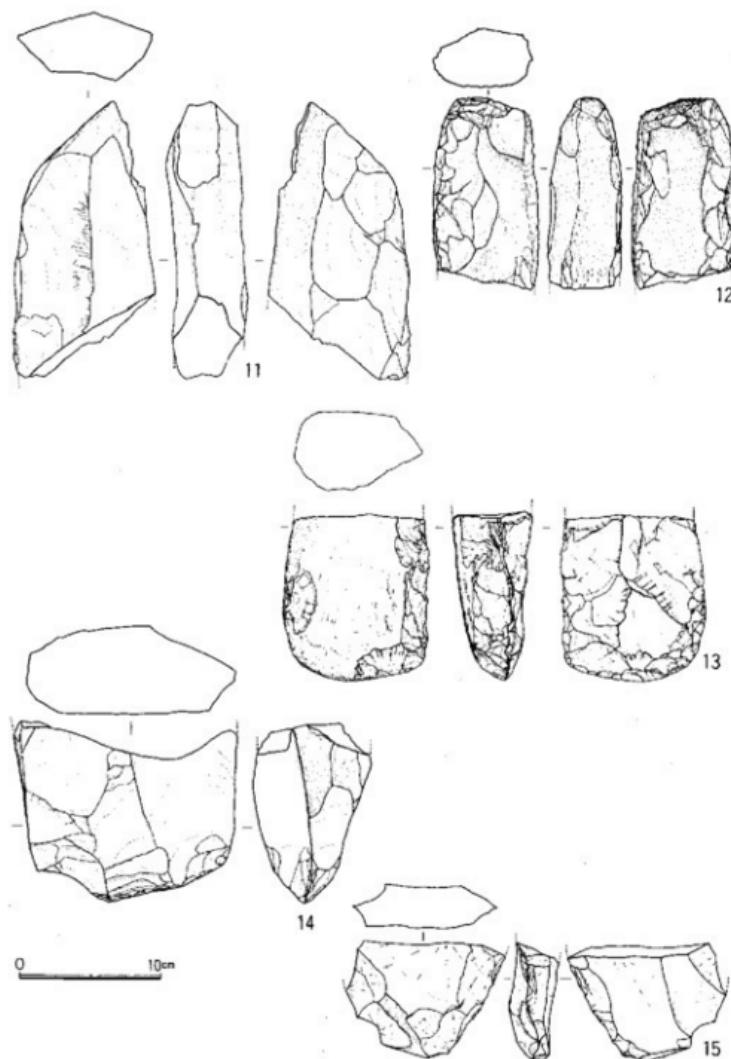


Fig. 17 今山43地点出土の石斧木製品(1/4)

III 各地点の調査

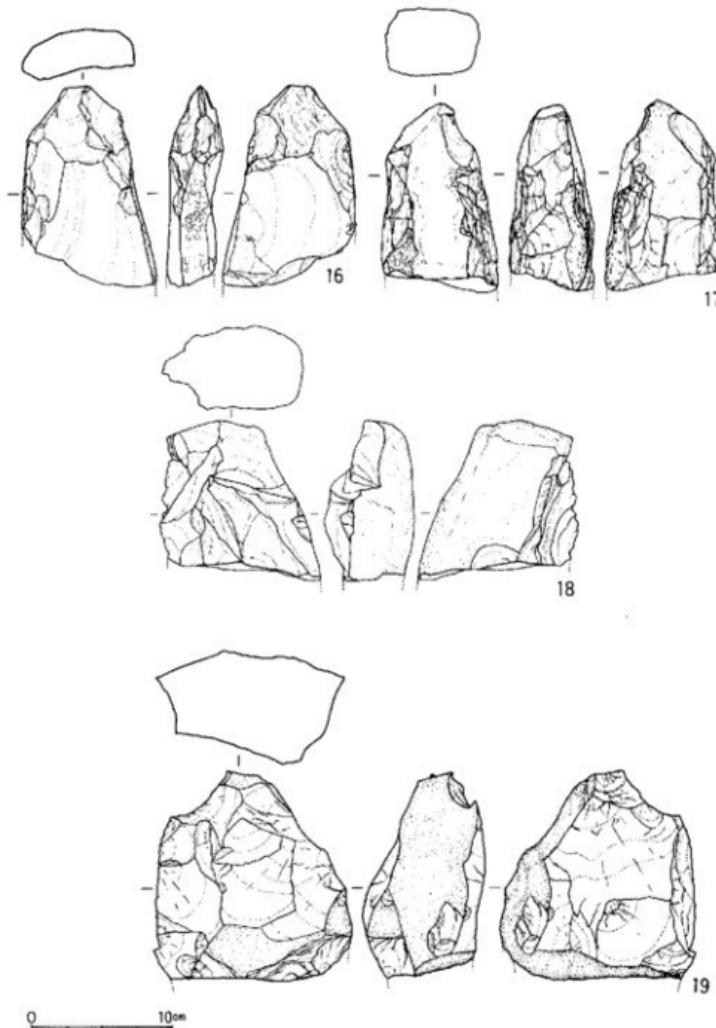


Fig.18 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

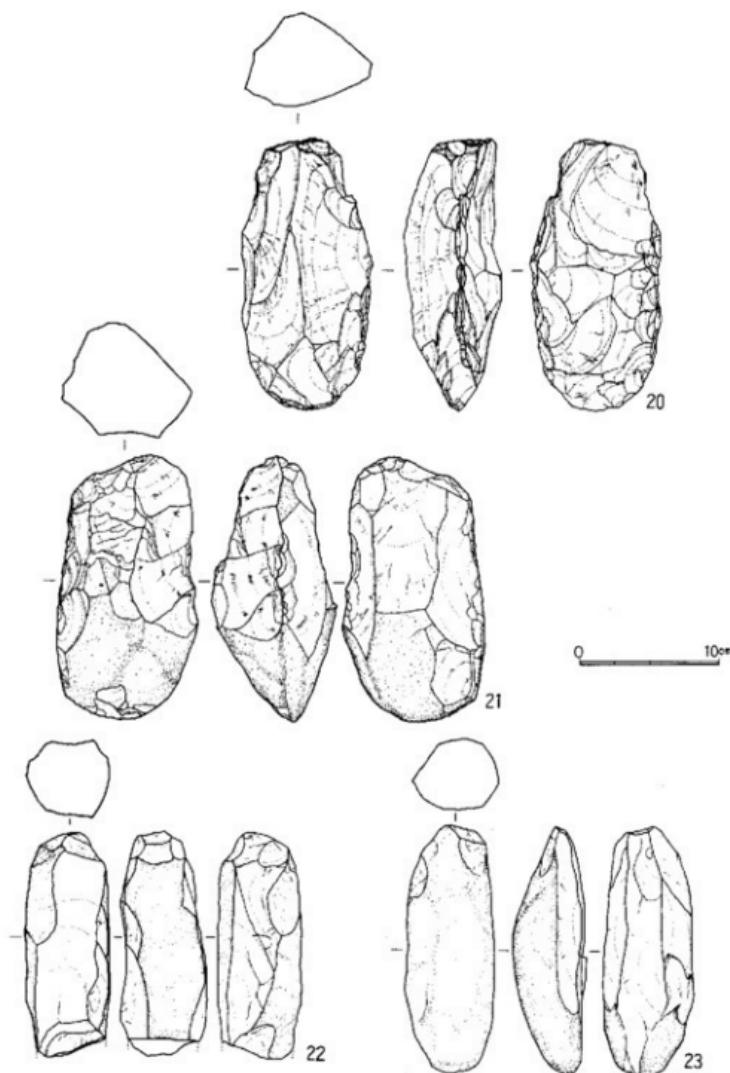


Fig.19 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 20・23が42地点)

III 各地点の調査

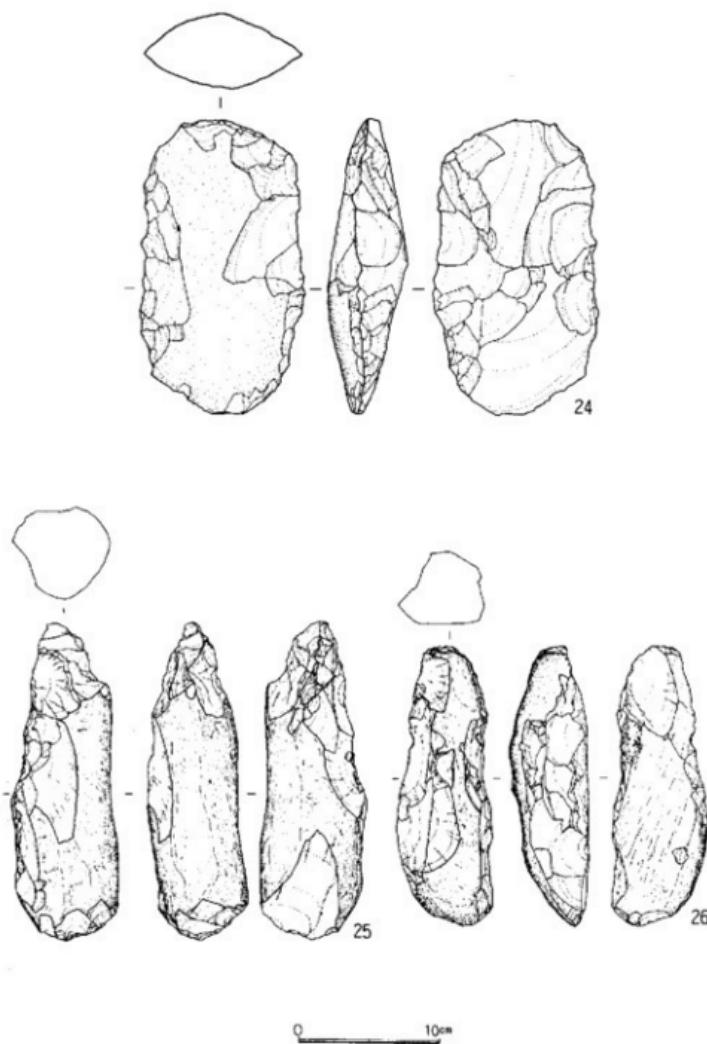


Fig.20 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 24が42地点)

III 各地点の調査

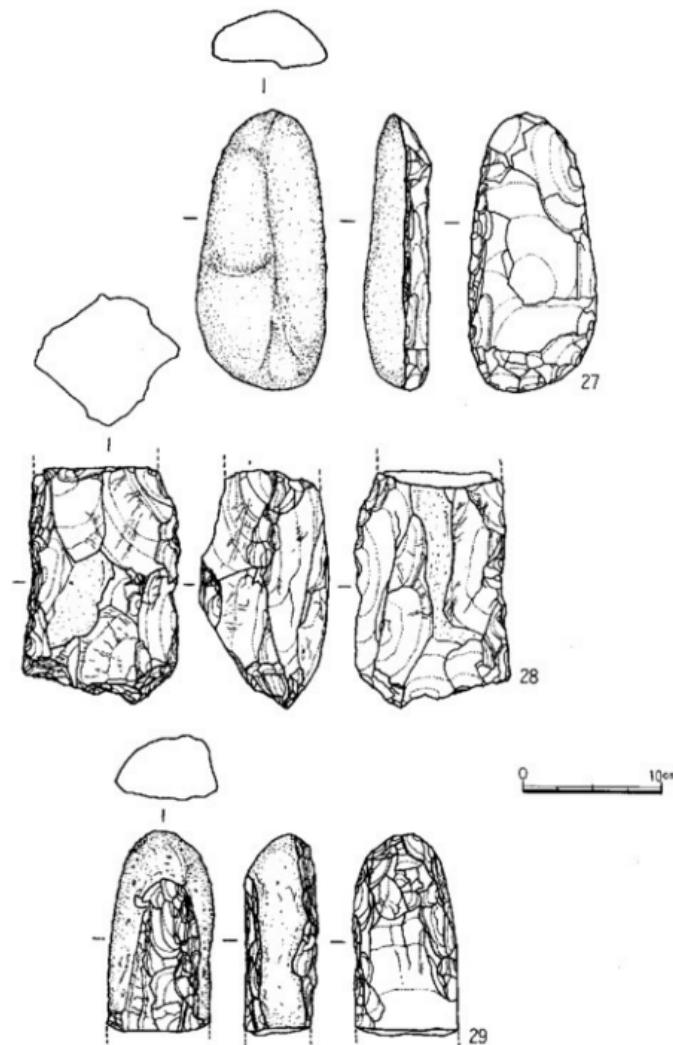


Fig.21 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

田 各地点の調査

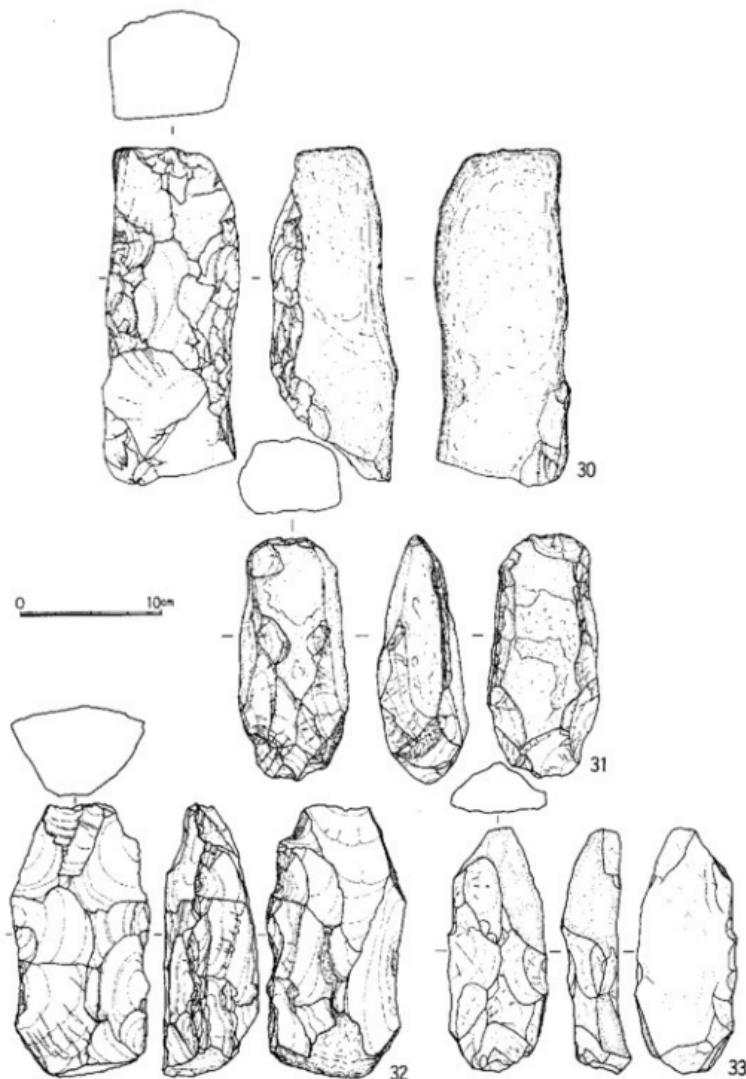
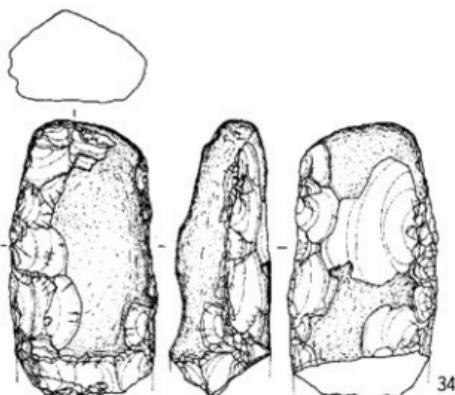
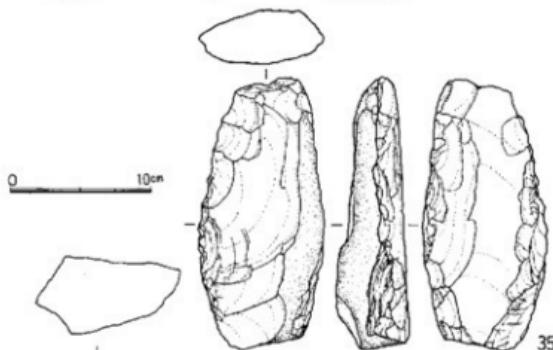


Fig.22 今山43地点出土の石斧木製品(1/4)

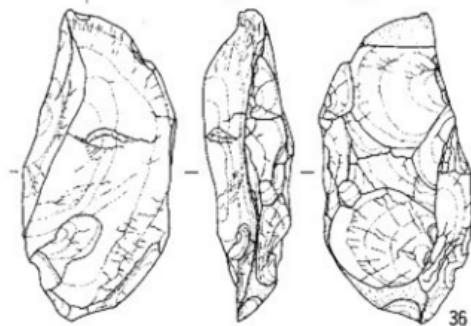
III 各地点の調査



34



35



36

Fig.23 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 35が42地点)

III 各地点の調査

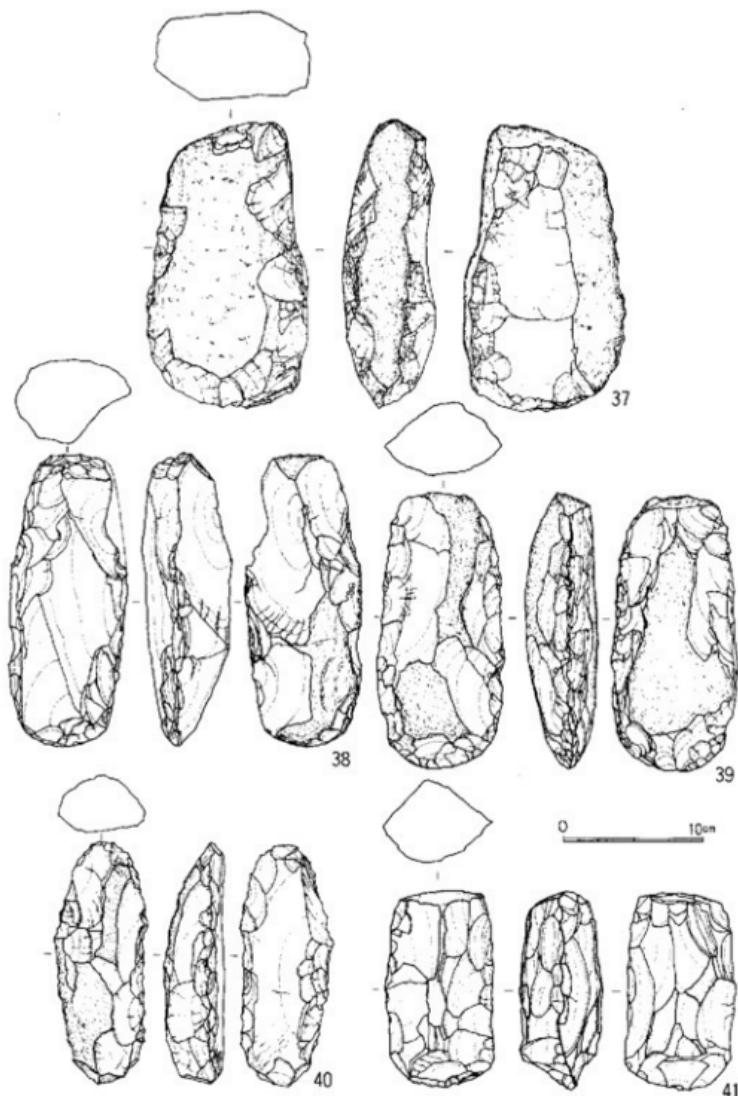


Fig. 24 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 40・41が42地点)

III 各地点の調査

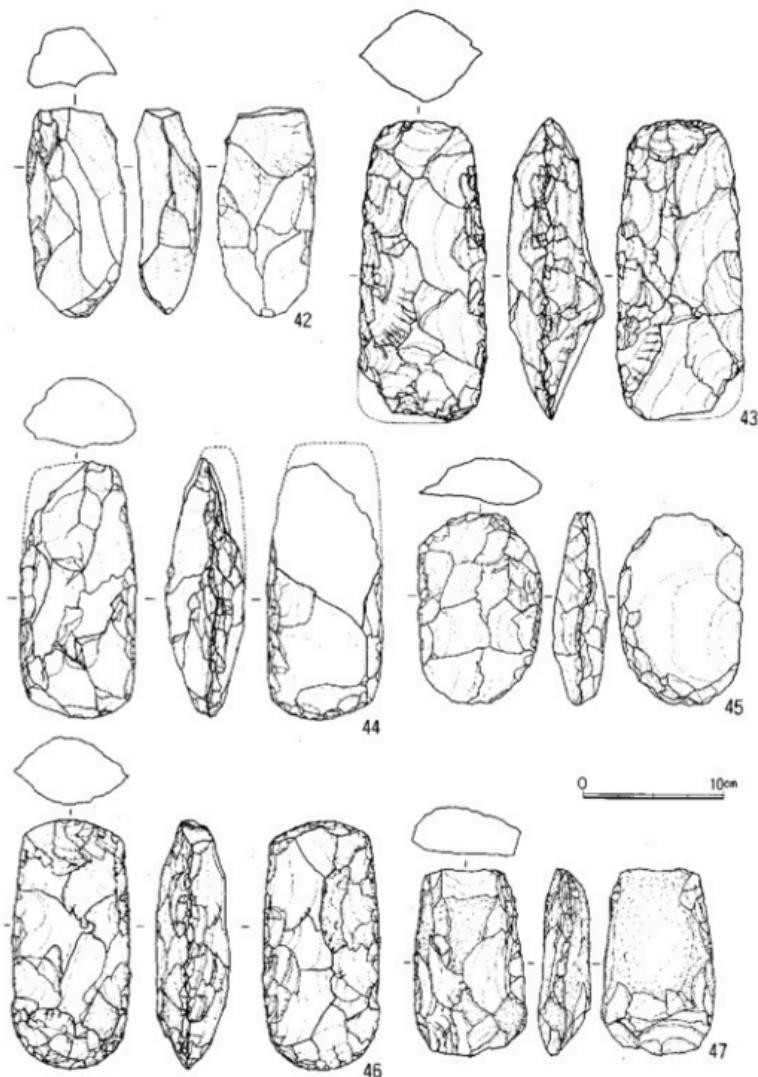


Fig. 25 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 45が42地点)

III 各地点の調査

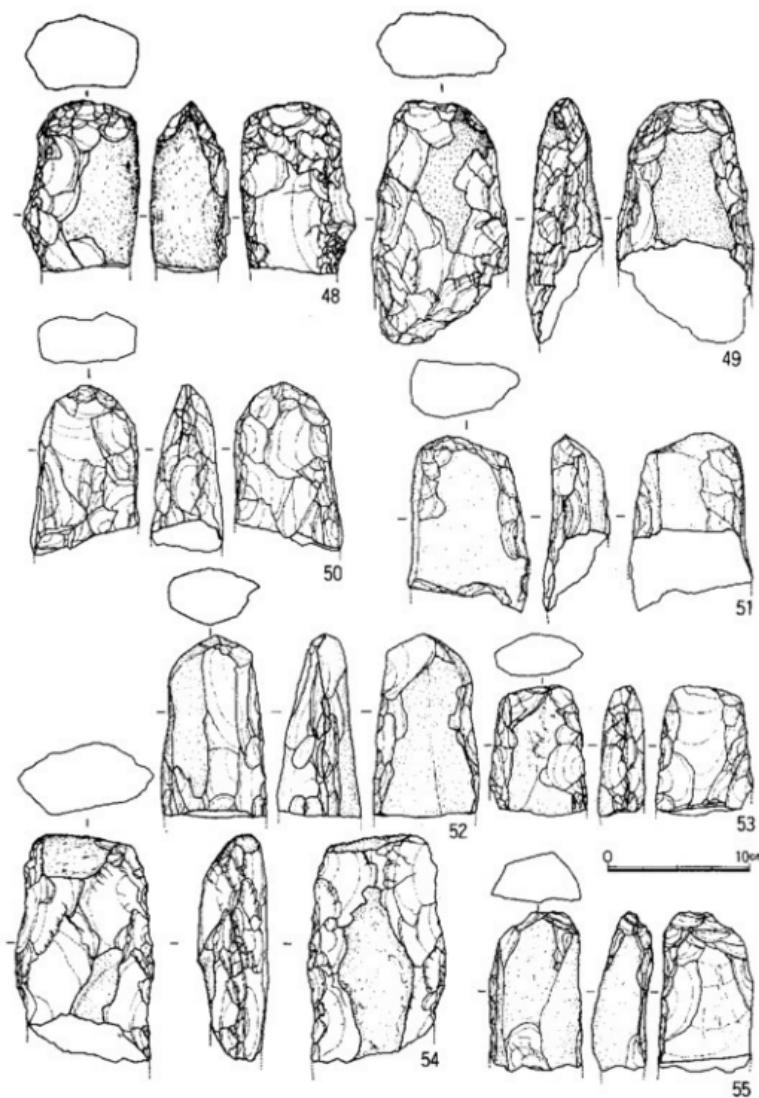


Fig.26 今山42・43地点出土の石斧未製品 (1/4 54が42地点)

III 各地点の調査

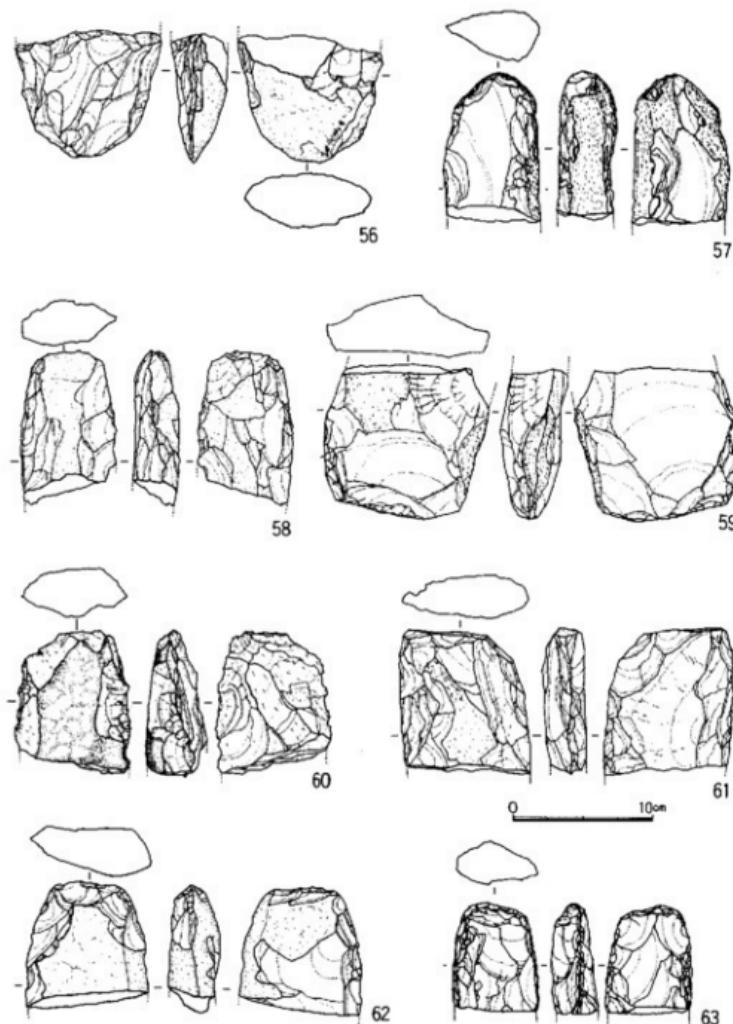


Fig.27 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

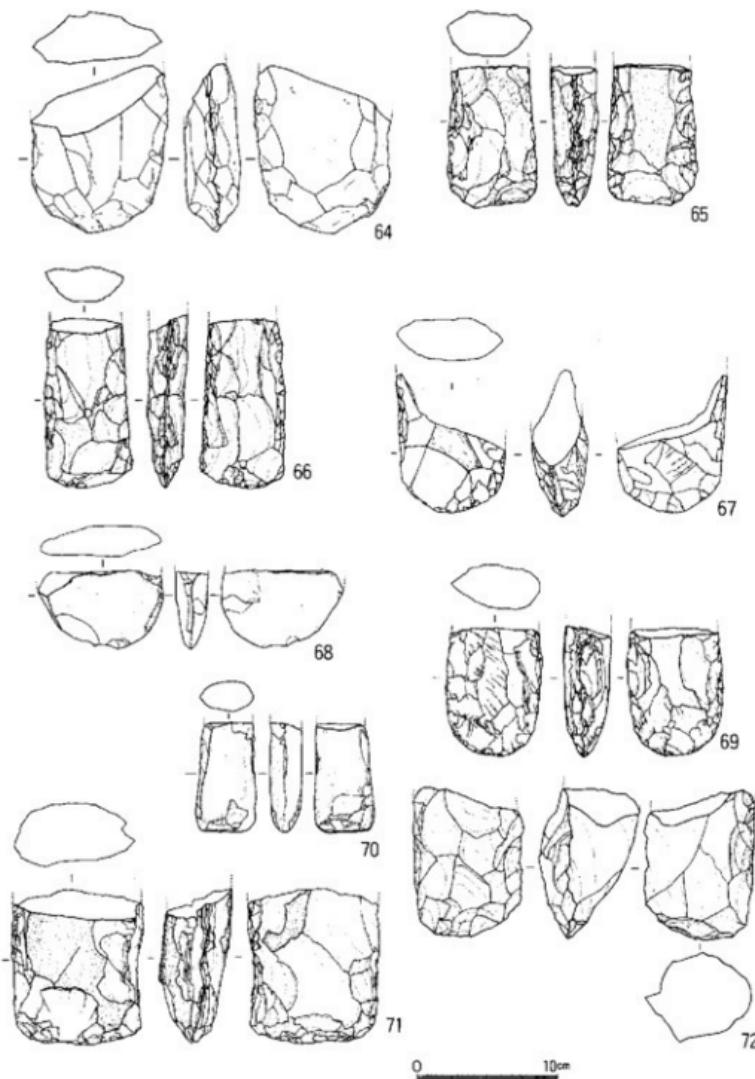


Fig. 28 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

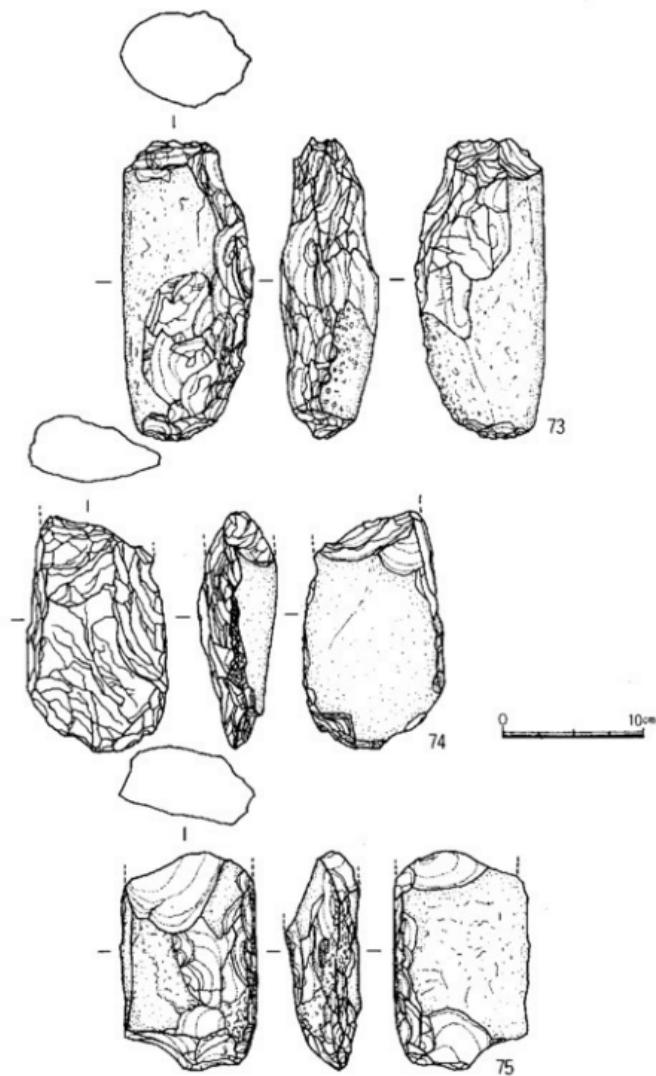


Fig. 29 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

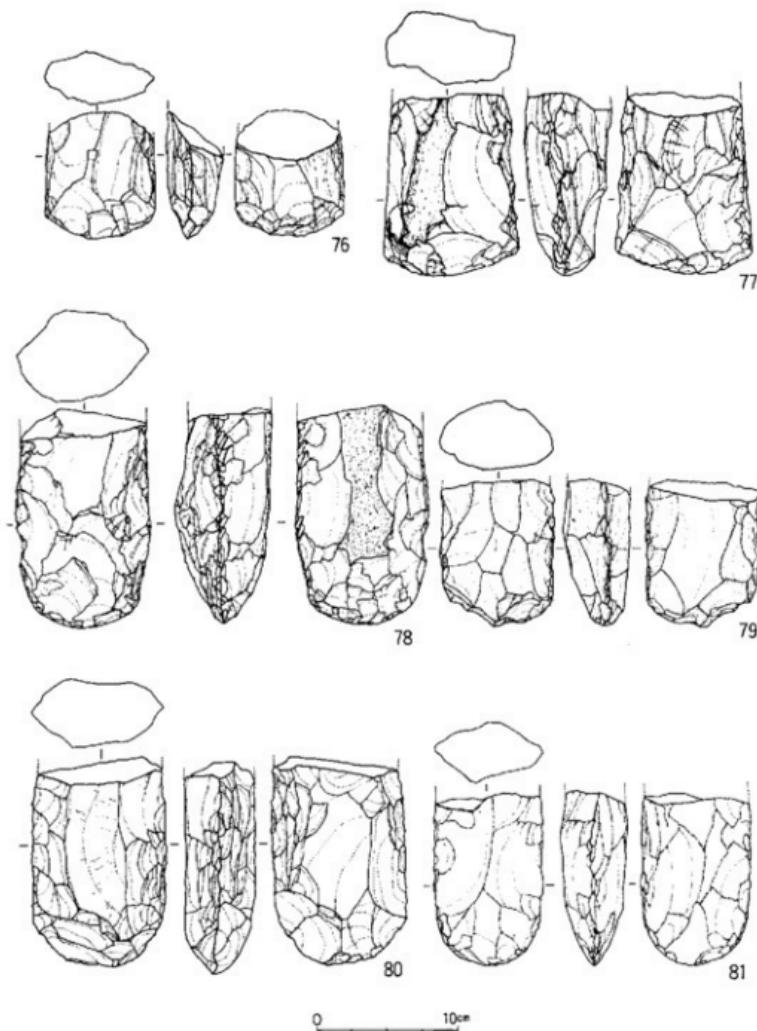


Fig.30 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 78・81が42地点)

III 各地点の調査

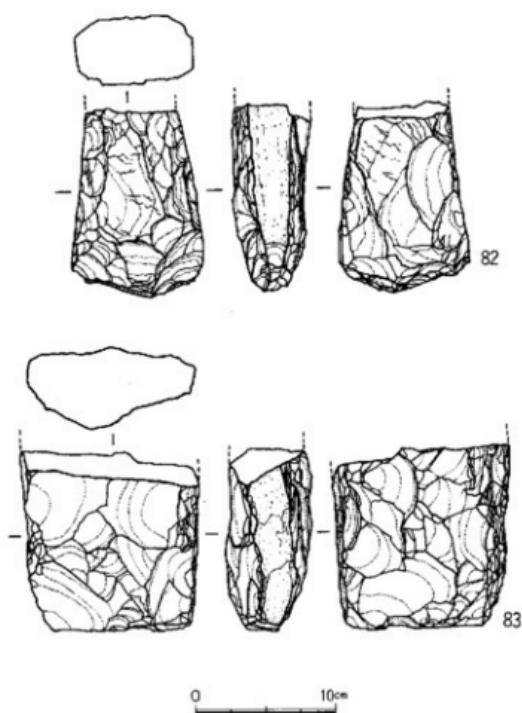


Fig.31 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

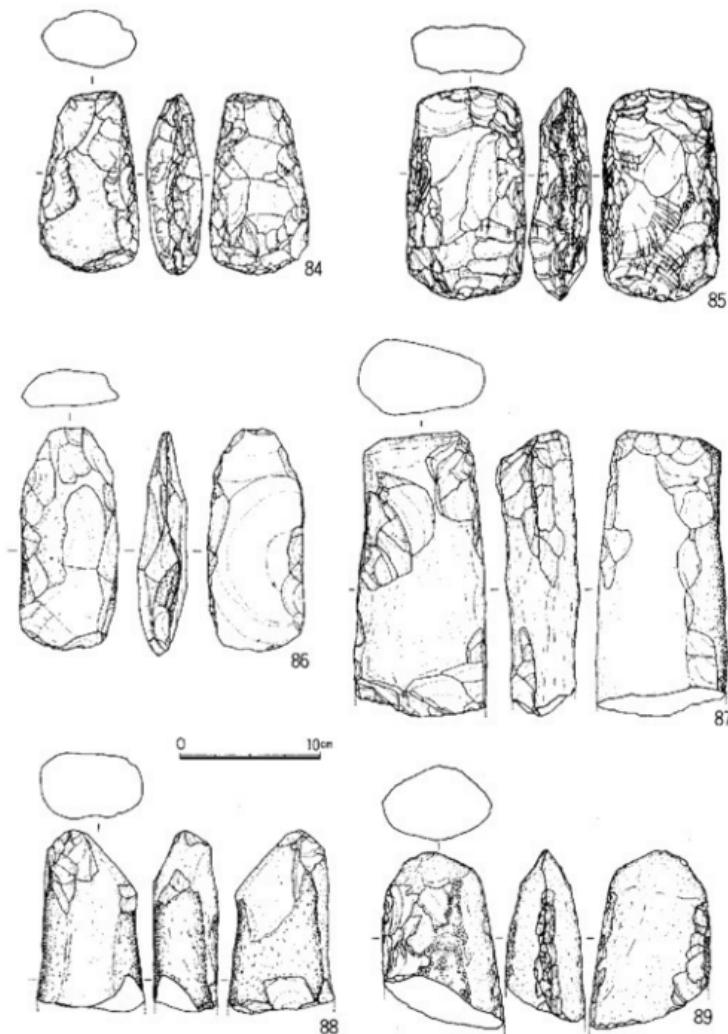


Fig.32 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

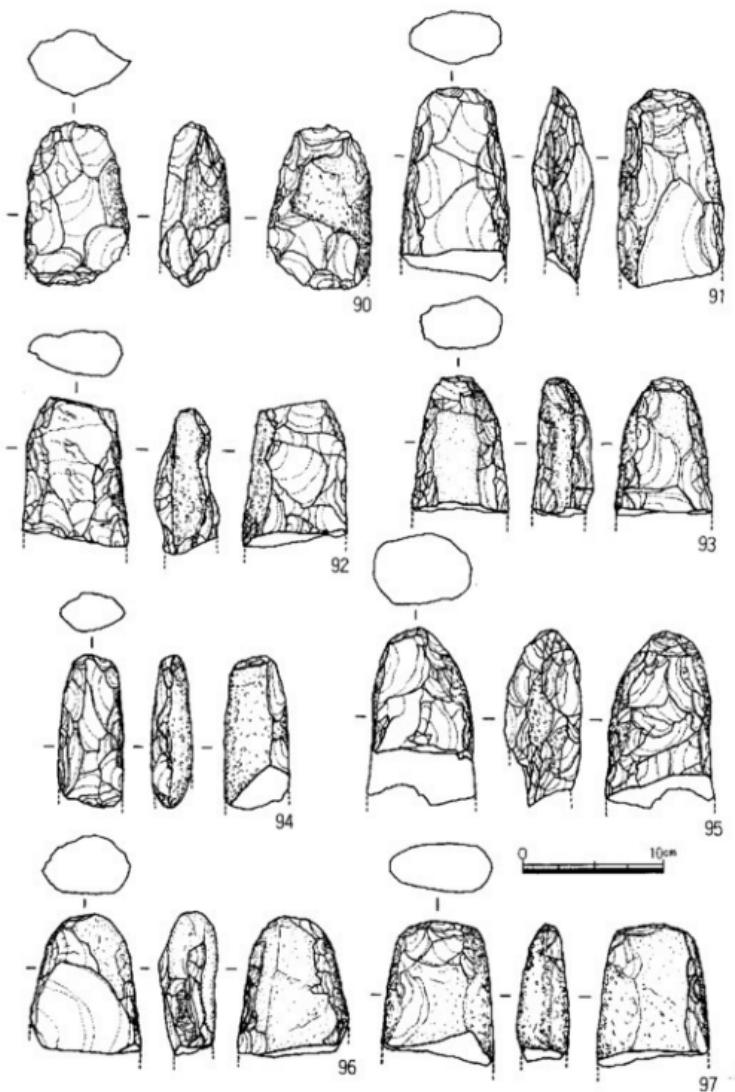


Fig. 33 今山43地点出土の石斧木製品(1/4)

III 各地点の調査

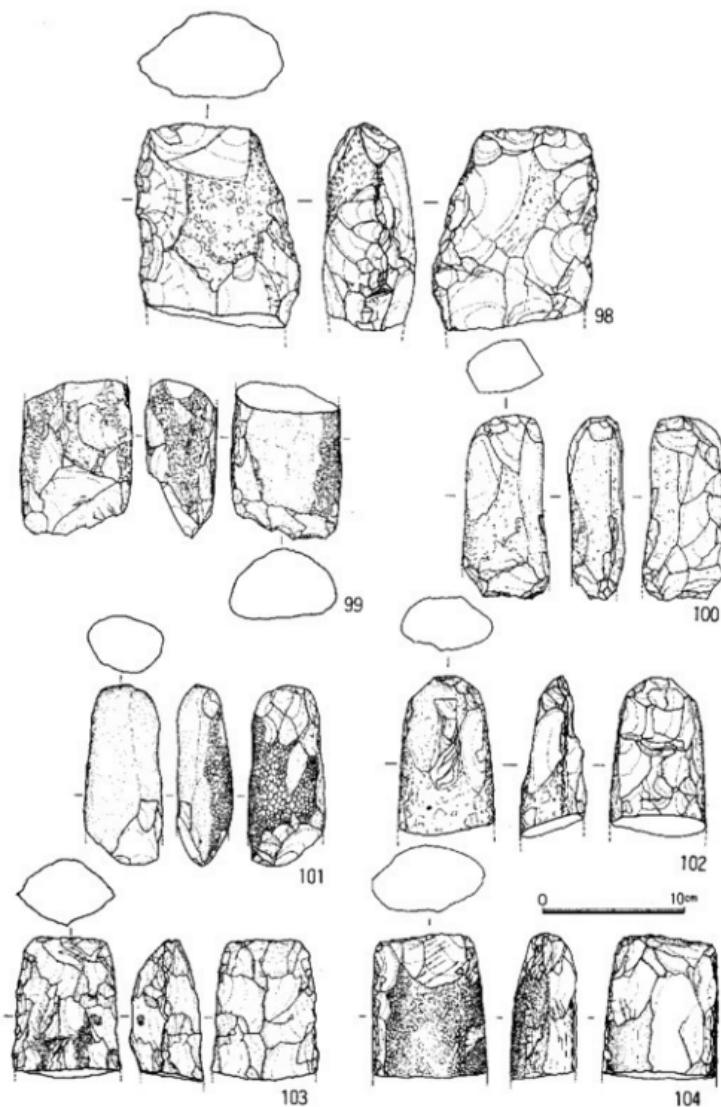


Fig. 34 今山42・43地点出土の石斧未製品 (1/4 101が42地点)

III 各地点の調査

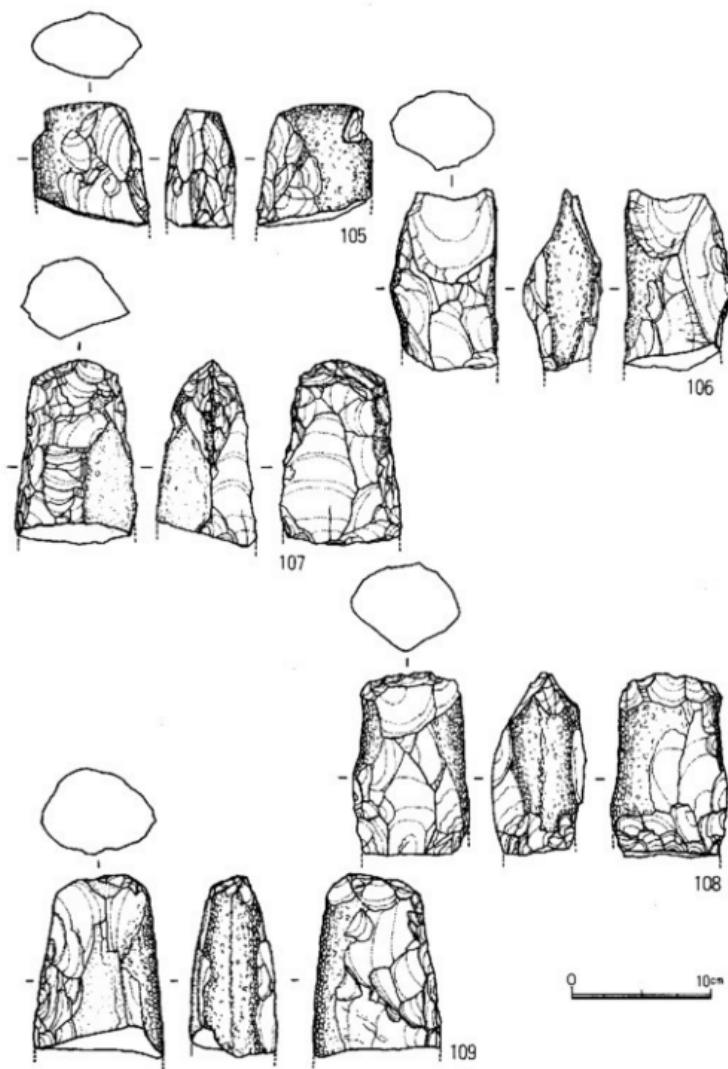


Fig.35 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

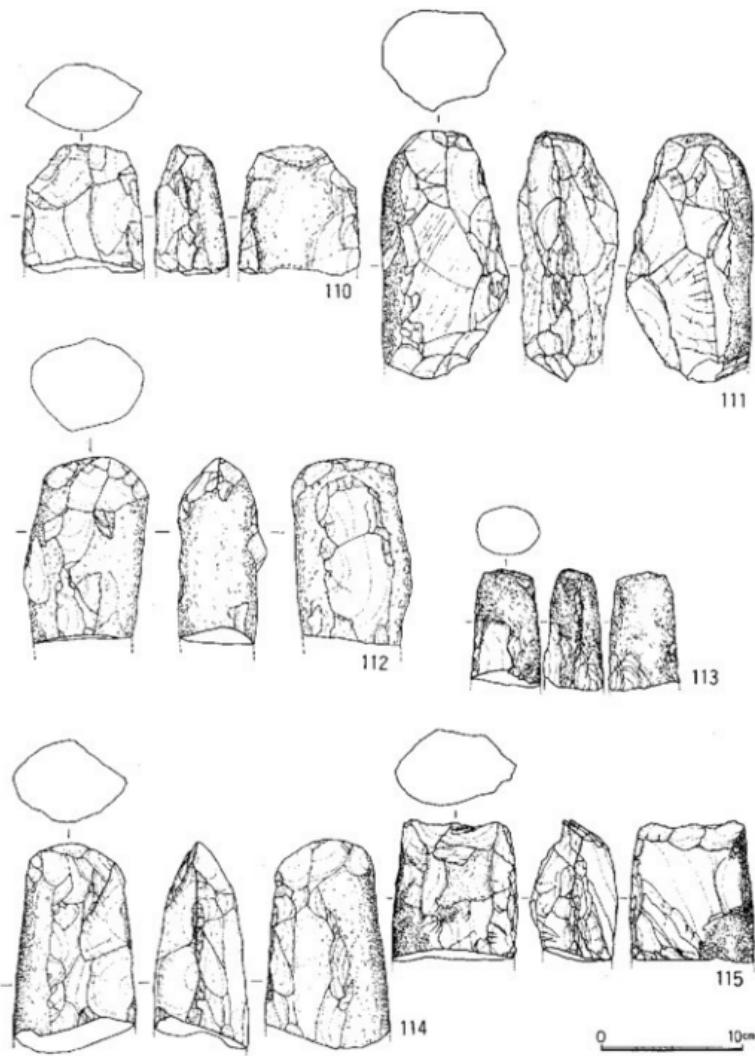


Fig.36 今山42・43地点出土の石斧木製品(1/4 110が42地点)

III 各地点の調査

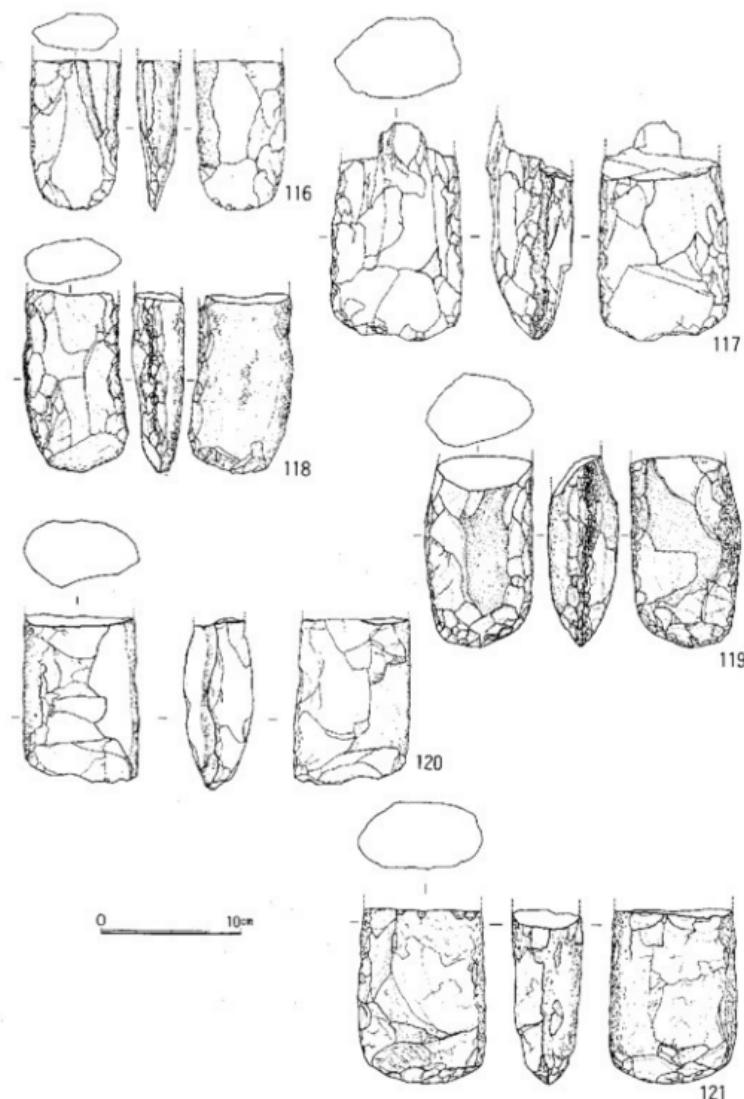


Fig.37 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 116が42地点)

III 各地点の調査

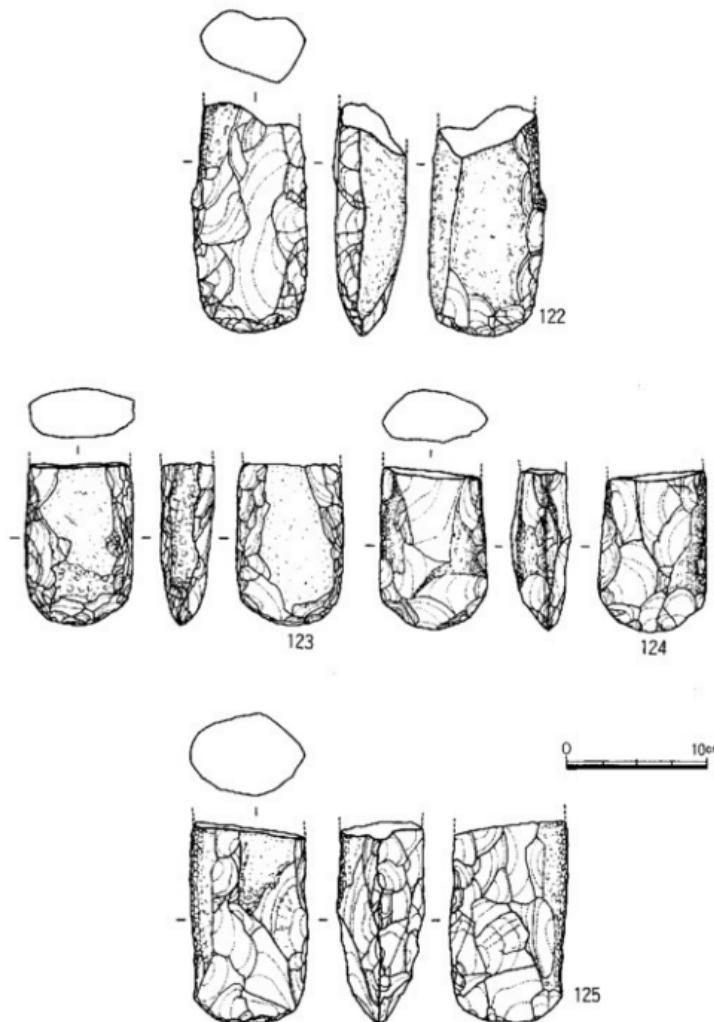


Fig.38 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

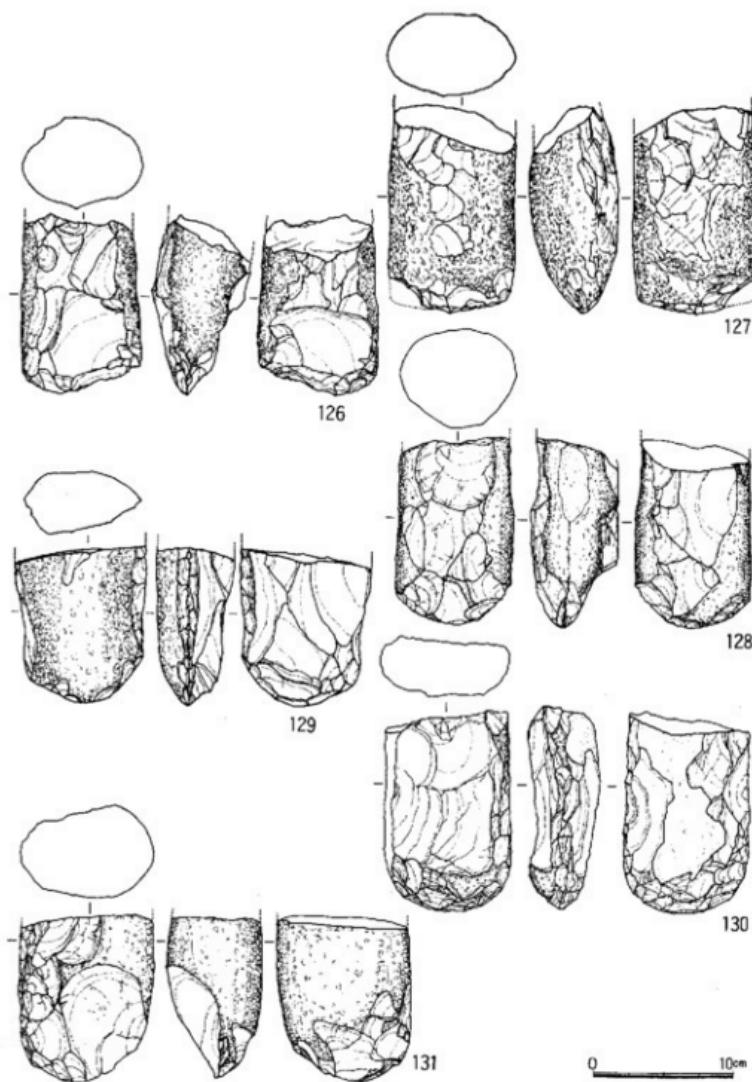


Fig. 39 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

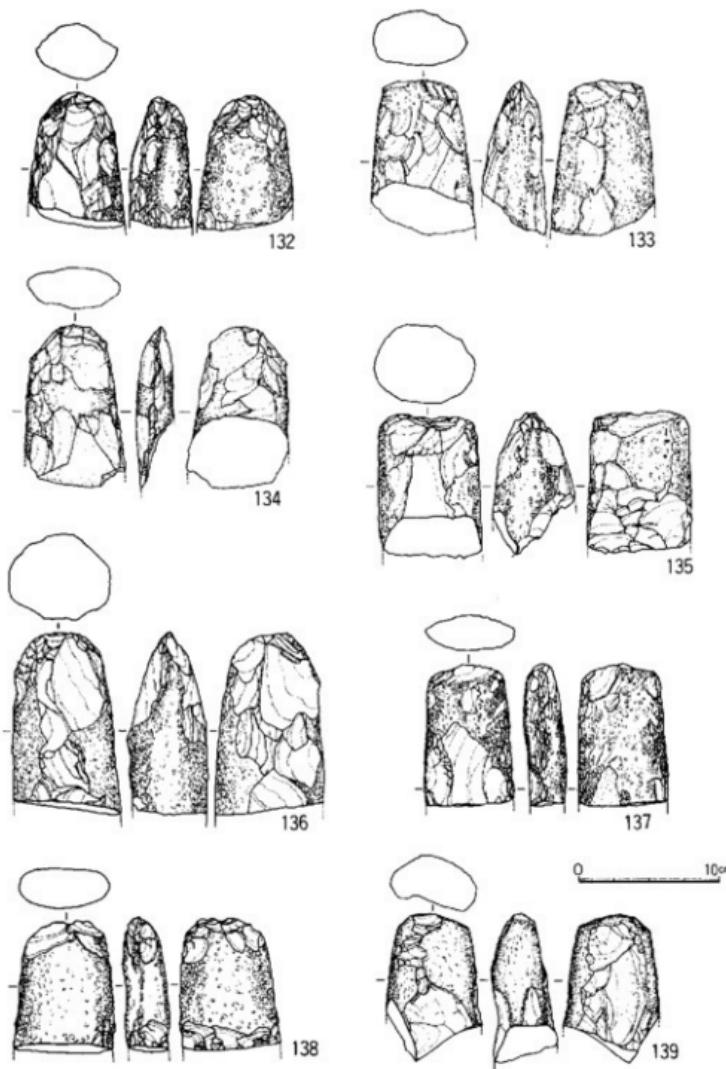


Fig. 40 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

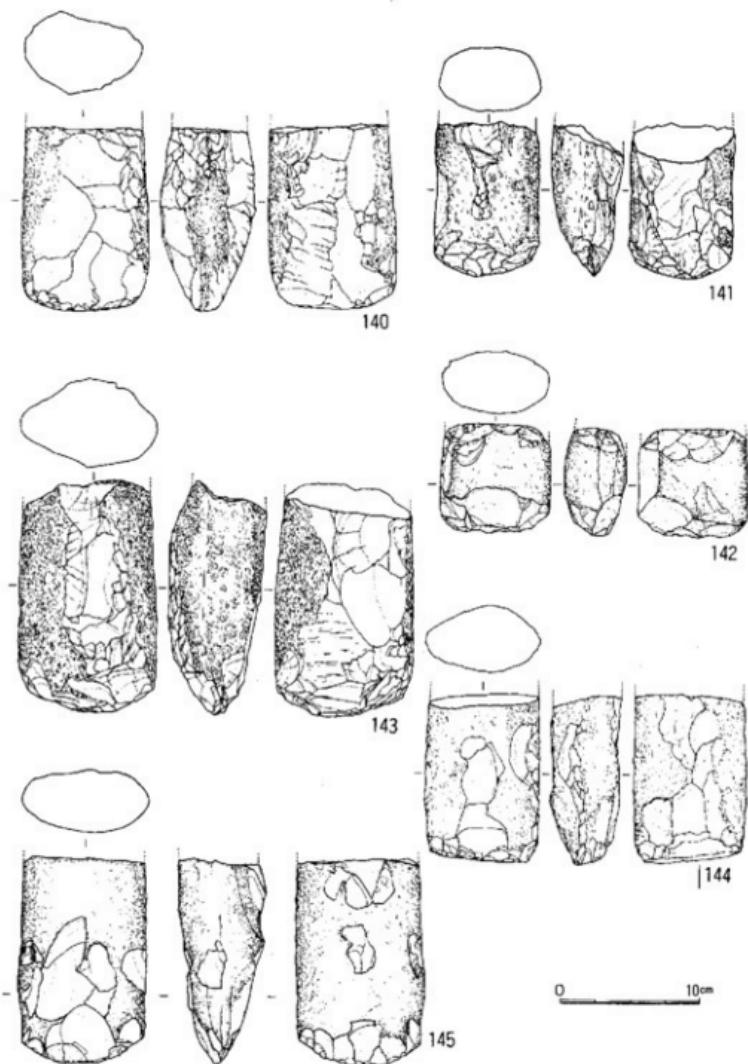


Fig. 41 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

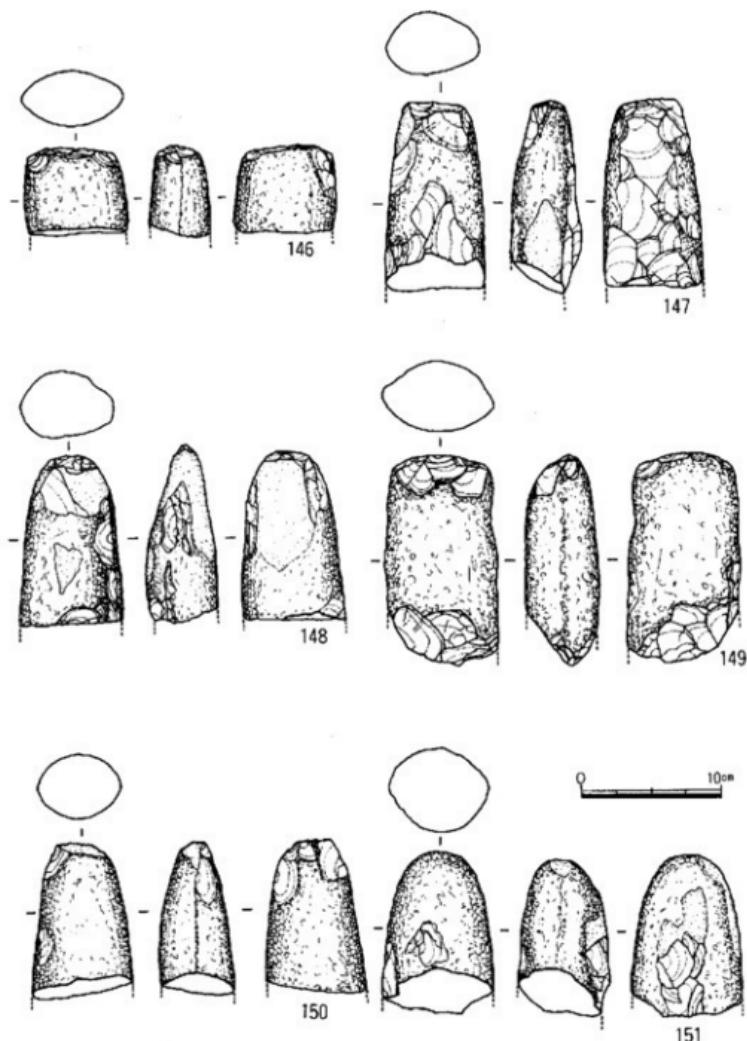


Fig.42 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 149が42地点)

III 各地点の調査

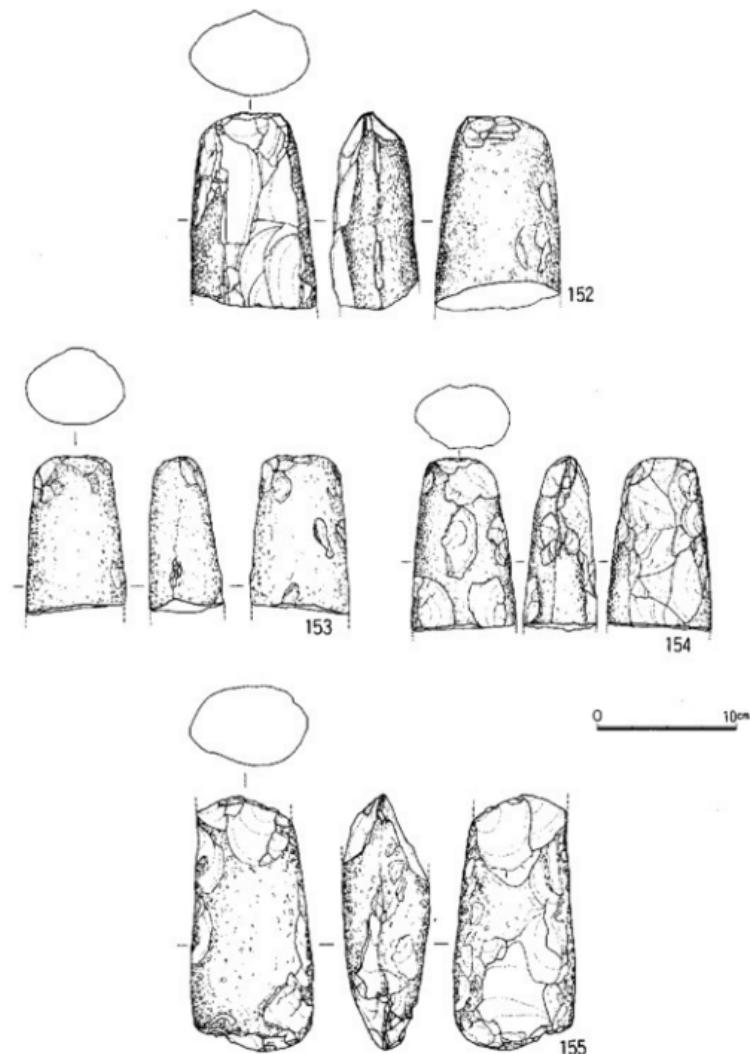


Fig. 43 今山43地点出土の石斧未製品(1/4)

III 各地点の調査

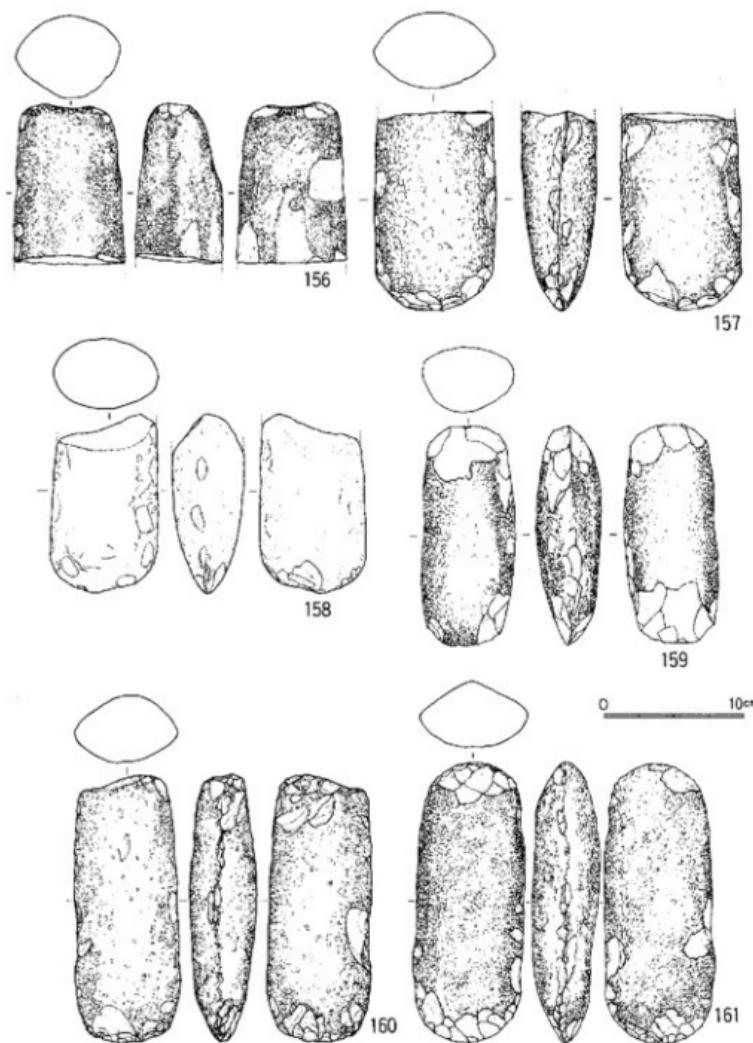
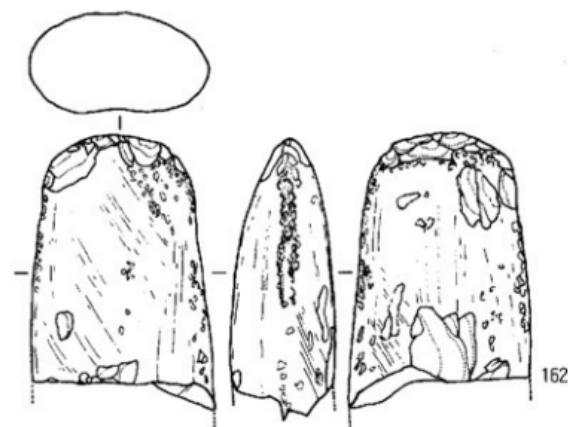
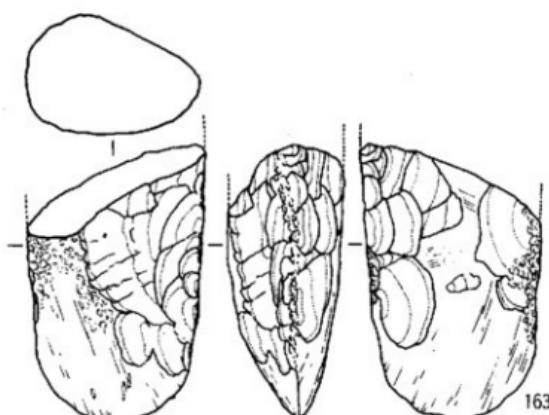


Fig.44 今山42・43地点出土の石斧未製品(1/4 156・158が43地点)

III 各地点の調査



162



163

0 10cm

Fig.45 今山42・43地点出土の石斧未製品 (1/2 162が43地点)

III 各地点の調査

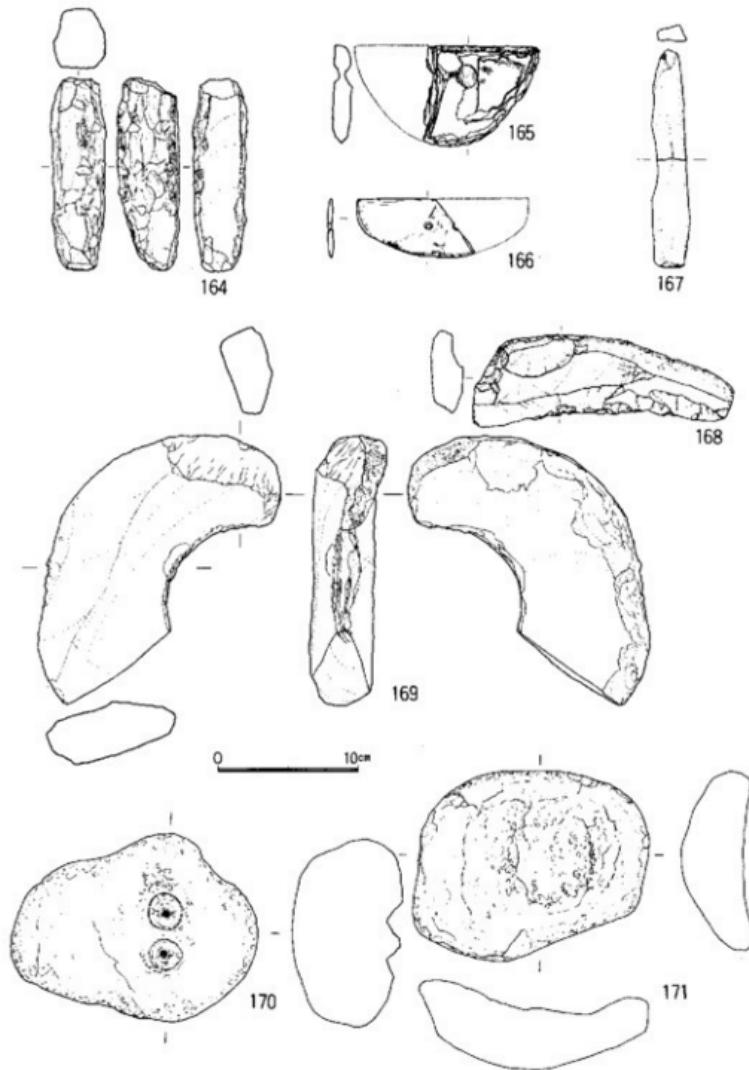


Fig. 46 今山42・43地点出土の各種石器 (1/4 164・166が42地点)

III 各地点の調査

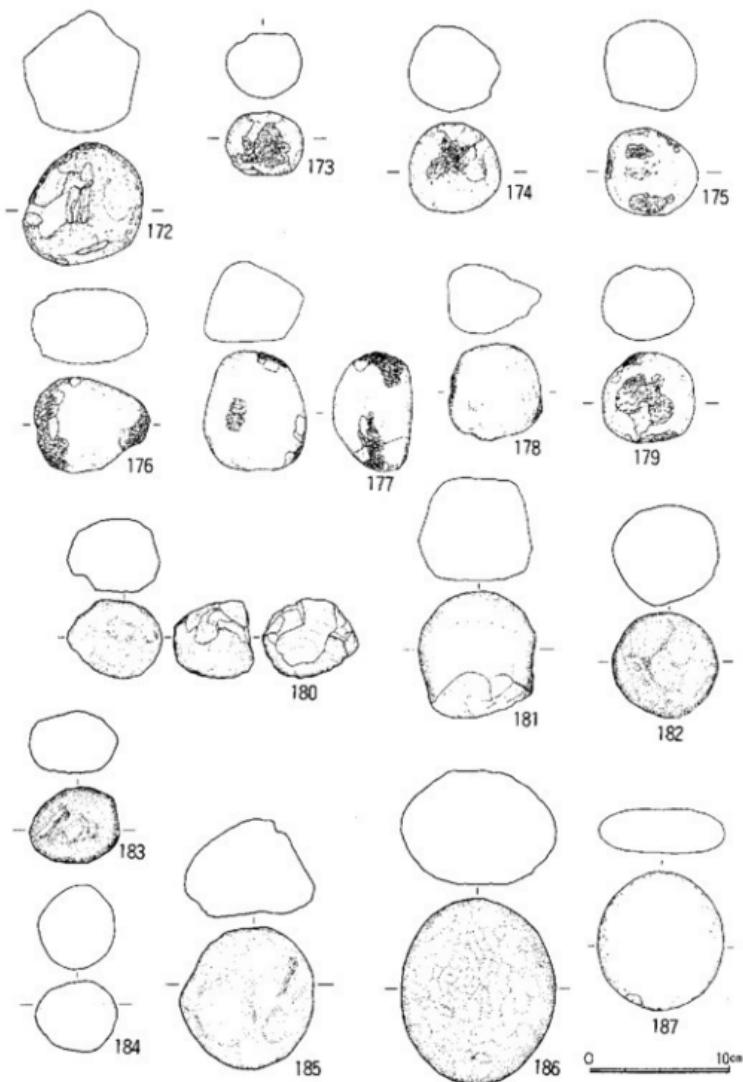


Fig.47 今山43地点出土の敲打用石器(1/4)

III 各地点の調査

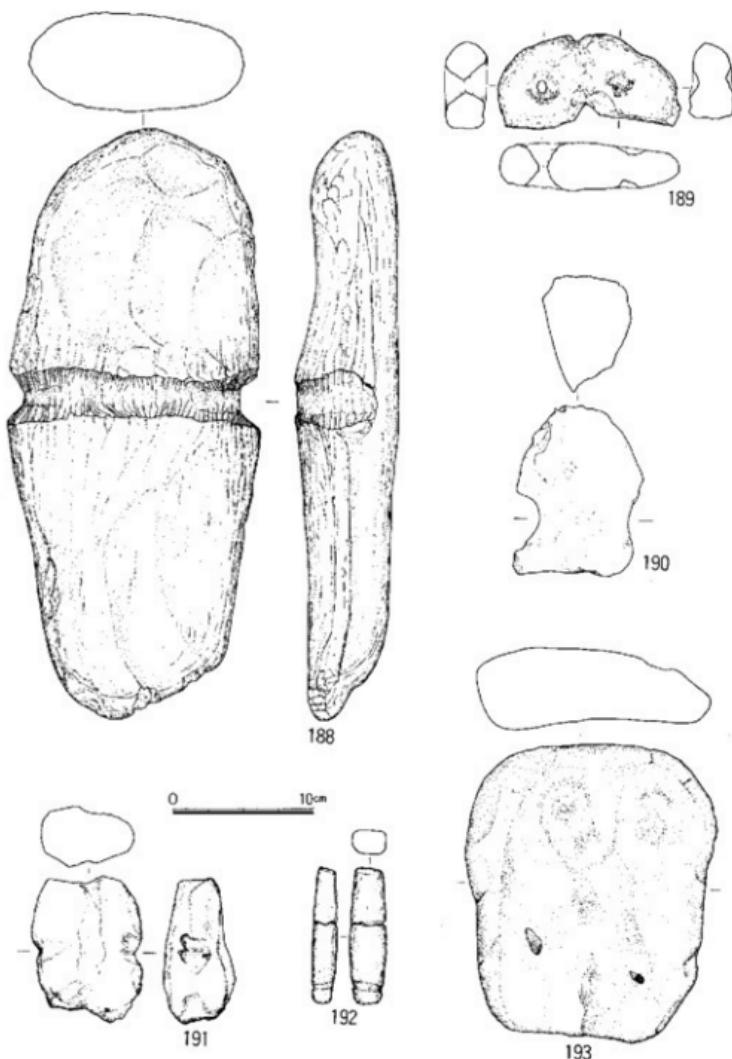


Fig. 48 今山42・43地点出土の各種石器(1/4 191が42地点)

III 各地点の調査

その他の石器 (Fig. 46 - Fig. 48)

今山42・43地点出土の石器の内、蛤刃石斧以外の石器は30点を数える。順を追って説明する。抉入柱状片刃石斧未製品(164)は、42地点出土でその素材を黒色硬質頁岩に求め、念入りな細部の削離調整の痕跡を残している。途中で作業を放棄したのは、抉入部付近の調整失敗によると考えられる。

石包丁は2点あって、165が43地点出土で玄武岩を素材とし、166が43地点出土で硬質粘板岩を素材としている。165は作業半ばにして放棄され、166が使用途中で折れたものと考えられる。

石鎌は2点あって、両品とも43地点出土の半製品である(168、169)。玄武岩に素材を求めている。

砥石は1点のみである(167)。43地点出土で、素材は砂岩質である。蛤刃石斧の作業工程で第IV工程の研磨作業の製品の検出が皆無に等しい事と併せて、非常に興味あるところである。

敲打用石器と考えられるものは15点検出している。ほとんどが円形に近く、軽く片手に持ち、柔らかく、目を潰す用途に適しているようである。全て43地点出土で、素材は変成岩の一種で片麻岩である。敲打器の場合、製品化しようとする石材よりも軟質の石材が使用されるという知見を得ている。それは製作者が本体を目的に近づけるための労作と時間的長さを感じさせる(注)。

台状石器と思われるものは2点のみを図化した(171・193)。両品とも43地点出土で、玄武岩を素材とする。台状石器は検出された各種石器と共に自然転疊全てが、その使用目的を果し得ると考えられる。その意味で、2点の他、数多くの石器を図化する事が望ましいが、時間と積量の制約から図化を断念した。

碇石・石鍤は5点を数える。全て43地点出土である。188は大形のもので、素材を敲打用石器と同様、変成岩系片麻岩に求めている。189-191は滑石を採用しており、いずれも粗雑であり、製品として使用していたかどうかは疑問である。192は砂岩質のもので小形である。

不明石器は170が上げられるが、素材が滑石であるところから石鍤を作ろうとしていたのかかもしれない。

ii. 古墳時代の出土遺物

製塙土器(Fig. 50)——1~29までが製塙土器と称されるものである。7・8以外は全て42地点出土である。製作技法に、入念さ・粗雑さ等を考慮すれば、何種類かに分類される。しかし、それが時間的差として把握されるかどうか、又、製塙址の検出からも42地点周辺の精査等が、下記に記す伴出土器と併せて今後の課題とする。

タコ壺——Fig. 49が該当する。8・21以外は全て42地点出土である。

土器——Fig. 50の31~Fig. 51が該当する。古墳時代全般に亘って発見される。

(注) 本項目の石材の可視的同定と敲打器の繊細な用途については池崎謙二君の御教示による。

III 各地点の調査

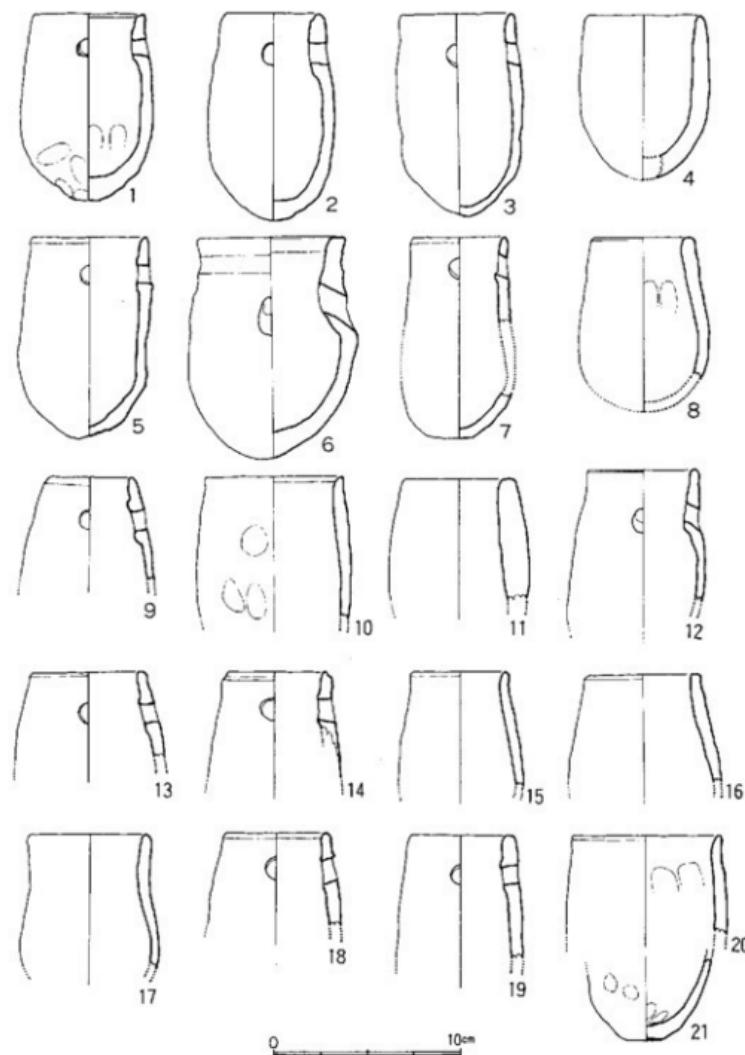


Fig.49 今山42・43地点出土のタコ壺形土器 (1/3 8・21が43地点)

III 各地点の調査

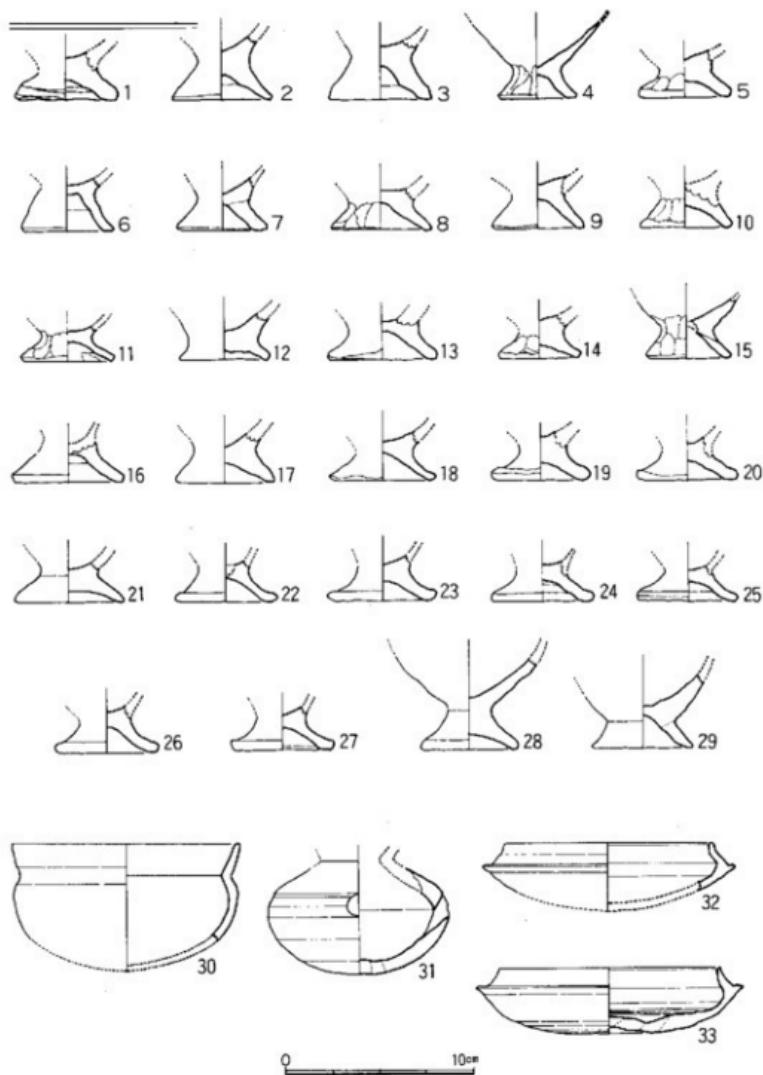


Fig.50 今山42・43地点出土の製塙土器と土師器と須恵器(1/3 7・8が43地点)

III 各地点の調査

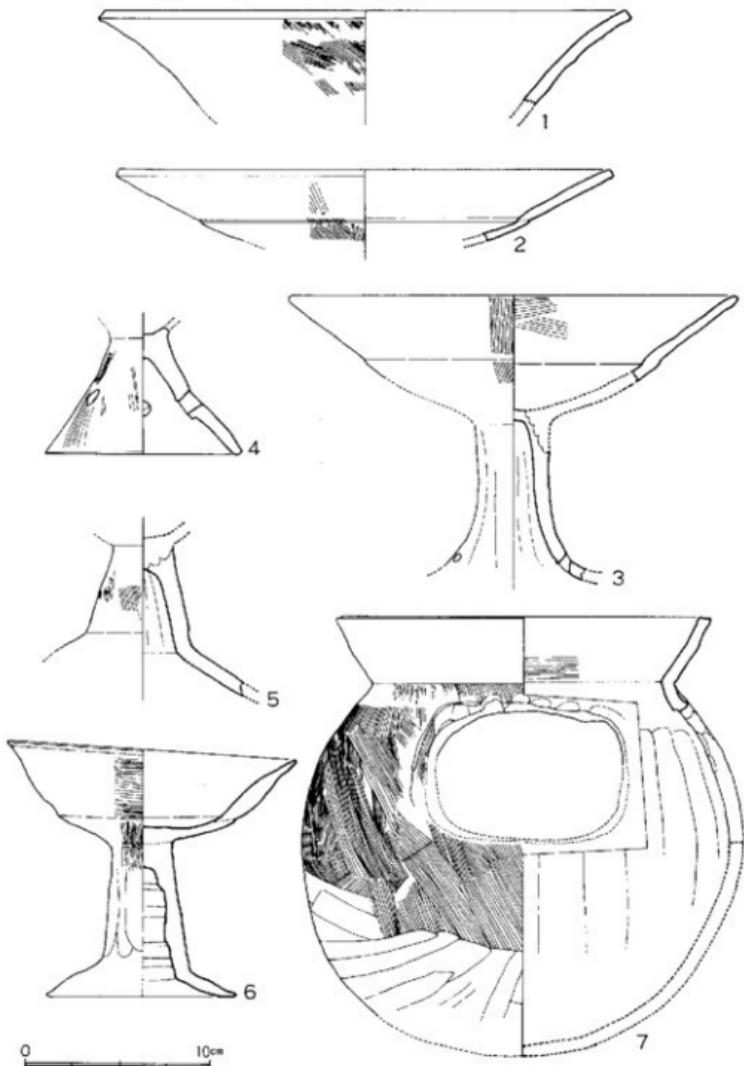


Fig.51 今山42・43地点出土の土師器 (1/3 1~3が43地点)

IV 小 結

1. 今山42・43地点出土石斧の分類

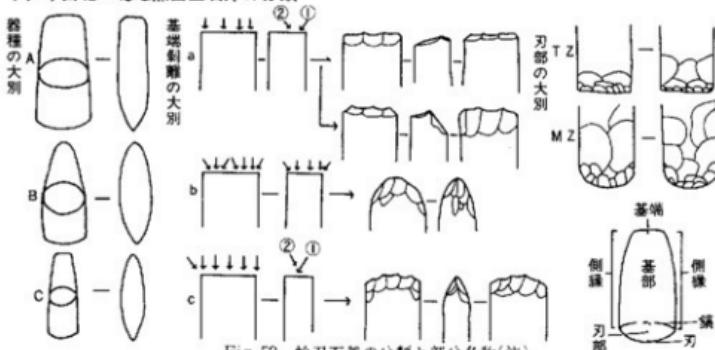


Fig. 52 蛤刃石斧の分類と部分名称(注)

(注) 佐原 真「石斧論」 松崎寿和退官記念考古論集 1977

本地点出土の蛤刃石斧を先に概観したが、再度整理すると以下のようになる。

作業工程は粗削・打裂調整・敲打調整・磨研調整の4工程が考えられる。しかし、自然転擲利用が、圧倒的多数をしめることから、その自然面を活用する事により、粗削・打裂調整の2工程が1工程に統一される場合が多く、3工程として把握しても何ら疑いを挟まない。又、IV工程上の石斧の出土は皆無に等しく(固化掲載石斧は使用痕を有つ)、砾石出土1点のみと併せて、本地点では第IV工程は考えられない。本地点の出土現象が果して今山全体の実態なのか今後の課題であろう。

①工程：素材(原材料)採集

転運採集
素材剥出

- 出土石斧中、転運使用60.5%、剥片使用9.9%、不明確29.6%
- 長さ25cm×巾15cm×厚さ10cmの剥片採集は困難
- 自然転擲利用は最も合理性に富んだ採集方法
- 原石破砕石の多さは最初に石質・處理方向が確められた痕跡
- 求められる器形を成形しようとする意識が優先される。

I 工程：粗 削

全粗削成形 → [基端粗削]
[側縁粗削] 打撃面調整
[刃部粗削]

本地点で確実に観察可能

- 基端・刃部の打裂にはある程度の法則性は看取出来る。
- 側縁の打裂調整は法則性を看取出来ない。

II 工程：打裂調整

端部成形 → [基端打裂調整]
[側縁打裂調整]
[刃部打裂調整]

- 欠損率が最も高い。かなりの打裂を必要としたと考えられる。
- 刃部の敲打は故意に避けられたようである。

III 工程：敲 打

IV 工程：磨 研
〔局部磨研〕
〔全面磨研〕

- 砾石の出土例1点と併考して、本地点の磨研作業は存在しない。

IV 小 结

器種	基制端面	刃部	工程	自然油	器種	基制端面	刃部	工程	自然油	器種	基制端面	刃部	工程	自然油						
1	?	?	欠 I 有	34	?	a	欠 I 有	67	C-a	欠 M Z II 有	?	C-a	b	T Z III 有	?	B	b	欠 M Z III 无		
2	?	?	?	I 有	35	?	c	T Z I 有	68	C-?	欠 M Z II 有	?	C-b	b	欠 M Z III 无	?	C-b	b	欠 M Z III 有	
3	?	?	?	I 有	36	?	?	?	I 有	69	C-a	欠 M Z II 有	?	B	b	欠 M Z III 有	?	A-b	a	欠 M Z III 无
4	?	?	欠 I 有	37	A-a	a	M Z II 有	70	C-b	欠 T Z II 有	?	A-b	a	欠 M Z III 有	?	B	b	欠 M Z III 无		
5	?	欠 M Z I 有	38	A-a	a	M Z II 有	71	A-?	欠 T Z II 有	?	A-a	a	欠 M Z III 有	?	C-a	c	欠 M Z III 无			
6	?	?	T Z I 有	39	A-a	a	M Z II 有	72	A-?	欠 M Z II 无	?	A-a	a	欠 M Z III 有	?	C-a	c	欠 M Z III 无		
7	?	a	欠 I 有	40	B	b	M Z II 有	73	B	b	M Z I 有	?	A-b	a	欠 M Z III 有	?	B	b	欠 M Z III 无	
8	?	a	欠 I 有	41	A-?	a	M Z II 无	74	B	欠 M Z II 有	?	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 T Z III 无			
9	?	?	欠 I 有	42	C-a	c	M Z II 有	75	A-b	欠 M Z II 有	?	A-b	a	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无			
10	?	欠 M Z I 有	43	A-b	a	T Z II 无	76	B	欠 M Z II 无	?	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 T Z III 无				
11	?	?	欠 I 有	44	A-b	a	M Z II 无	77	A-?	欠 M Z II 有	?	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无			
12	?	C	欠 I 有	45	C-?	c	M Z II 无	78	A-?	欠 M Z II 有	?	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 T Z III 无			
13	?	?	M Z I 有	46	A-a	a	M Z II 无	79	A-?	欠 M Z II 无	?	A-b	a	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无			
14	?	?	M Z I 有	47	C-c	c	M Z II 有	80	A-?	欠 M Z II 无	?	C-b	b	欠 M Z III 有	?	A-a	a	欠 M Z III 无		
15	?	?	M Z I 有	48	A-a	a	欠 II 有	81	A-?	欠 M Z II 无	?	B	b	欠 M Z III 有	?	A-a	a	欠 M Z III 无		
16	?	c	欠 I 无	49	B	b	欠 II 有	82	C-b	欠 M Z II 有	?	A-s	s	欠 M Z III 有	?	B	b	欠 M Z III 有		
17	?	b	欠 I 无	50	B	b	欠 II 有	83	A-a	欠 T Z II 有	?	C-?	欠 M Z III 有	?	A-b	a	欠 M Z III 无			
18	?	a	欠 I 有	51	C	c	欠 II 有	84	C-b	欠 M Z II 有	?	B	欠 T Z III 无	?	B	b	欠 M Z III 无			
19	?	a	欠 I 有	52	B	b	欠 II 有	85	C-a	欠 M Z III 无	?	C	?	欠 M Z III 有	?	B	b	欠 M Z III 无		
20	?	a	M Z I 无	53	C-a	c	欠 II 无	86	C-b	欠 M Z III 无	?	A-?	欠 M Z III 有	?	A-b	a	欠 M Z III 无			
21	?	a	M Z I 有	54	A-b	a	欠 II 有	87	A-a	a	T Z II 有	?	A-?	欠 T Z III 有	?	A-a	a	欠 M Z III 无		
22	?	b	欠 I 有	55	C-a	b	欠 II 有	88	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	B	b	欠 M Z III 无		
23	?	b	M Z I 有	56	A-?	?	M Z II 有	89	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	B	b	欠 M Z III 无		
24	?	c	M Z I 有	57	C-b	b	欠 II 有	90	B	b	欠 M Z III 有	?	B	欠 M Z III 有	?	A-a	a	欠 M Z III 无		
25	?	b	M Z I 有	58	C-a	c	欠 II 无	91	B	b	欠 M Z III 无	?	B	欠 M Z III 无	?	A-?	欠 M Z III 无			
26	?	c	M Z I 有	59	A-?	?	T Z II 有	92	C-a	c	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	A-?	欠 M Z III 无			
27	?	e	M Z I 有	60	C-b	c	欠 II 有	93	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	A-b	a	欠 M Z III 无		
28	?	欠 T Z I 无	61	C-a	c	欠 II 无	94	C-a	c	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	A-a	a	欠 M Z III 无			
29	?	b	欠 I 有	62	C-b	c	欠 II 有	95	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	A-b	a	欠 M Z III 无		
30	?	a	T Z I 有	63	C-b	c	欠 II 无	96	B	b	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	B	b	欠 M Z III 无		
31	?	c	M Z I 有	64	A-?	?	M Z II 无	97	C-a	c	欠 M Z III 有	?	A-?	欠 M Z III 无	?	A-?	欠 M Z III 无			
32	?	c	T Z I 有	65	C-b	b	T Z II 有	98	A-a	a	欠 M Z III 无	?	A-?	欠 M Z III 无	?					
33	?	b	M Z I 有	66	C-a	b	M Z II 有	99	A-?	欠 T Z III 有	?	B	b	欠 M Z III 无	?					

今山42~43地点出土石斧观察一览表(Fig. 14~Fig. 45)

石斧の作業工程を考える上で、I・II工程の側縁・基部に加えられた打撃痕を観察したい。特にI工程のそれら打撃痕が石斧工程を把握する上で重要である。I工程の側縁・基部の打撃痕を見れば、2つのタイプが看取できる。①. 一側面の表裏両面から加工していくもの(6・7・8・10・12・17・21・25・28・31等)と、②. 基部の片面(表裏のどちらか)を調整したのち、反対の片面の調整に入るものの(1・13・20・22・23・24・27・30・31等)の2タイプである。このI工程段階での観察結果は、素材の形態に自由に対応し、しかも、極力素材の自然面を生かすという製作者の意識を読みとることができる。II工程の側縁・基部の調整はI工程と技法上何ら変化する事を知らない。即ちI・II工程は作業上、分割できない連続性を有しているといえる。敢えてI・II工程を分離するとしたら、Iが成形の為の打撃調整・IIが成形の為の細部打撃調整といえるであろう。いずれにしても、自然転換の意識的利用は、素材選別の最初の段階から、技法上の省力化・工程の簡略化を、製作者が意図したと考えられる。今まで第I(粗削)・第II(打裂)・第III(敲打)と考えられた今山の石斧製作工程は、今山42・43地点出土の石斧観察により、第I打撃調整(粗削・打裂)・第II敲打調整・第III研磨調整に、作業工程を分類しても、何ら疑義を挟まない。

次に基端剥離の手法を観察する。観察結果として、完成される石斧の器形と基端剥離調整は製作者が意的に対応させた痕が弱るので、それを模式的に表現する(Fig.52)。

器種の大別

A 類(太形蛤刃石斧20cm長×6~8cm巾×5~6cm厚)

- 側縁線が刃部から基端にかけて平行するもの
 - a. 器端の頂点が平坦面(プラットホーム)を残し、正面からの観察で肩が角張るもの。
 - b. 器端の頂点は尖り陵をなし、正面観察で肩で丸味を有するもの(Fig.52で末尾化)

B 類(太形蛤刃石斧16~18cm長×6cm内外巾×5~6cm厚)

- 側縁線が刃部から基端にかけて細くなり、基端部が棒状の丸味をもつもの。

C 類(小形蛤刃石斧15cm内外長×5~6cm巾×3~4cm厚)

- a・A-a・b類の小形品
 - b・B類の小形品

刃部の手法の人別は直刃(TZ)と丸刃(MZ)に分けた。直刃は交互剥離が行なわれ、剥離面は基端に比べ小さい。丸刃の手法は直刃に比べ、細部剥離調整が多用される。刃部調整はIII工程が省かれる。

以上の分類はII・III工程から導出される。各々の分類観察結果は59頁を参照されたい。

基端剥離の大別

a 手法(A-a・b・C-a類に対応)

- 側縁に平行して剥離し、基端を平坦に保つ(A-a)。その細部調整がA-aを生み、C-aの小形品を作り出す。

- ・使用目的を複に置く。

b 手法(B類に対応)

- 基端部のステップフレーリングが円錐状に行なわれる。

c 手法(C-a・b類に対応)

- ・ a・b手法の細部調整である。

- ・ a→C-a・b→C-b
 • 基部中央から両側縁に斜行して剥離される

敲打調整の観察結果を記述する。敲打がどの部分から開始されるかについては厳密に看取できない。これは側縁剥離と同様、各製作者の任意性を読みとる事ができる。一側縁から調整開始のもの、基部の一片面から開始されるもの、両側縁調整後両面敲打するものなど恣意的である。要は、敲打における製作上の問題は剥離面にできた隙(リッジ)の除去による器面調整を目的とし、磨研作業の円滑化にあったのである。

観察結果の確認事項

- (1). 素材選出は玄武岩露頭から剥出よりも、自然転礫の玄武岩に求められる。
- (2). 作業工程の分割は4工程を否定し、3工程が是認される。即ち、従来の作業工程であるI工程の粗削作業とII工程の打裂調整作業は手順が任意性に富み、分割する事は困難である。今山42・43地点の作業工程は第I工程=粗削+打裂調整・第II工程=敲打調整・第III工程=磨研作業に集約される(59頁の表は従来の工程を採用)。
- (3). 今山42・43地点における、磨研作業は行使されない。
- (4). 打裂調整の為の剥離作業と敲打作業は手順が恣意的で、製作者の任意性が窮屈である。
- (5). 器種の分類は大きく3分類、即ち太形蛤刃石斧の2者と小形蛤刃の1者に大別され、基端剥離方法で大別される3方法が分類された器種に対応する。完成される石斧の用途は斧と楔を目的としているようである。
- (6). 刃部調整の為の敲打作業は行われない。
- (7). 全体的印象は素材の剥離方向が計算されない玄武岩であるが為に、各作業工程の調整手順が恣意的で製作者の任意性にまかせられており、法則性を看取できず、作業方法は合理的であると表現されるより、非合理的であると把握される。第III工程までの欠損率は非常に高く、生産性の低い生産が今山の石斧生産の現実であったようである。

なお本稿は田中寿夫、長沼 孝の観察・分析結果を折尾 学が脱稿したものである。

2. 今宿遺跡と今山遺跡の今後の課題

今山遺跡は弥生時代の蛤刃石斧の製作地であった事は一般的な解釈として疑う余地はない。果して、その製作者の居住地は存在したのかどうかは未解決である。その様な意味で今宿13・14地点の弥生時代の寝棺墓と上塙墓を併せもつた共同墓地の発見は意義あるものである。いずれにしても、今後今宿・今山遺跡周辺の遺跡の把握に行政・研究者が一体となって取り組む必要性を痛感するものである。

今山42・43地点出土の製塩土器は、確実に当地で製塩が行なわれていた根拠を有するものである。先述の石斧と同様、今後の実態把握が望まれる。また『万葉集』卷十五に天平八年(736)、遣新羅使一行が筑紫館で詠んだ歌「志賀の海人の一日もおちず焼く塩の辛き恋をも吾はするかも」は、博多湾沿岸一帯で製塩が広く行なわれていた事を示すものである。今後、海岸部の製塩場把握も、大きな課題である。

図 版





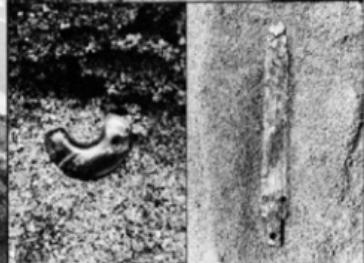
(1). 今宿・今山遺跡遠望(中央右端が今山)



(2). 今宿13・14地点調査風景



(3). 上一壺棺



(4). 下左一勾玉

(5). 下右一銅剣の出土状況





(3). 遺物出土狀況(42地點)

(4). 製塙土器と土師器(43地點)



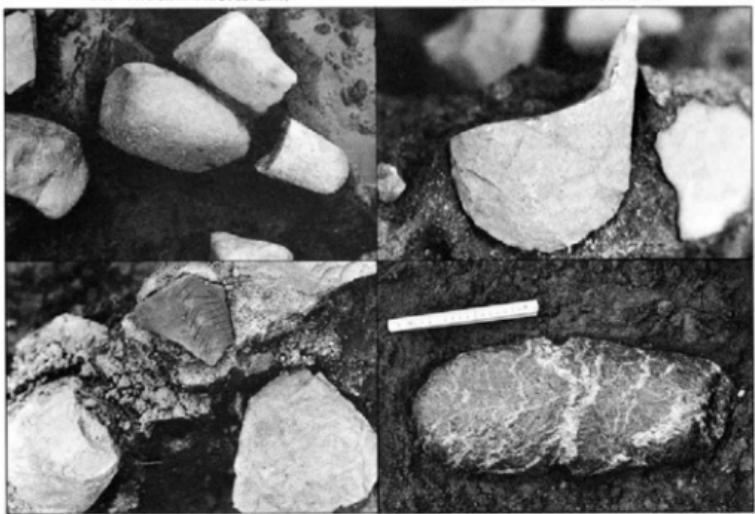


(1) · 43 地点、出土状况遠景



(2). 石斧出土状況(43地点)

(3). 石斧出土状況(43地点)



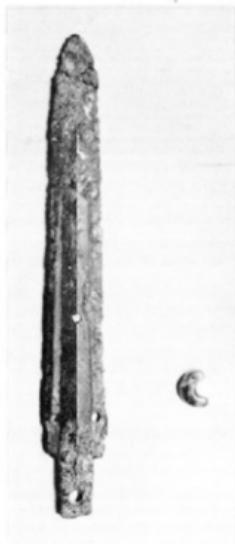
(4). 弥生式土器片出土状況(43地点)

(5). 研石出土状況(43地点)

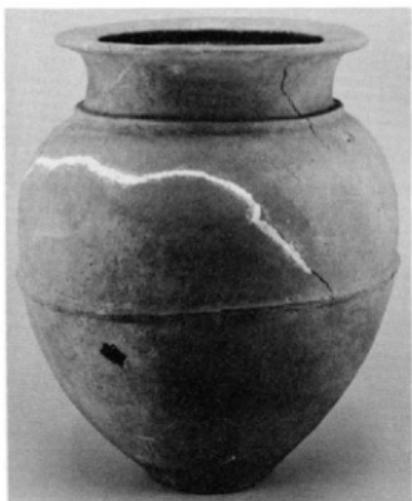




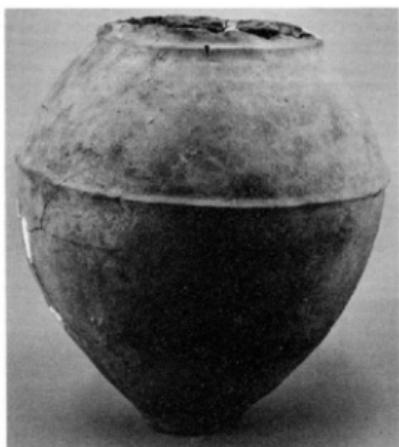
(1). 壶形土器(13地点—Fig. 6-4)



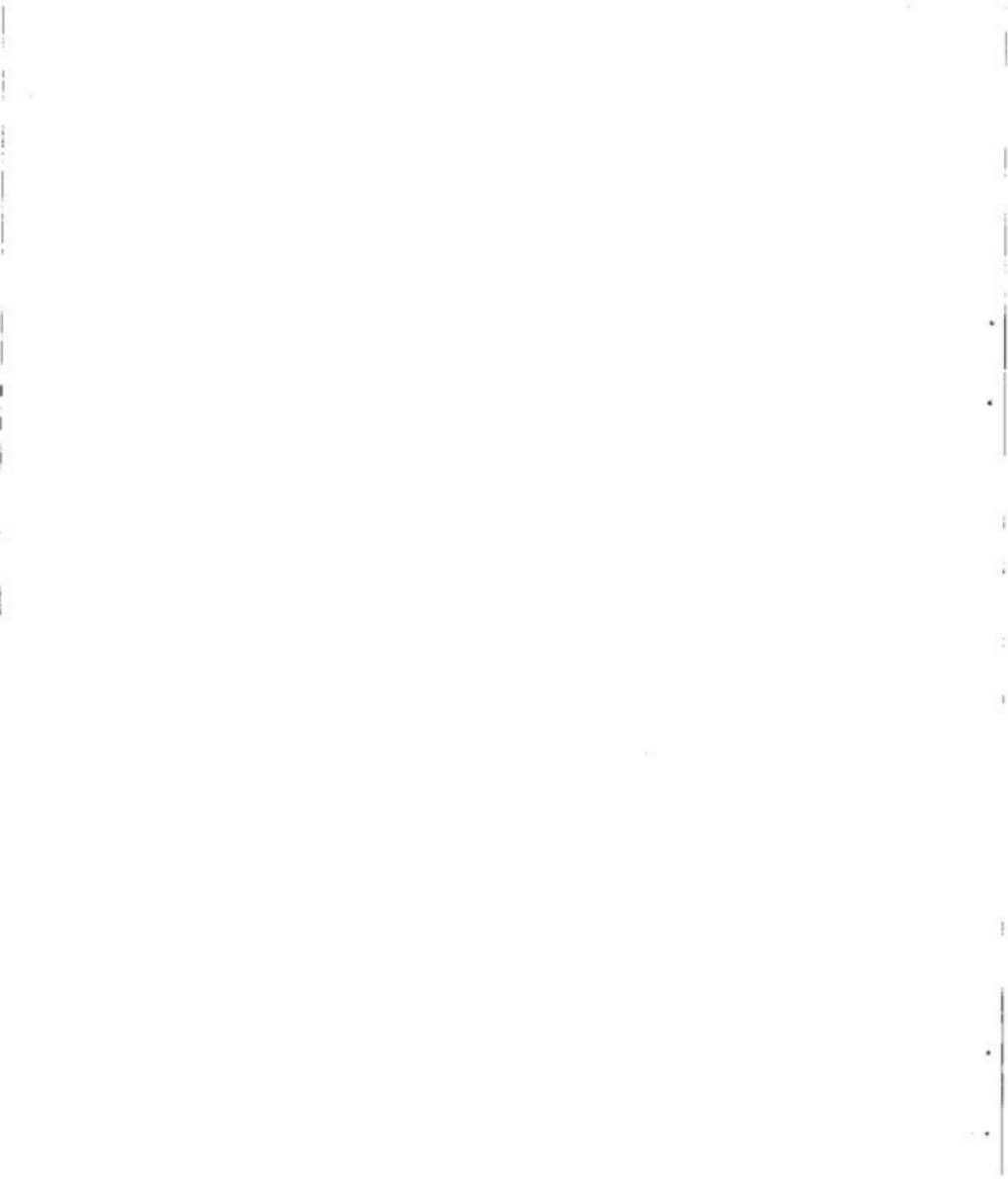
(3). 细形铜刺と勾玉。
(14地点—Fig. 8)



(2). 壶形土器(13地点—Fig. 6-3)



(4). 壶形土器(13地点—Fig. 6-1)



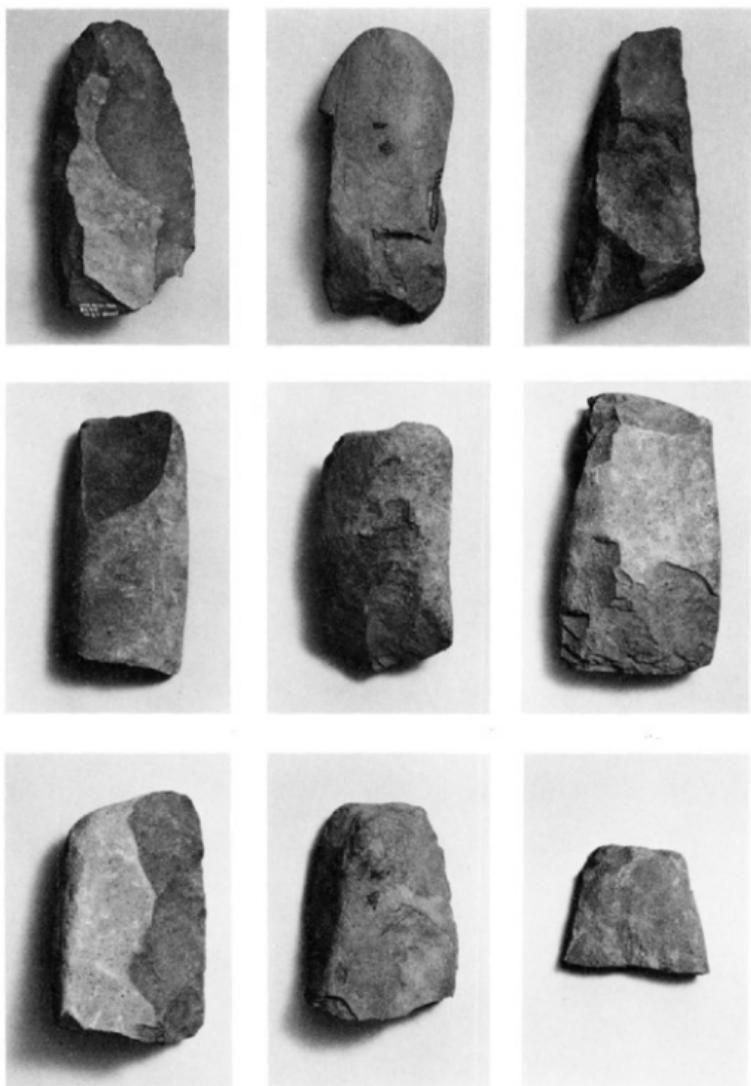


(1). 手焙形土器(42地点—Fig.51)



(2). 小形タコ壺(42・43地点—Fig.49)





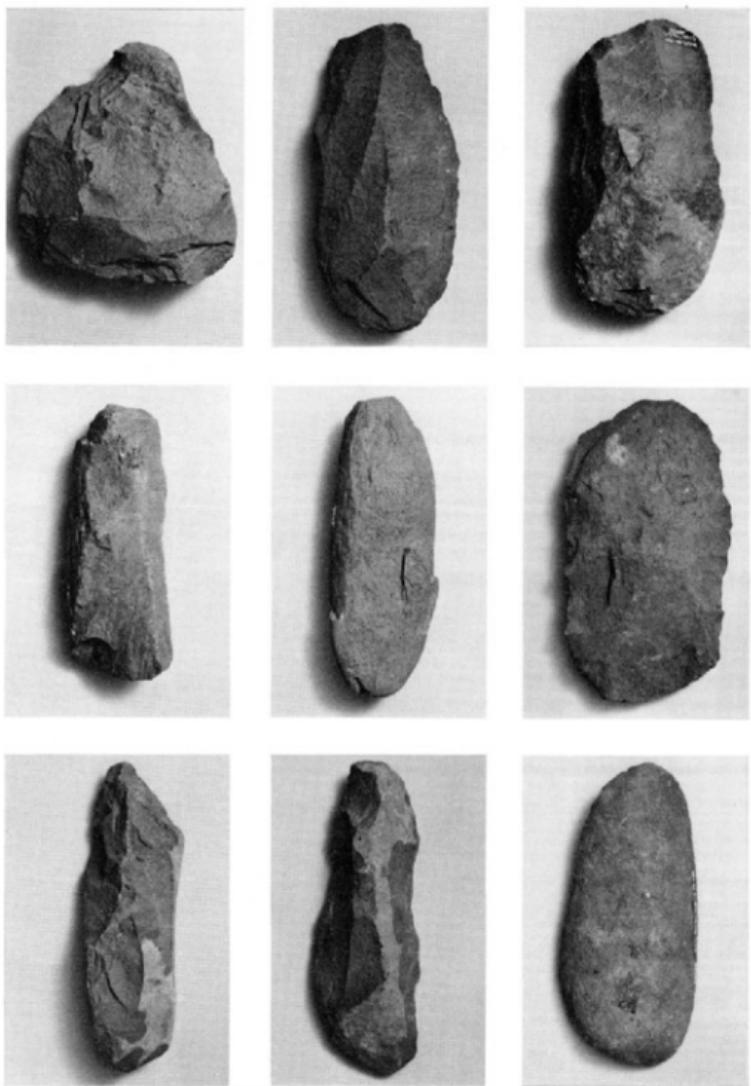
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig. 14・15・16)



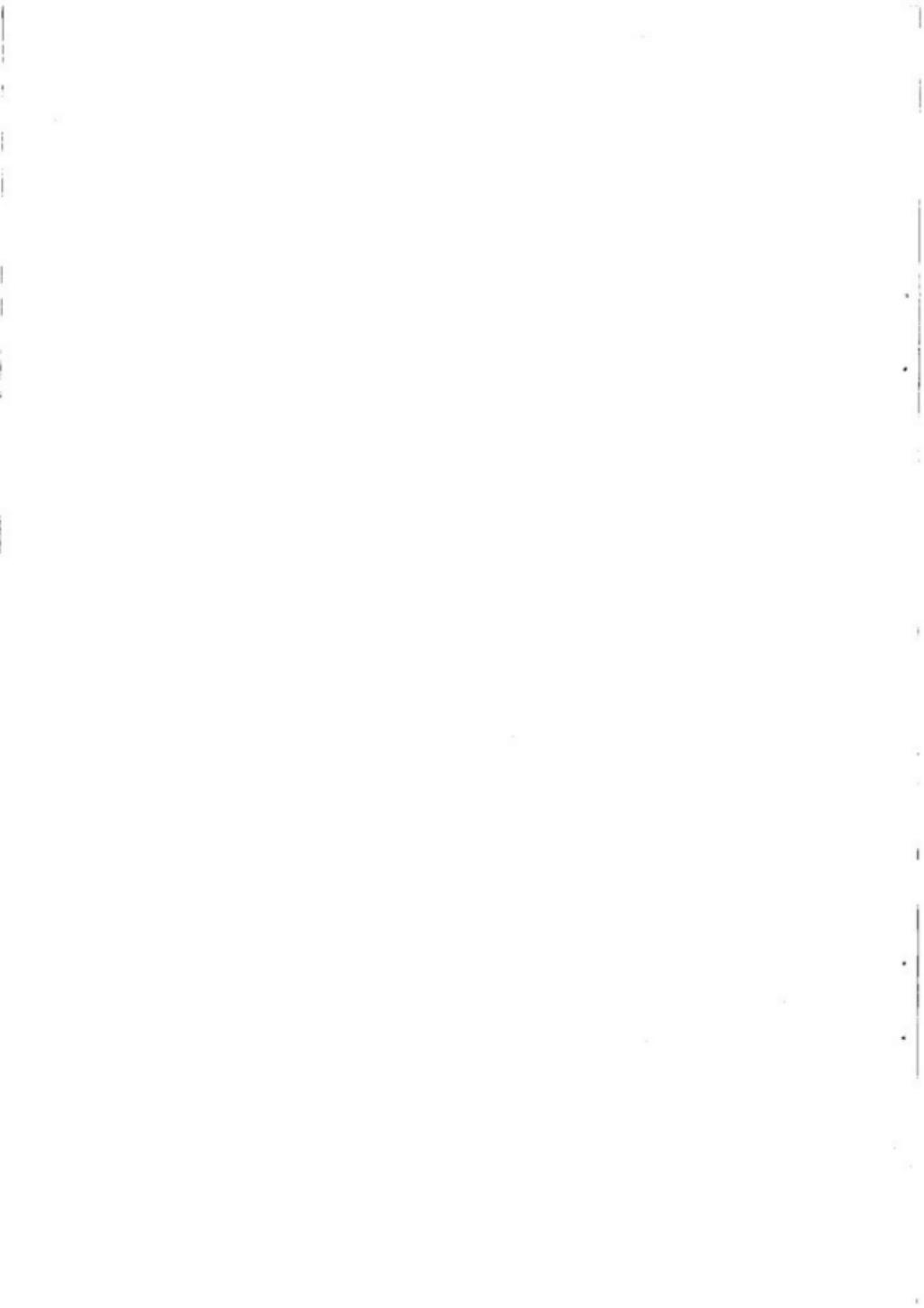


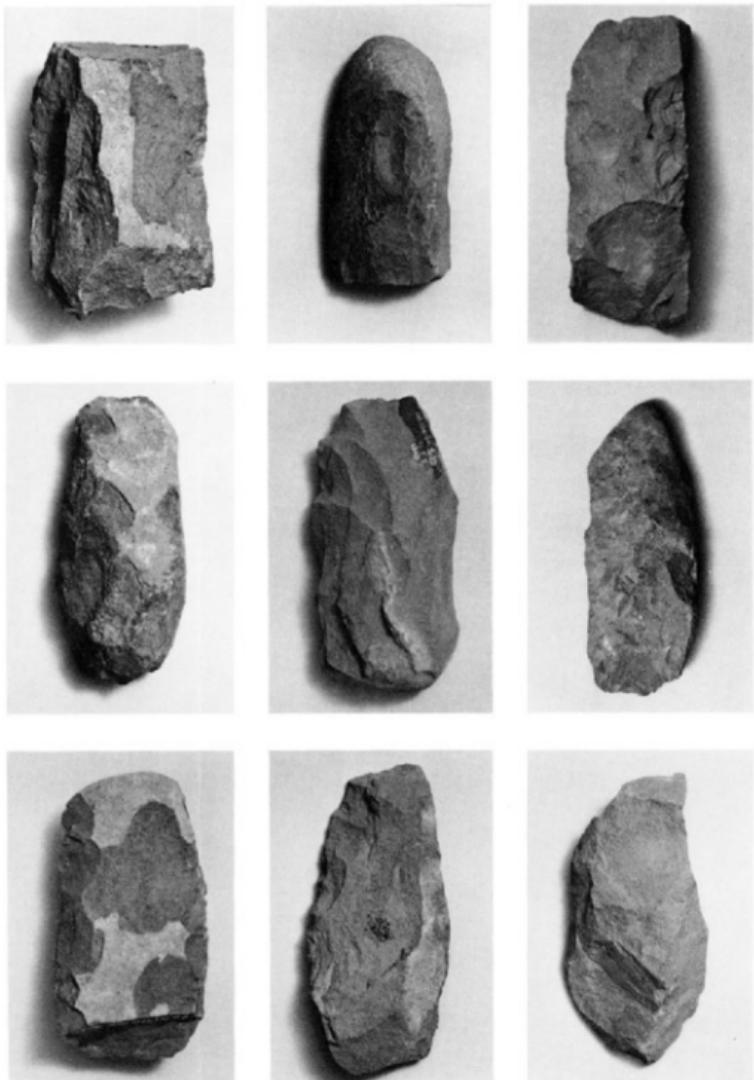
今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 16-10~ Fig. 16-18)



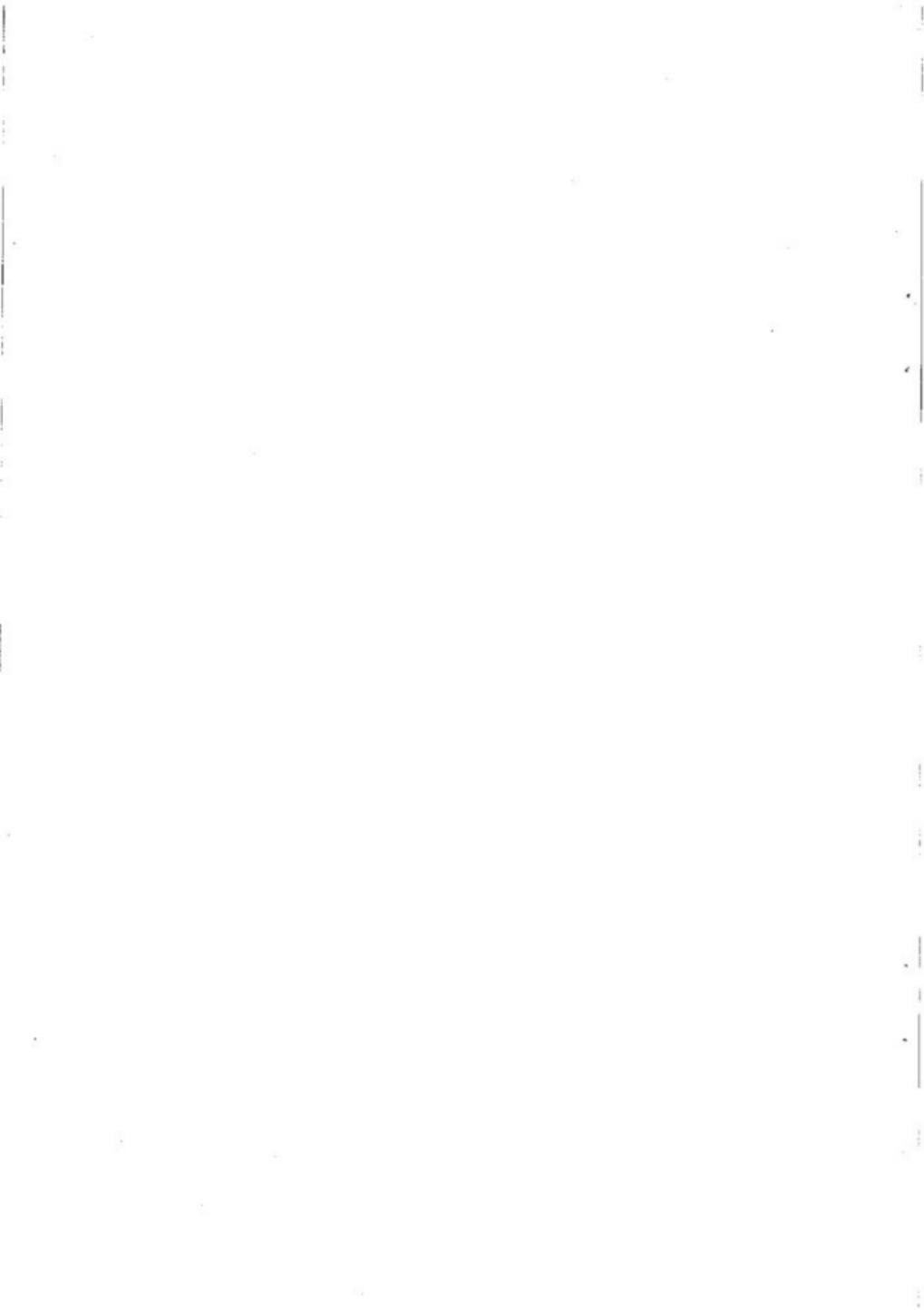


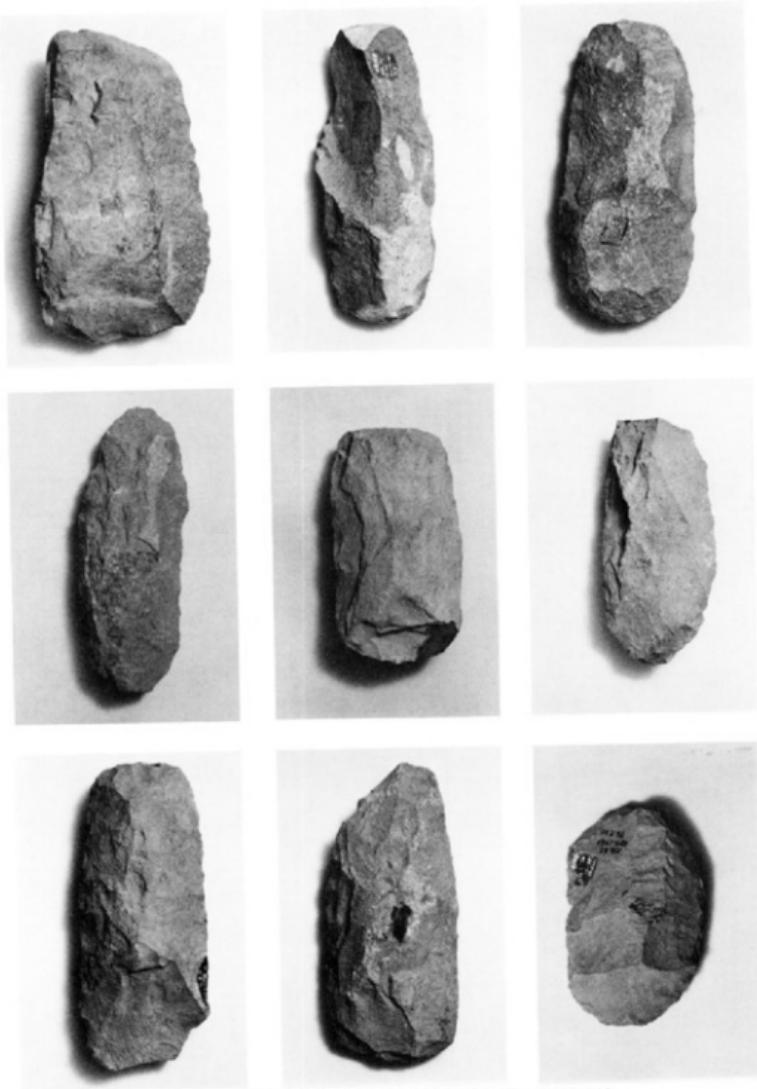
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.18-19~Fig.21-27)





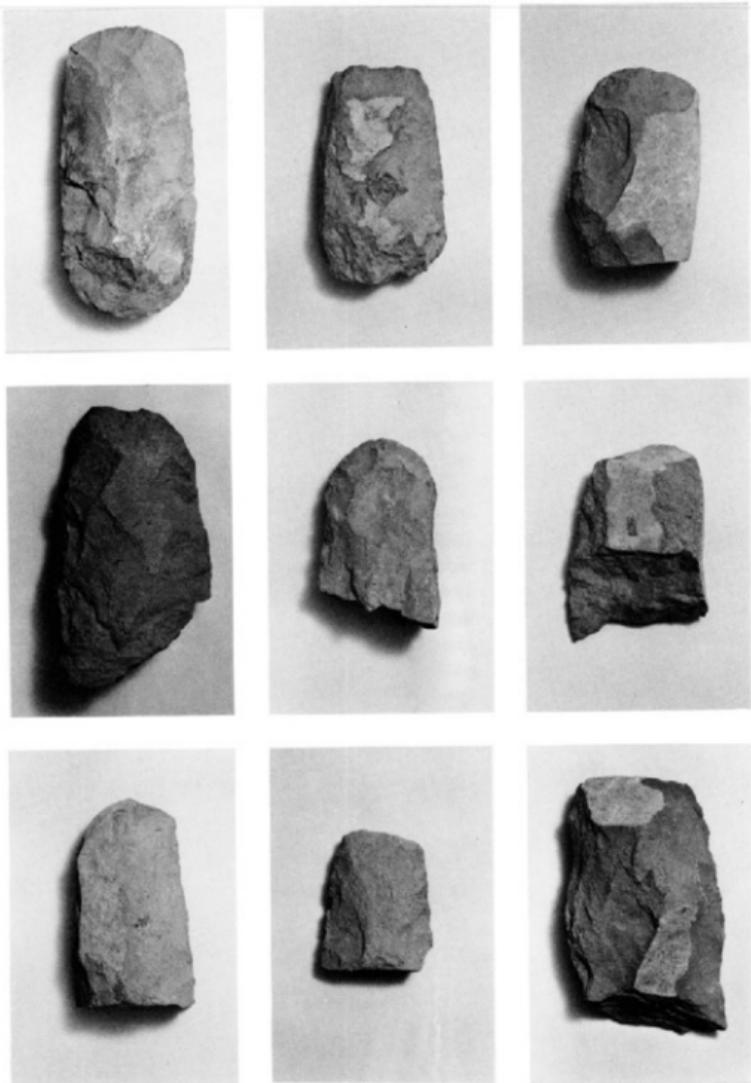
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.21-28~Fig.23-36)





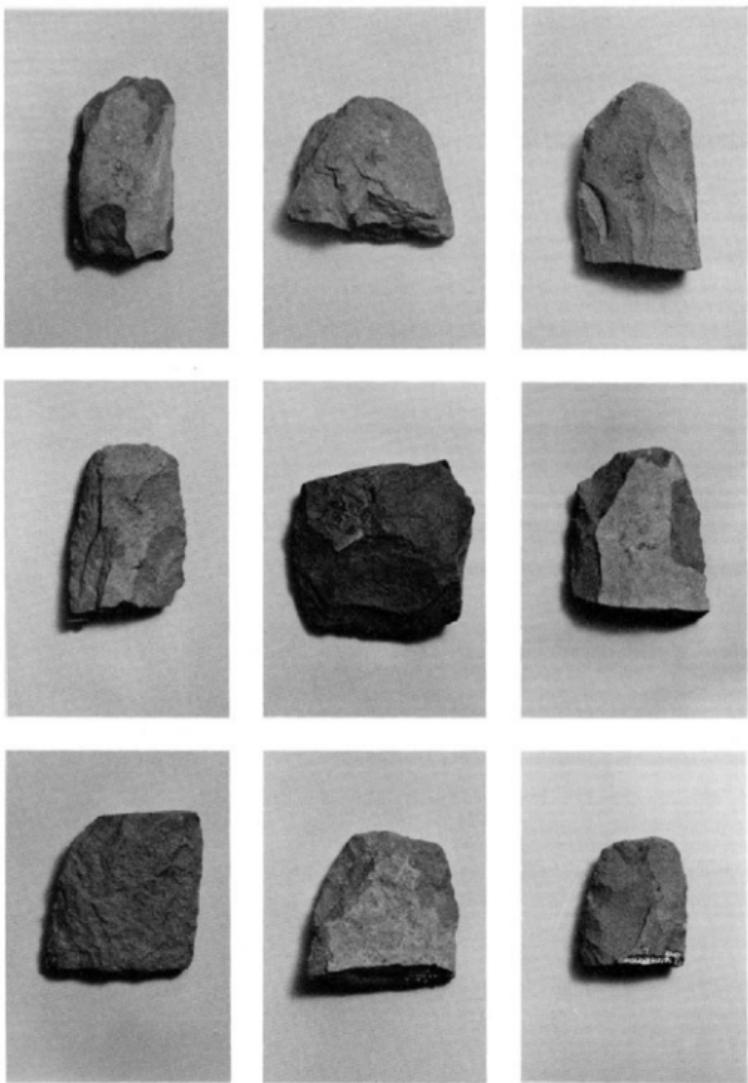
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.24-37~Fig.25-45)





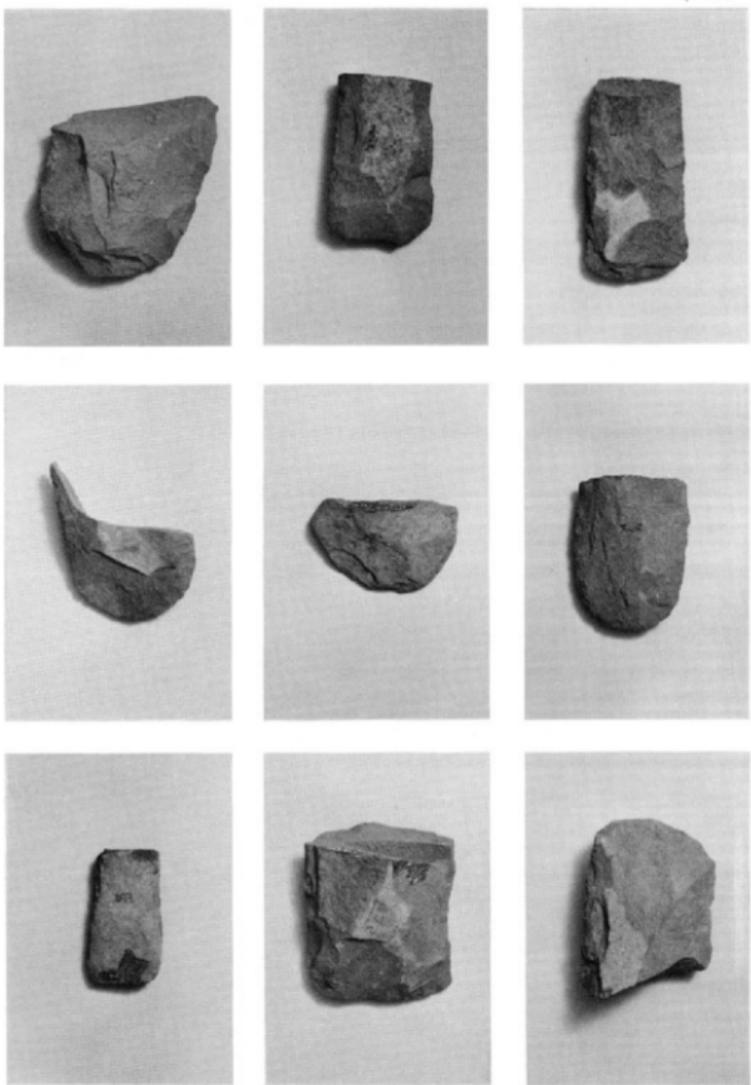
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.25-46~Fig.26-54)





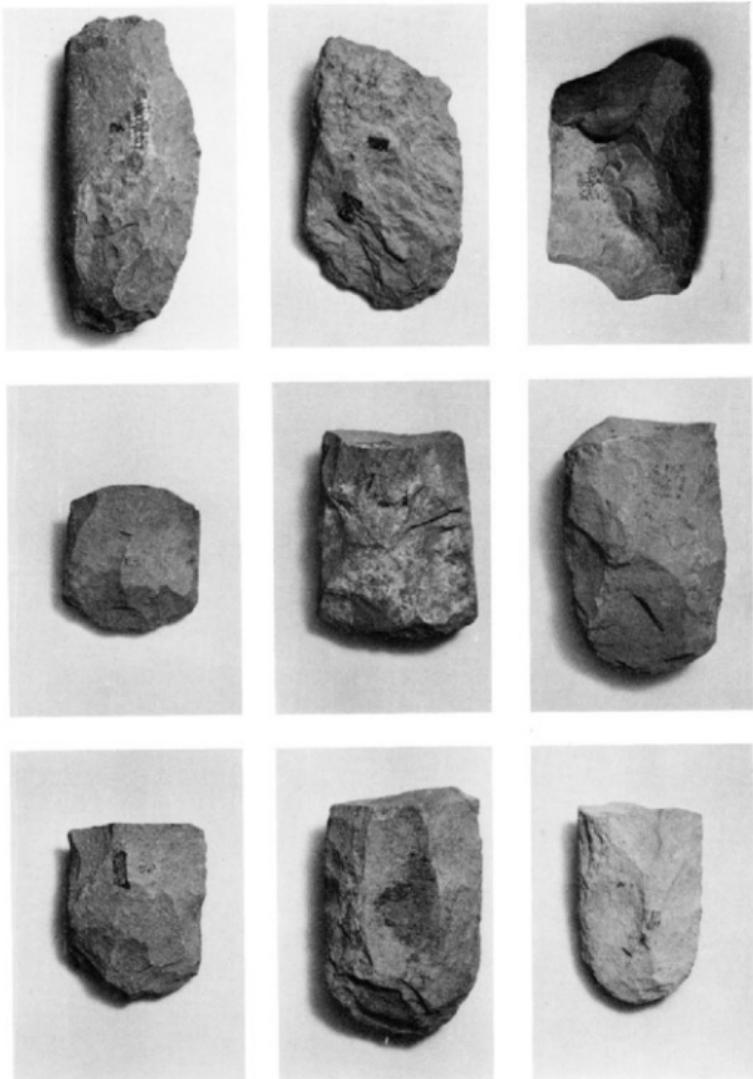
今山43地点出土の石斧未製品(Fig.26-55~Fig.27-63)





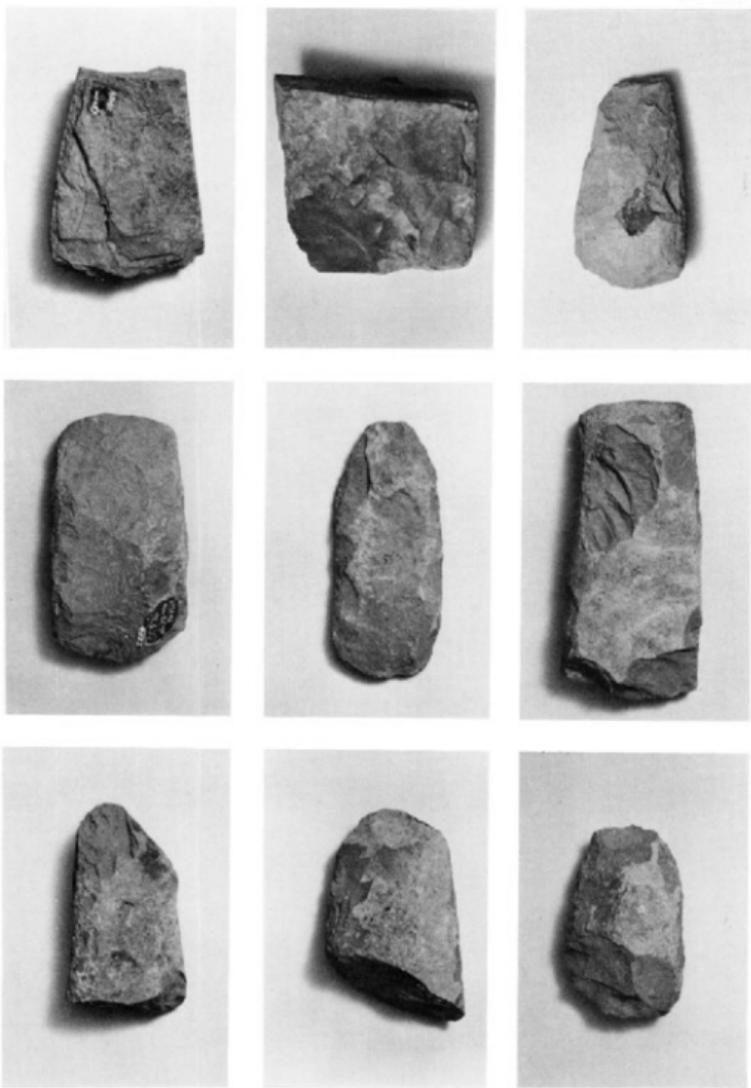
今山43地点出土の石斧未製品(Fig. 28-64~72)





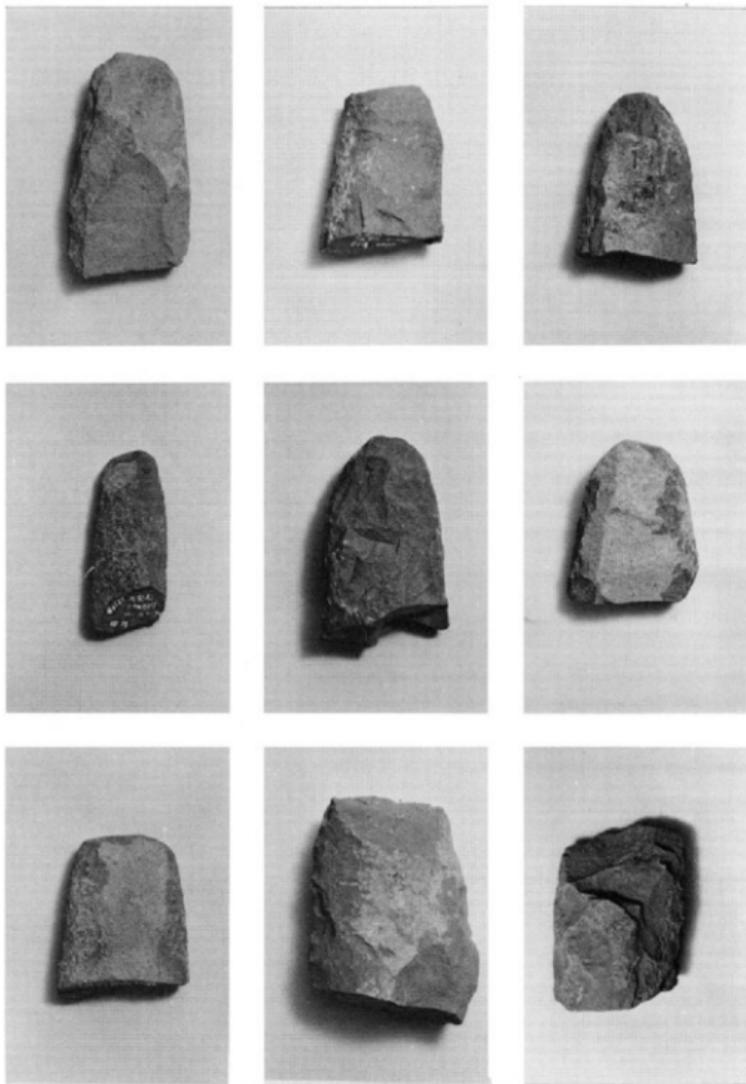
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.29-73~Fig.30-81)





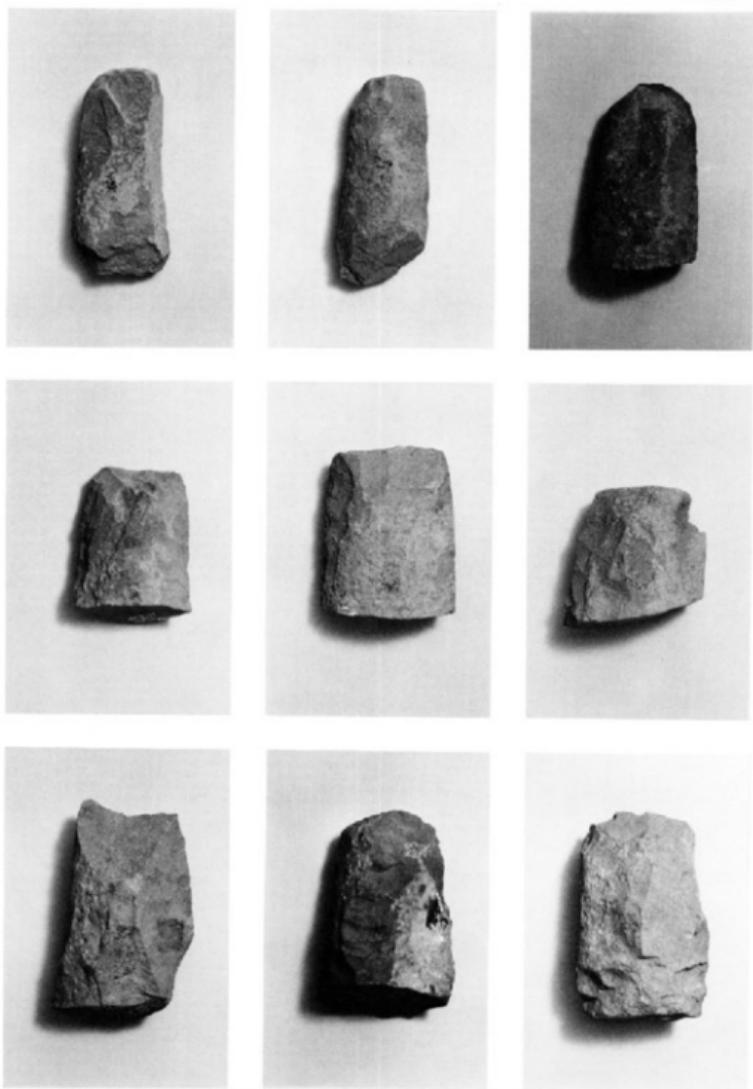
今山43地点出土の石斧未製品(Fig.31-32～Fig.33-30)





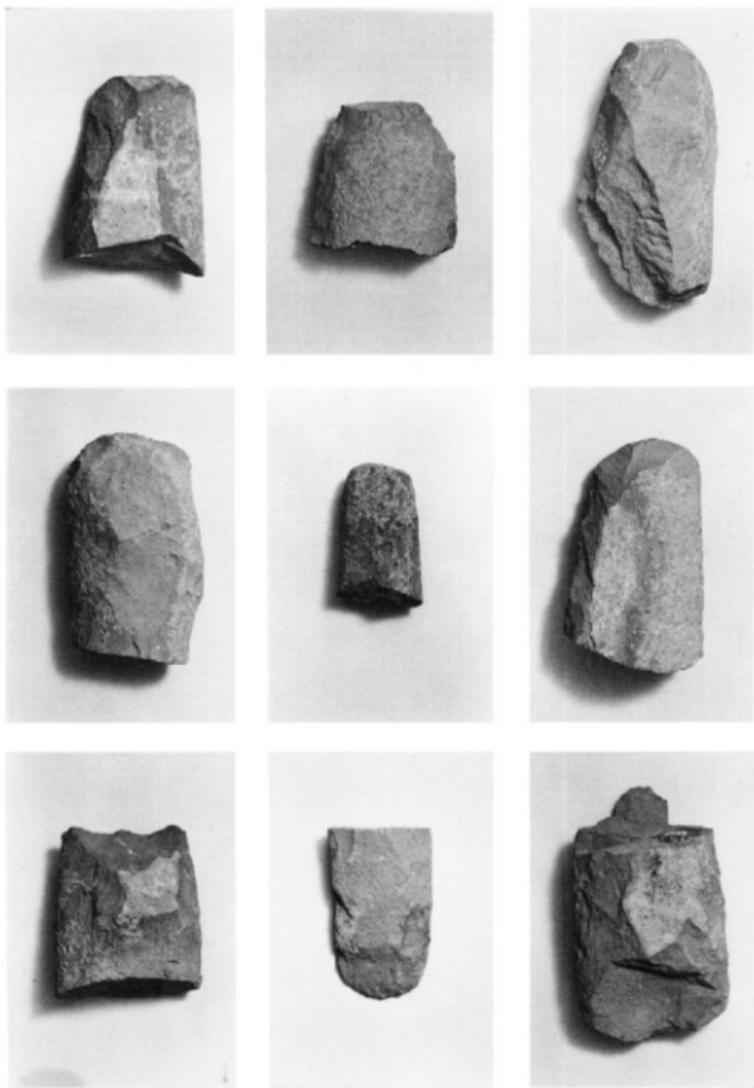
今山43地点出土の石斧未製品(Fig.33-91~Fig.34-99)





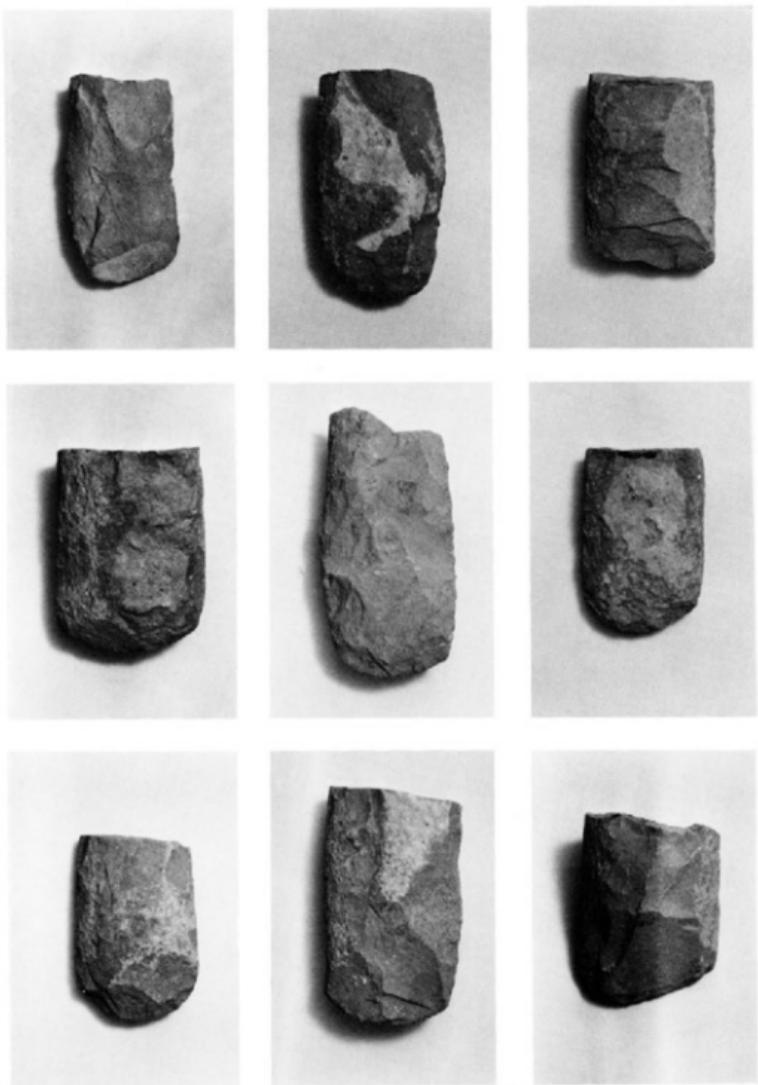
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.34-100~Fig.35-108)





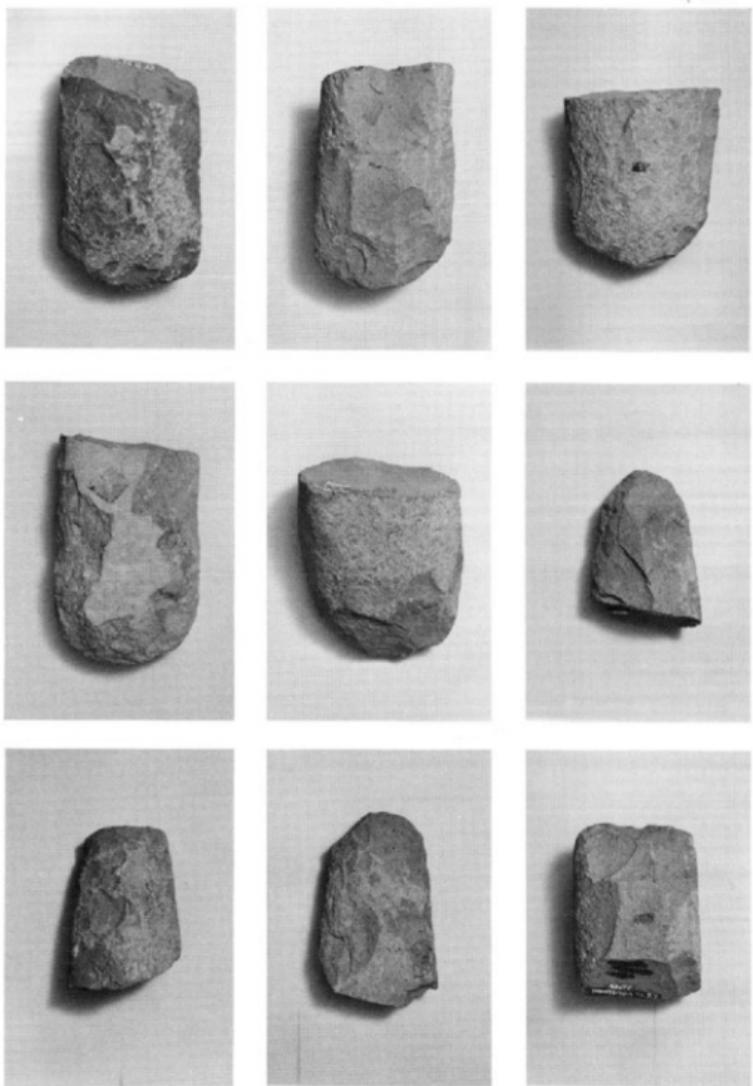
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.35-109~Fig.37-117)





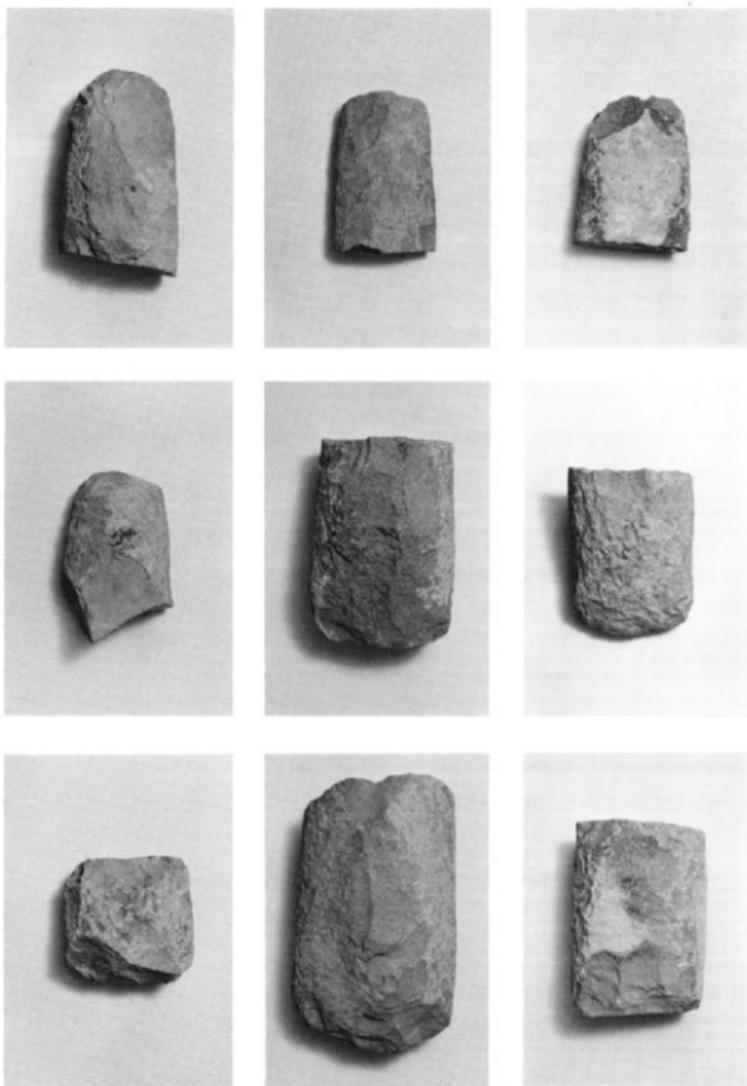
今山43地点出土の石斧未製品(Fig.37-118~Fig.39-126)





今山43地点出土の石斧未製品(Fig.39-127~Fig.40-135)





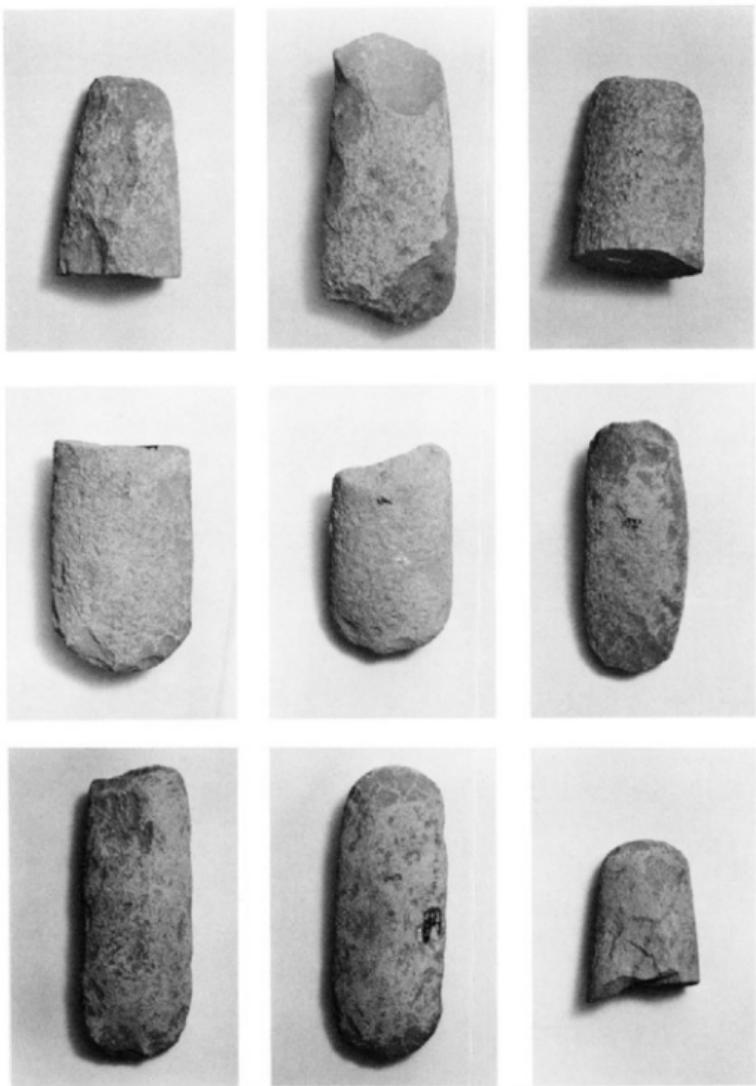
今山43地点出土の石斧未製品(Fig.40-136~Fig.41-144)



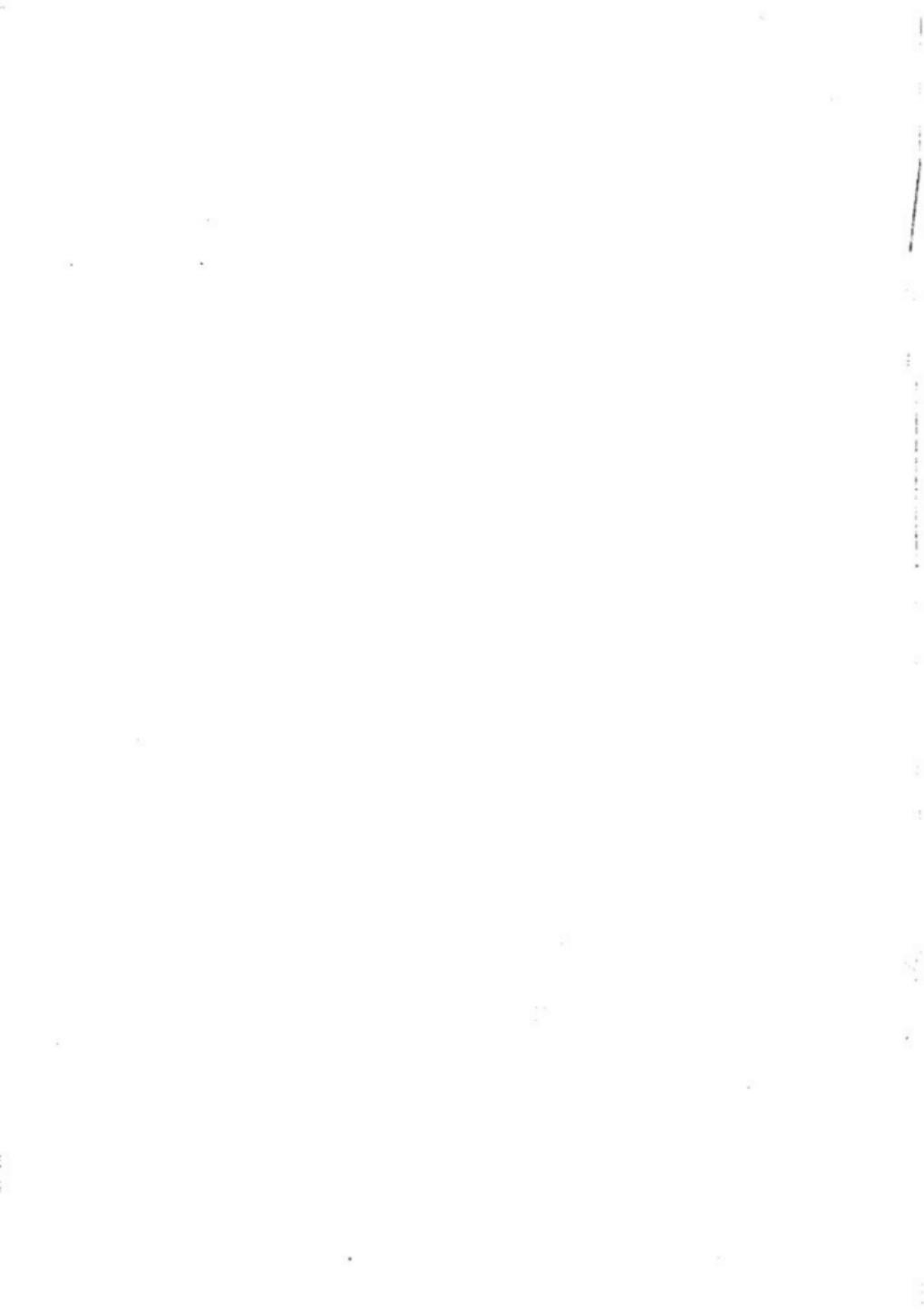


今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.41-145～Fig.43-153)





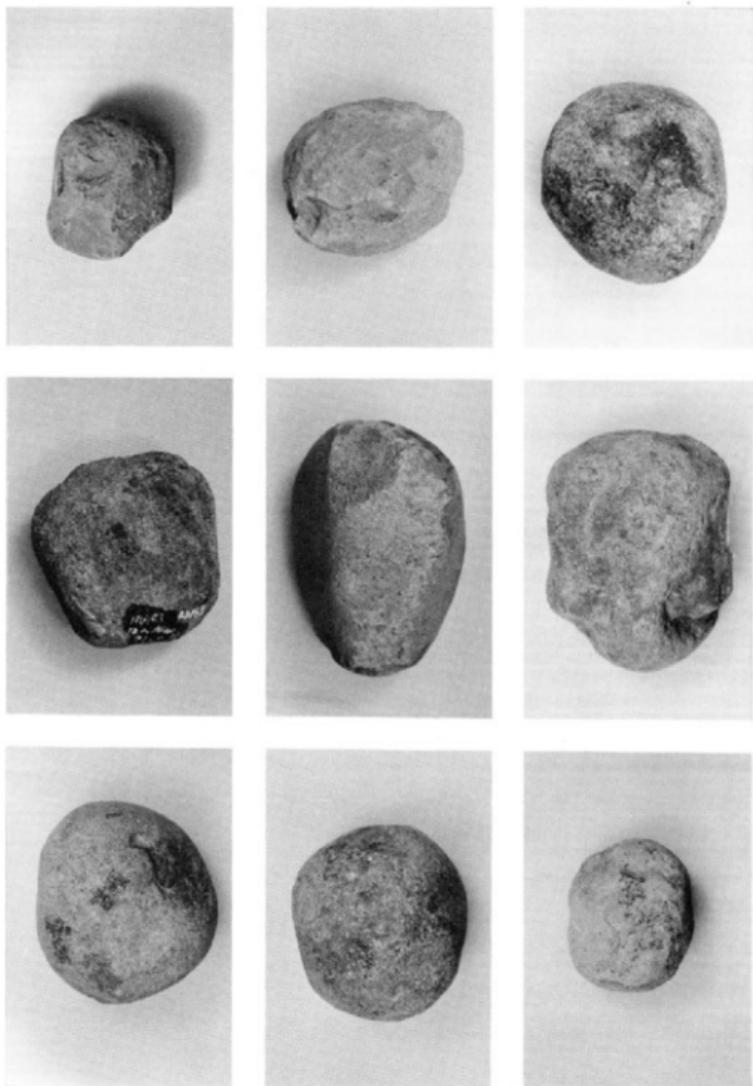
今山42・43地点出土の石斧未製品(Fig.43-154~Fig.45-162)





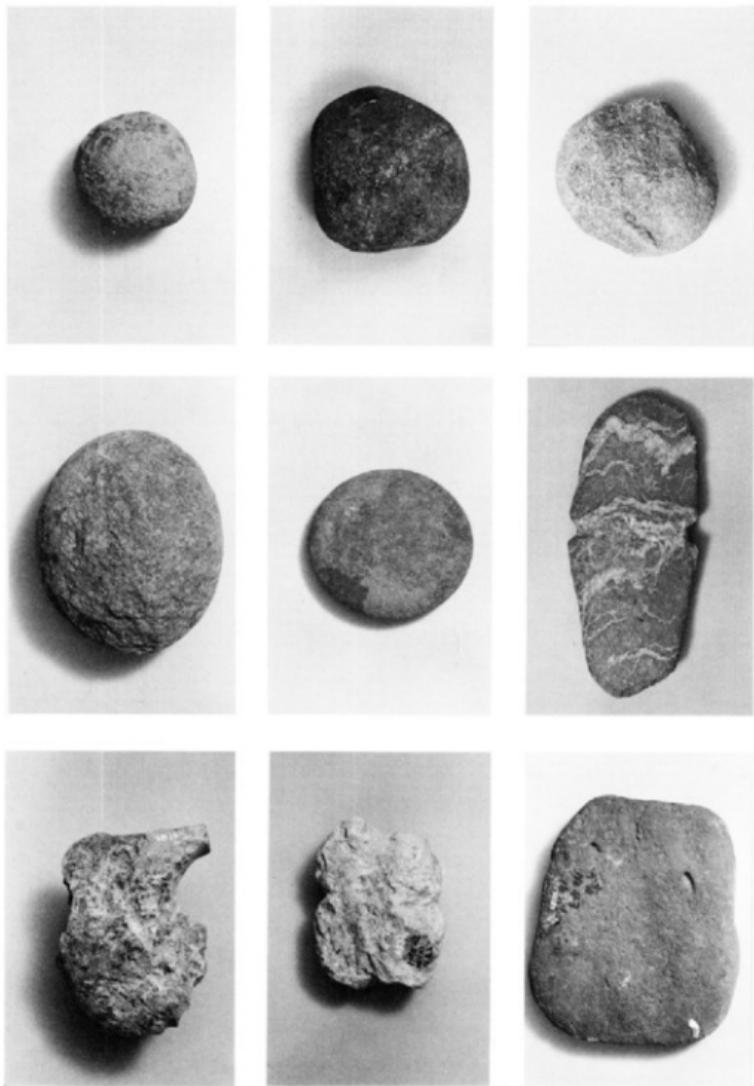
今山42・43地点出土の各種石器(Fig. 45-162～Fig. 47-172)





今山43地点出土の敲打用石器(Fig.47)





今山42・43地点出土の各種石器(Fig. 47・48)



福岡市西区

今山・今宿遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集

1981年（昭和56年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

印刷 株式会社西日本新聞印刷

今山・今宿道跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集

1981

福岡市教育委員会